

金の星

八月号



国立国会
8. 3. 26
図書館

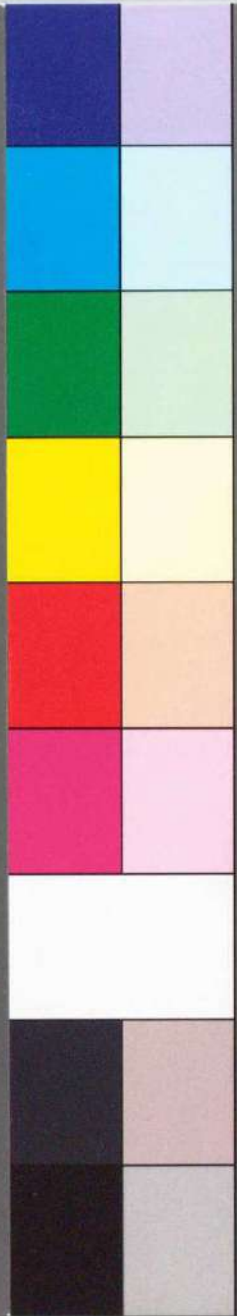
第八号

第七卷

Z32-B88

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

C Y M

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

© Kodak, 2007 TM: Kodak

カルピス

運動直後の飲料は

た、カルピスあるのみ

一吸ごとに

氣力の恢復を

もたらす



醫藥所 酒店・食料品店・藥店

日本一の畫噺

お子様達のお相手^{あいて}なしに、面白^{おもしろ}いお喋^{はなし}が次々^{つぎ}と雪^ふと一緒^{いっしょ}に躍^{おど}り出す、それはうれ^{うれ}しいお本^{ほん}でな^う。

オトキウタ

第一卷より第三卷まで 四六倍判全三冊
定價各一冊 金八十錢 送料各金八錢

オハナシ

このオハナに都下有数の私立小学校の補助教料
として探にさへ居ります。

（四六半藏全三十五冊）定價各金二十五錢、送料各四錢
ひらがな文・桃太郎、浦島、舌山雀、猿蟹合戦、文福茶釜、藤
老山、花咲爺、一寸法師、痛取）

カタカナ文(牛若丸、曾我兄弟、楠公、清正、爲朝、龍宮メ
リ、山メグリ、車ト遊、オチノ糧古、水アヂ、神様、輕
業、猿熊、魚牛、象ノ遊ビ、品メチ、ボチノ藍ツクシ、家
鴨ト、猫ノ世界、兎ノ世界、蟲ノ世界、動物園、兵隊ゴツ
コ、海軍、め二通あります)

お伽のお父さんおやのちちさん、巖谷小波先生いわやこなみせんせいが皆さんのためにいろ／＼のお歌を唱へるやうに書いて下さつたもので、それに添へた美しい畫に、お芝居を見るときと同じく、お眼がはつきり判る、これ程面白いお本に、少いと思ひます。

第一卷	花咲童	カチカチ山	お月様	猫と鼠
第二卷	橘太郎	坊のお家	お馬づくし	曾我兄弟
第三卷	牛若丸	ひよつ子	運動會	舌切雀

鹿島鳴秋著 (文部省認定圖書)

第一卷 依忠助、タリ、坊主、熊貓、蛙合戦、外二十課まで
第二卷 森ノ芝居、遠足、お花ノ洗濯、夜汽車ノ太郎、外廿課まで
第三卷 泳ヲノ名人、ユクマレ島、留守ノ家、庭ダフリ、四本
第四卷 福引、かるた會、雙六、夢の覺、外二十課まで
第五卷 鳩と太郎父の顔、トシダ番人、妙な獲物、外二十課まで

通 橋 本 日 京 東

丸善株式會社

●ルビ丸●田三●田神 京東

野口雨情先生著 裝幀 蘆谷紅兒畫伯
挿畫 寺内萬治郎畫伯
武井武雄畫伯
胡表紙箱入美本・定價 金壹圓八拾錢
內容 二三〇頁・送料 拾貳錢
雨情先生の童謡集で目下發行中のものは本
書あるのみ。先生の最も圓熟せる時代の傑
作のを集めた本書こそ、童謡研究家の座
右に無くてならぬ名著である。好評忽ち五
版!

金の星童謡曲譜第九輯

中山晋平先生作曲

野口雨情先生作詞
竹久夢二先生装畫

(目曲)

あの町この町あの町この町。木本の葉のお母。高野山。嵐のおばさん。獨ばやし。雀などり

『あの町この町』は中山先生の作曲中で最大の傑作と稱せられてゐるばかりでなく、又日本童謡作曲中での一を爭ふ名曲であります。尚、他の五曲も寶玉の如き作であります。大好評を受けてゐるものばかりです。愛好家に捧げて御批評を待つ。

東勤 京坂 市町 本三 郷五 區九 金の星社 振五 替九 口五 座九 東六 京番

野口雨情作歌
眞島睦美振付
本居長世作曲
童謡
舞踊
十五夜お月さん

菊列美装
 振付寫眞多數入
 榮譜付全一册
 定價壹圓
 送料四錢

◀次目▶
 十五夜お月さん
 十五夜お月さん
 七つの子
 藤る燕

(甲)
 (乙)

出版圖書
目錄贈呈

振替東京電話
二五二〇番
二三八番浪花
三六二七番
四一四〇番

(刊新最)

中山晉平作曲 眞島睦美振付
童謡
小曲 學校舞踊下

四六倍判美装
全アト紙色刷
振付寫眞及樂譜付
定價壹圓五拾錢
書留送料拾六錢

◀次目▶

鑒(イ) かりがね
鑒(ロ) 黃金むし
砂山(イ) 南京玉
砂山(ロ) 鈴立し鈴虫

發行元

東京日本橋
南茅場町
大倉書店

(刊新最)

中山晉平作曲 眞島睦美振付
童謡
小曲
學校舞踊上

四六信判美装
イアト紙二色刷
振付寫眞及樂譜付
定價壹圓五拾錢
書留送料拾六錢

◀次目▶
舌切雀籠祭り
狐のだんぶくる
シヤボン玉
鳥籠

め皆さんにお馴染みの諸先生を始め、皆さんがお馴染みの諸先生に、児童に真真の美が子供供位に振付けせられたものであります。本知踊は今迄の遊戯として全然行方方を異にした藝術味豊かなものであります。また本校に於ても家庭に於ても大人も子供も共に演ずることが出来ます。本書は四六倍判全一、紙二色刷の美本であります。して其の一舉一動を示した数種、葉の寫眞の美しきは装幀の優雅なものと相俟つて音楽書として書畫を飾るにも最もふさわしいものであります。童謡等、踊教育舞踊學校舞踊と分たれてゐるものでは、然然と區別があるものではありません。何れを何處に於ておやりになり、として御本人も又新しく舞踊として御本人も又周囲の人々も御満足を得られます。この確信救済ものであります。

沖野岩三郎先生著.. 裝幀 寺内萬治郎畫伯
挿畫 水島爾保布畫伯

童話 金の釣瓶

四六判箱入美本
本文一五〇頁
挿畫二色版外數頁
定價金壹圓
送料 六錢

讀んだん後て必ずあよ
かつたと喜んでんて頂けるよ

お待ち兼ねの沖野岩三郎先生の童話讀本の第二輯として『金の釣瓶』が出版されました。日本に於ける最初の童話讀本を作つたのが沖野先生であるだけに他から發行されてゐる同種類の本とは全く比較にならない程立派なものです。幾度讀んでも面白く、そして讀めば讀む程お話の中から餘い教訓を受ける處に童話讀本としての『金の釣瓶』の値打ちがあります。

本書の發行は『金の星』の愛讀者の方はいふまでもなく、一般の家庭のお母様からも、それから又、各學校の兒童圖書館からもすぐ讀みたいから送れといふスバラしい申込みを受けてをります。どうぞ大急ぎで御申込みをいた

東京本郷町三九五
金星社
東京本郷町三九五番

永橋卓介編・裝幀挿畫 高坂元三・園田 宏

世界童話 叢書第三編 ろゝあ童話集

四本挿定
六文畫價
判三圓拾
箱〇五拾
入八數貳
美八拾錢
本頁枚錢

目次
馬鹿のイワン
龍の舌
空の船
金、の山
裸の王様
イリアの話
脚なしニキタ
不幸な子たち
夢、の牛
二人の囚人
ろゝあには、また他の國と異つた、種類の味のある、面白い話しが澤山にあります。その中から、興味の深いものばかり、十三篇を選んで皆さまの御覧に入れます。裝幀と挿畫の美しいのと、價の廉いことは、他に真似のない、本書の特色であります。

世界童話叢書 第一編	支那童話集 (再版)	定價金壹圓五拾錢 送料 拾貳錢
世界童話叢書 第二編	印度童話集 (既刊)	定價金壹圓五拾錢 送料 拾貳錢
世界童話叢書 第四編	佛蘭西童話集 (近刊)	定價金壹圓五拾錢 送料 拾貳錢
世界童話叢書 第五編	獨逸童話集 (近刊)	定價金壹圓五拾錢 送料 拾貳錢

東京市駒込外八
金星社
東京市駒込外八番
電話 六七四〇番



挿	頼朝七騎落	寺内萬治郎・水島爾保布 岡本歸一・竹久夢二
出版	(特別附録)	
通	秋田	
赤羽	お祖母様をお送りして(綴方)	
田	て自由巻	
よ	(三) 山本 鼎選	
信	(二) 沖野岩三郎	
出版	(一) 西川 勉	
八	大地獄めぐり	
郭	公	
毒	蛙の死	
針	毒を入る	
只	四郎のお嫁さん	
縮	物語オデッセー物語	
ギ	二つ岩の貉	
二	つ	



船	よ	寺内萬治郎
動	走れ	
王	女を奪つて	
鳩	さん茶買ひ	
同	作	
蜂	の	
二	人	
ある	手品師の話	
童	あ	
舞	の	
小	鳥	
波	の上を歩く人	
外	の	
四	つの幽霊	
船	の	





動いちゃいけない

(金の星巻)

岡本 歸一 畫

て ひ 奪^{うば} を 女^め 王^わ



(第十五頁の「二人兄弟」を御覽下さい)

畫郎治萬内寺

成城小學校國語研究部編 (最新刊)

お話と聴方教授資料

内容

本書は聴方教授の實際方法を示し、その材料を蒐めたものである。今日までお話、又聴方教授の材料の選擇に腐心された方々は、本書の出づることによつてその困難から救はれることと思ひます。一年程度五十一篇、二年程度二十七篇、三年程度二十四篇に割當てられてあります。

菊判上製

定價 三圓五十錢

送料(書留)十八錢

小山内 薫著 吉田 謙吉装幀 (最新刊)

童話劇 二つの願ひ

四六判二二〇頁

定價 一圓六十錢

送料(書留)十二錢

築地小劇場にて近く公演せられる童話劇です。新人吉田謙吉氏の筆になる美しき装幀にて生れました。次目一、三つの願ひ 二、三、人形 四、イルゼベルの望み 五、狼の教訓 六、そら豆が煮えるまで

兌發

東京市牛込区
山伏町一丁目

イデー書院

電話 牛込六五三
振替 東京一五五三六

最新刊

『奴隷トム物語』を読んで、清い涙を流さない人があれば、その人は魂のない人です。涙の物語として、世界的名作に挙げられてゐる『奴隷トム物語』は、どういふ譯か日本には、少女少女の讀物としてまだ紹介されてゐませんでした。これ程の立派な物語がどうして紹介されなかつたかと、不思議に思はれる位です。此の物語は、米國で盛んに使はれてゐた哀れな奴隷達の生活を書いたもので、牛馬のやうに賣買された奴隷達が、どんな悲しい生活をしてゐたか、その悲惨な物語りです。

主人公トムは深く神を信じ、如何なる苦しい生活の中でもよく堪え忍んで行きます。トムのけなげな精神は、讀者を泣かせずに惜かないでせう。偉人リンコルンによつて行はれた奴隷廢止運動には、ハリエツト・ビーチャー・ストウ夫人の作になる此の『奴隷トム物語』が最も役立つたといふ事は、この本を讀む上には是非記憶して頂きたい。

東京市本郷區動坂町三五九番

金星社

振替東京五九五六番

奴隷トム物語

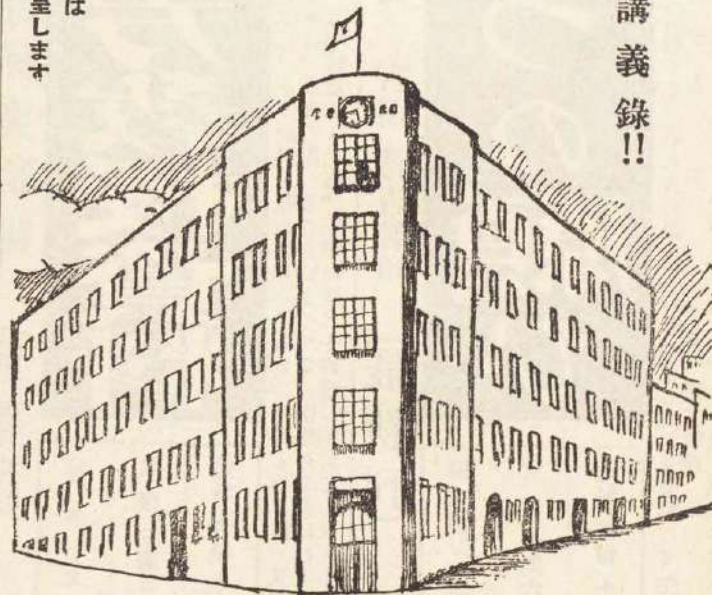
四六判箱入美本
本文二〇〇頁
挿畫三色版外數頁
定價 九十錢
送料 六錢

世界少年少女名著大系 (27) 金の星社編 裝幀・寺内萬治郎畫伯

創刊は第一番古く内容に新し
大日本國民中學會
會費は少く卒業が早い

會員大募集
講義録見本つき規則書は
申込み次第無代で進呈します

世界の
中學講義録!!



東京神田駿河臺

大日本國民中學會

電話大平 五七七一〇番 振替東京 二四〇〇番

金の星 世界少年少女名著大系

第六判箱入類本・定價各冊十九錢 送料金六錢

金の星社の名著大系は少年少女の爲めに書かれた世界的名著を、最も面白く、又最も解りやすく、しかも、クロース製本箱入りの非常に立派な本を、他に例のない安い定価で發賣するので、熱烈な歡迎を受け、増版又増版の有様です。皆さまの愛讀書としては非お揃へ下さい。

第一編 ロビンソン漂流記

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸るまでの長い物語りです。これ程澤山讀まれた本はない。この本を讀まない者は、一生の不幸です。

第二編 ナポレオン物語

ナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の一孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化絶りない物語です。

第三編 ドン・キホーテ

イスパニヤの有名な物語。毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語りです。

第四編 コロンブス物語

アメリカ大陸を發見した大偉人コロンブスの物語りです。コロンブスがあらゆる困難と戦つて、遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化絶りない運命を畫いた血と涙の物語りです。この偉人の傳記を書いた本は餘りないので、非常にめづらしい本です。

第五編 大人國小人國のぐりガリバアー旅行記

ガリバアーが、難船して小人國に漂流して、奇想天外の滑稽をやリ、再び航海に出て大人國に漂流し、そこでさん／＼な目にあひ、漸く覺にさらはれて、本國に歸つて来るまで實に面白い物語りです。

第六編 ロビン・フッド物語

英國に傳へられた有名な物語りです。もとは伯爵であつたロビン・フッドが悪い男のために國を棄れて遂に義賊となつて、シャーウッドの森にかくれ、王を救ふ戦ひ起したり、悪い僧正をやつつけたり、そして最後に毒殺されるまでの變化の多い物語りです。

第七編 アラビヤン・ナイト

アラビヤン・ナイト程面白い物語りは、世界の童話文學を通じてないといはれてゐます。千年餘の間も語り傳へられた物語りである事を考へても、如何にこの物語りが讀者に興味を與へてゐるかわかります。アラビヤン・ナイトの中でも、特に面白いのばかりが集つてゐます。

第八編 ギリシヤ神話 オデッセー物語

ギリシヤの詩聖ホーマーの作であつて、世界中で一番古い、そして又一番面白い物語りです。トロイの戦争に悉々海を越えて出征した勇士オデッセーが神の怒にふれ、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食となつて本國に歸る迄の物語りです。

第九編 シエークスピア物語

有名なシエークスピアの芝居の中で、面白いものばかりを選んで、物語り風に書いたものです。『テムレスト』『御意のま』『エニスの商人』『が／＼女朗し』『夏の夜の夢』『冬の夜はなし』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

金の星 世界少年少女名著大系

第六判箱入類本・定價各冊十九錢 送料金六錢

金社の星編 世界少年少女著名大系

銭六金料送・銭十九金冊各價定・本美入箱判六四

編九十第	編八十第	編七十第	編六十第	編五十第
アンデルセン童話	ギリシヤ英雄物語	奴隷トム	こども聖書物語	ローマ英雄物語
近刊	近刊			

ローマの英雄を中心し、ローマ歴史を語ったもので、面白く一大英雄傳です。ローマを最初に開いたロムユラスとレマスの不思議な物語から、シーザーや、ハンニバルなどの大英雄の合戦の話など、順々にあらはれ息もつけぬ面白い物語です。

『バイブル物語』と呼ばれる、歐米各國の少年少女が、幾度となく繰返し讀む有名な物語です。日本の『古事記』のやうな物語で、ユダヤの國の昔にあつた、神様と人間との不思議な物語です。『新約物語』と一しよに讀んだら、聖書のことがわかつて面白味が深いでせう。

白人種のために大猫同様にあつかはれてゐた奴隷の涙の物語です。偉人リッポルトンが現れるまで、米國のあはれた奴隷たちの生活を書いたもので、それから最初の頁から最後の頁まで涙なにも讀めぬ本です。博大、崇高な氣持が、この本によつてどんなに養はれることとせう。

金社の星編 世界少年少女著名大系

銭六金料送・銭十九金冊各價定・本美入箱判六四

編四十第	編三十第	編二十第	編一十第	編十第
西遊記	新約物語	日本古事記物語	入繪 イソップ物語	グリム童話
	子供キリスト傳			

グリムの童話は改めて述べるまでもなくドイツの有名な傳説研究家グリム兄弟の作つたもので各篇ともドイツの各地に傳へられた國民童話である。しかし、少年少女の珍寶として珍ばれてゐる有名なものになつてゐる内、本書の中に集められた作はグリムの数多くの作の内、最も有名な面白く、はかりである。童話の愛好者及研究家の御一讀を待つ。

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまでに、随分深山の本が出てゐる。しかし本書の如く、一つのお話に一枚づゝの立派な畫を入れて、お話と畫と兩方面白く讀ませる本は他にない。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたい。

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもあるまい。實際驚く程立派な、面白い物語りである。日本の國がはじめて出来た話から始つて神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからすつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話である。

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス、キリストの一生を聖書に従つて最も正確に書いた本である。この尊い人の一生を子供のために書いたものは他にない。本書はわが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したい。

支那から印度へ、はる／＼お經を取りに行つた玄奘三蔵の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で様々な魔物に出遇ふ奇々怪々の物語。一所讀み出した本を置けない世界的の佳作。この本を讀まない者は不幸である。

沖野岩三郎先生作 ■ 岡本歸一先生装幀及挿畫

八版發賣

父戀し

四六判箱入美本
本文二四〇頁
定價金壹圓
送料六錢

父様の船は歸らず
今日もまた
演邊に出たが
何としよう
風和いで
たぐ恨めしい
海の色よ
何故答へない
この聲に
(一讀者寄稿)

沖野岩三郎先生の一大傑作『父戀し』は大震災に原版を焼失し、久しく品切れになつてをりましたが、皆様の熱望止み難く、日々大多數のお申込みがありますので、此處に第八版を發賣する事となりました。長い間熱望されて未だお手に入らなかつた方は、この際大至急にお申込み下さい。部數に限りがありますから、近

日中に又も品切れになる恐れがあります。

(概梗の本篇))

紀州の濱邊に伊吹子と明治といふ姉と弟がありました。二人のお父様は漁師でしたが、或日、新しい船を造つて海へ出、まゝ家へ歸つて来ませんでした。後に残された母と子はどんなに悲しんだ事でしょう。併し、近所には親切な漁師達がいました。その人達と共に、姉弟は雄々しくもあらゆる困難と戦つて、父の行方を探ねます。そして最後に、滿洲まで行つて父にめぐり合ふといふ、涙と新りの一大幕篇であります。

主人公ハリンヌの涙の一生は如何に大きな感激を與へるでせう。

マローロー
三井信衛
一作譯

家なき娘

四六判箱入美本・本文三三六〇頁・定價金壹圓九拾錢・送料六錢

忽再版

原著は佛國文豪マローローの作であつて、歐米諸國の家庭に姉妹篇「家なき子」と共にこれ程廣く讀まれた本はないと云はれてゐる世界的傑作であります。我が國にも早くからその名は知られてをりましたが、原著が手に入らない爲めに、遂に紹介される機會がなかつたものです。幸にして三井信衛先生の手によつて、本書は完全に翻譯され、わが社より出版の運びとなりました。是非圖書館並びに家庭に本書を備へて、この世界的名著を讀み下さい。あはれな主人公ハリンヌが、如何にして自分の運命に泣き、また運命に戦つたか、本篇は涙なしには讀めないと共に、この主人公の雄々しい決心は、必ずや皆様に深い一感激を與へる事でせう。尙製本の美しさは、日本にも珍しいものと誇つてゐます。

振五
替九
口五
座九
東六
京番

金の星社

東京市本郷區
五三町坂

電話小石川三五七八番
替東京五九六九番

金の星社

東京市外
一端五

本日代表する童謡作曲界の金星童謡曲譜集

二輯各十六錢 三輯以下各十八錢 送料金六錢

第一輯 人 買 船 (目曲) 人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん	第二輯 一つお星さん (目曲) 一つお星さん、七つの子、鰯と後、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬	第三輯 青 い 空 (目曲) 青い空、燕、雨夜の傘、でん／＼鳥、雀の酒盛り、呼子鳥	第四輯 赤 い 靴 (目曲) 赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮船屋、眠り龜の子	第五輯 夢 と り (目曲) 夢とり、おしやれ梅、つば子、十と七つ、雲雀の水波、雀の機織り	第六輯 子 守 唄 (目曲) 子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、霜柱、葱坊主、藪の下道	第七輯 お人形さんの夢 (目曲) お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雉子、芒の穂、お馬のお耳草遊び、霜柱	第八輯 べんべん 鳥 (目曲) べん／＼鳥、雀のお使、仔牛、赤い小鳥車、紅殻蛸、さみだれ
---	--	--	---	--	---	--	--

東京市外 東三橋 市一五 金星社 振替 東京市外 東三橋 市一五 金星社 振替 東京市外 東三橋 市一五 金星社 振替

金の星

八月號



(通巻第六拾九號)

ちやがまで わかして のむだと さ

ついでに ちやびしゃく こうてぎ な

ちやびしゃく こうの ちや かねが な い

はとさゝ ちやびしゃく み て た と き

鳩さん茶買ひ

作曲 本居長世
作詞 野口雨情

Andante



五



四



鳩さん茶買ひ

野口雨情

鳩さん 茶買ひに
行つたさ

鳩さん お茶買うて
なんにする

茶釜で沸して
飲むださ

ついでに茶柄杓

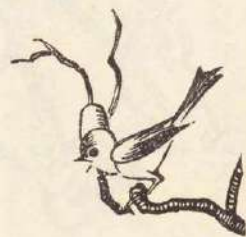
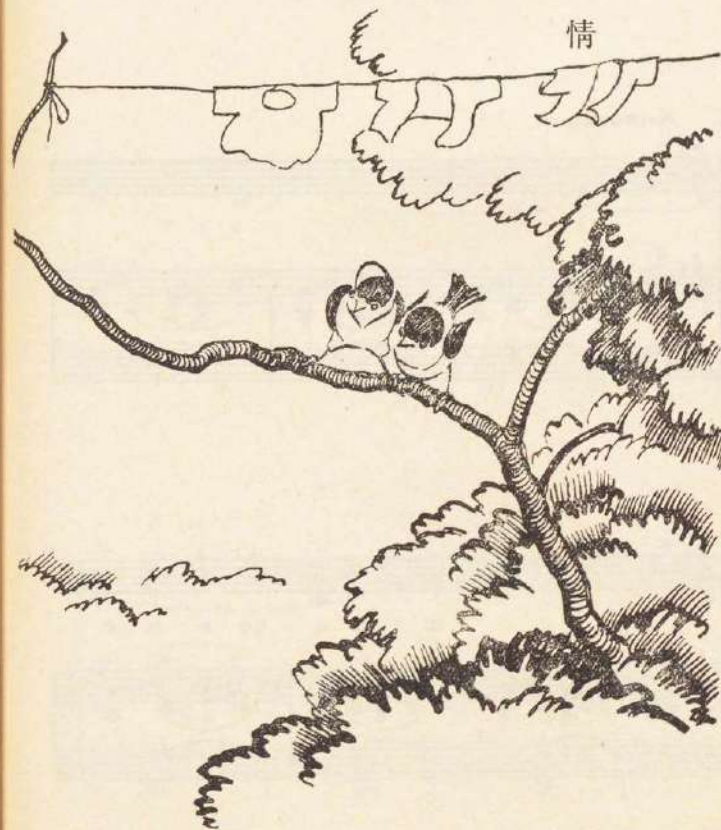
買うて來な

茶柄杓買うのにや

金がない

鳩さん 茶柄杓

見てたさ



蜂の雲

久米正雄



一
昔、京都に行商人がゐました。初めは、自分で荷を背負つて、
『今日は。絹物はいりませんか。』と田舎を賣り歩いてゐましたが、だん／＼い、お得意も出来お金も溜つて、今では馬百匹に絹物を山のやうに積んで、國から國へと賣つて歩く程大きな行商人になりました。

或夏の事でした。

伊勢の國まで来るうちに、京都から持つて來た絹物はみんな賣れてしまつたので、今度は伊勢の名産

をいろ／＼と買ひ集めて、これを百匹の馬に積んで京都へ歸る事になりました。
今と違つてその頃は、國々に泥棒が澤山ゐて、殊にかうした大仕掛けの行商人の荷を盗むと、一仕事で太した儲けになるので皆狙ふものですが、どうした譯かこの行商人に限つて、二十年近く旅をしてゐるのに、まだ一度も泥棒に出逢つた事がないと云ふ仕合者でした。

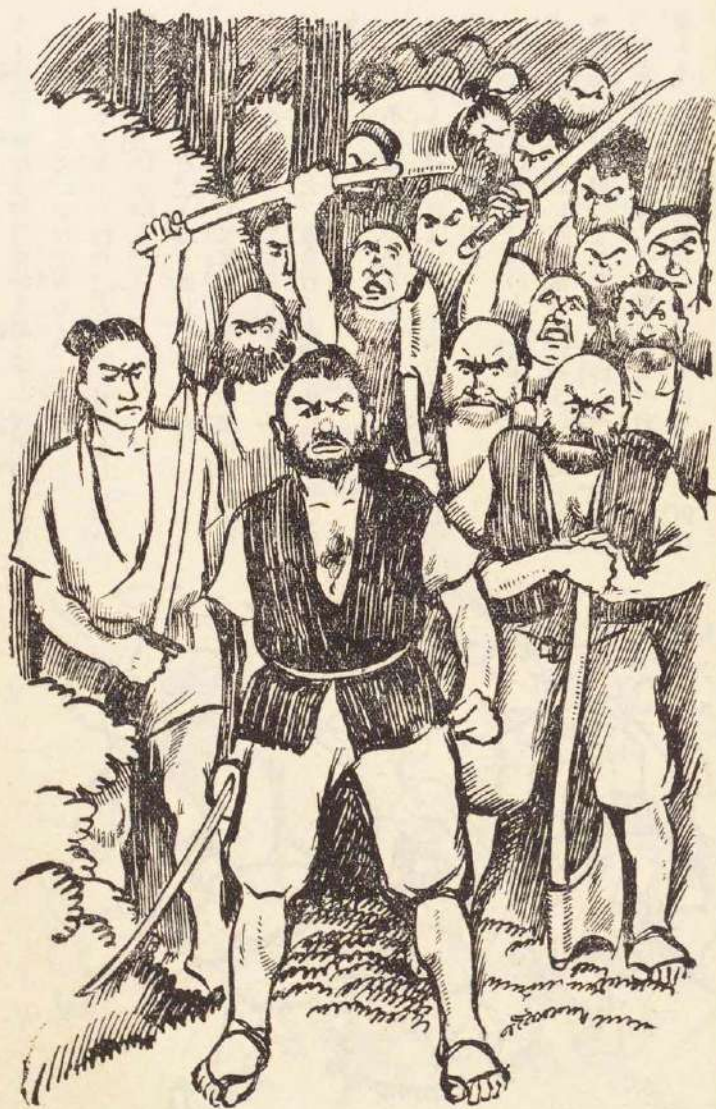
さて、百匹もの馬をどう始末して旅をするかと云ふに、主人の下に十人の番頭がゐて、一人で十頭づつ馬を預かります。番頭はいづれも菅笠をかぶり盲縞の裾を端折つて、甲斐々々しく脚絆を見せ草鞋を穿いて、手には青竹の五尺に切つたのを突いて、樂に十頭の馬位始末します。百頭の馬の十頭目づつにかうした番頭の姿が挟よつて、長い行列を作つて動いて行くのです。行列の一番しまひには、主人が番頭とスツバリ同じ姿でトコ／＼と歩いて行きます。

一足づゝに、馬の首に附けた鈴がシャン／＼と鳴ります。今しもこの長い行列が、シャン／＼鈴鹿山の峠へ差し掛つた時でした。ふいに四十人程の泥棒が現れて、
『やい／＼、荷をみんな置いて行けばよし、四の五の云へば、叩ツ殺すぞ。』と白刃を抜いて一番先きに立つた番頭を嚇し附けました。

二番目の番頭、三番目の番頭達が早くもそれと氣が附いて、急いで行列を駈け抜けて主人のところへ知らせに來たので、主人も驚いて俄に馬の首を立て直して引き返さうとすると、いつの間にか、後にも四十人程の泥棒が、いづれも刀や鉞を打ち振つて待ち構へてゐました。

『やい／＼、どこへ行くつもりなんだ。』と、真先に立つた、額に刀傷のある頭立つた一人が目を怒らして、
『がなり立てました。』

うま／＼と前と後を挟み打ちにされた上に、敵は



前後合せて八十人に餘る大勢、こちらは主人を入れ
てもやつと十一人の小勢です。争つて見たところで
叶はう道理がありません。さうと分つてゐながらも
人は誰しも盗まれるのは厭なものです。そこで、番
頭の中でも氣の強い男は、護身用の刀を抜いて渡り
合ひましたが、そんな番頭は忽ち斬り殺されてしま
ひました。

それを見た主人は慌て驚いて、
『手向つちやならないぞ。命より大事なものはなん
にもない。逃げる、逃げる。』と大きな聲で指圖をし
たのでやつと番頭達は荷を捨てて逃げ出しました。
主人も、矢庭に一匹の馬に跨ると、ビシリ青竹で
鞭をくれて、路のある處ない處構はず無我夢中で逃
げ出しましたが、氣が附いて見ると、頭の上に青空
が見えました。で、馬を留めると、そこは山の頂
でした。

こんな工合で、邪魔する者が一人もゐない氣安さ

一〇
に、泥棒は安々と百頭の馬の背から何一つ残さずに
綺麗に撈つて行つてしまひました。

丁度主人の立つてゐるところから見下すと、遙か
下に深い谷が見えました。そこに賊の棲家がありま
した。賊共は、分捕つた品物を、一人一人肩に擔い
で、谷の棲家へ今しも運んでゐるところでした。そ
れが、まるで餌を運んで行く蟻のやうに小さく續い
て見えました。

主人はそこでそんなものに見惚れてゐたのでせう
か。いゝえ、さうではありません。京都の方の空を
望んで、
『どこへ行つてゐるのだ。遅いぞ遅いぞ。』と、聲高
に一人言を云つてゐるのが聞えました。

『どこへ行つてゐるのだ。遅いぞ遅いぞ。』
五分間置き位に同じ言葉を繰り返してゐました。
かうして三十分間も何物かを待つてゐる様子でし
たが、やがて三寸程の恐しげな蜂が一匹、唸りを立

て、空から舞ひさがつたかと思ふと、傍の樹にブーンと棲りました。それを見ると、主人は、「お、よく来てくれた。」と喜んで見せましたが、尙も空を見上げながら、

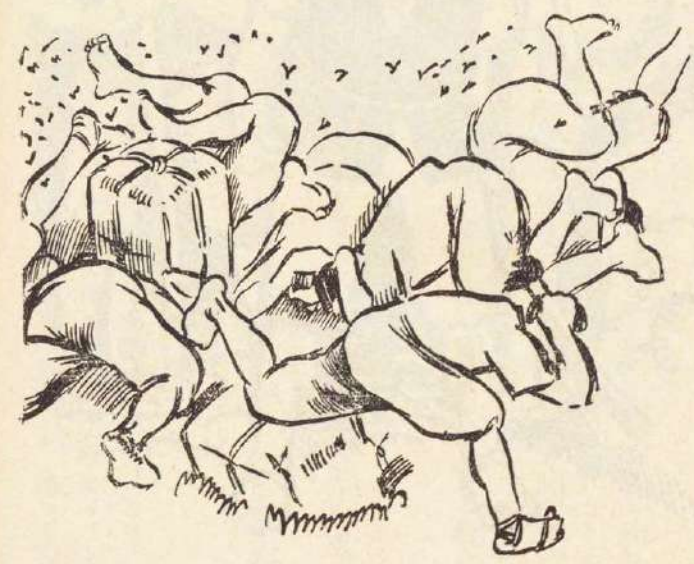
「遅いぞ遅いぞ。」と繰り返してゐました。

すると、それから又暫くしてから、俄に黄い雲の二丈程のがボツカリ空に浮び出て、こちらへ近附いて来る模様でした。道を行く人達の中には、この雲を見て、

「ハレ、不思議な雲の色ぢや。」

「饑饉でもなければよいが……。」など、噂をし合つた人も多かつた事でせう。

やがて、黄い雲は、谷の上の空まで来て一寸留りましたが、急に風に吹き落されたやうに、蟻と谷底めがけて舞ひさがりました。その時、今まで樹に棲つてゐた蜂も舞ひ立つて一緒に降りて行きました。見ると、雲と思つてゐたのは、雲ではなくて、何百



何千何萬と云ふ蜂の群でした。

三

谷底では今しも分捕品を山のやうに積み重ね、そ



のまはりに皆々丸く輪を描いて坐つて、頭の分けてくれるのをニコ／＼しながら待つてゐました。その時ふいに、空から唸り聲が聞えたので、みんなが思はず仰向いたとたんにブーンと蜂が、みんなの目の中へ飛び込みました。

『わあッ。』と手で掩つてももう間に合ひません。先づ目つぶしを食はして置いてから、蜂は一人に二三百匹づゝ位集つて、鼻をチクリ、額をチクリ、唇をチクリ、拂ひ落さうとする腕をチクリ、ビシヤリ叩き殺さうとする手をチクリ、一匹の蜂に螫されても堪まらないのに頭から爪の尖まで眞黄色になる程たかつて、毒の針でチクリチクリ／＼螫し詰めに螫したので、賊どもはノタ打ち廻つて苦しみ死に死んでしまひました。

『バンザイ。』

と云はんばかりに尻の針を打ち振つて、やがて蜂の雲は飛び去つてしまひました。

その後で、主人は谷へ降りて行つて、自分の品物を取り戻したばかりでなく、洞穴の中から賊の寶物まで探し出して、それを持つて京都へ歸つて賣り拂ひました。ですから、愈々大金持になるばかりでした。

それはさうと、なぜ蜂が加勢に來たのでせうか。實はその行商人は蜂が大好きで飼つてゐましたが自分の家でお酒を拵へては、外の者へは飲ませずに蜂にばかり飲ませてゐました。永年やつてゐる間に馴れて、しまひには、何でも主人の云ひ附けを聞くやうになりました。

賊どもはそれを知つてゐましたから、これまで決してこの行商人には手を出さなかつたのを、新米の賊が知らずに物を奪つて却つてひどい目に逢はされたのでした。

蜂のやうな虫でさへ、恩を知つてゐると、見えま
す。
(をほり)



二人兄弟

中島 孤島

(一)

さて弟の方は、獸を連れて一つの町へ來ましたが、その町には、どこの家にも、黒い布がかゝつてをりました。若者は、宿屋へ行つて、獸たちをとめるところがあるかと尋ねると、宿の主人は腕を貸してくれました。その腕の壁には一つの穴があいてゐたので、兎はすぐそこから這ひ出して行つて、キヤベツを一株くはへて來ました。狐も出て行つて、牝雞を一羽捕つ

て來たが、それを食べてしまふとまた行つて、もう一羽つかまへて來ました。けれども獅子と熊と狼は、からだが大きいので、なんにも捕りに行けませんでした。そこで若者は宿の主人にたのんで、牛を一匹買つて來てもらつたので、みんなが大喜びをして、腹いっぱい御馳走を食へました。獸たちの世話がすむと、若い獵夫は主人に向つて、町中が、喪の章で包まれてゐるわけを尋ねました。すると主人はかう答へました。

「王様の一人ざりのお姫さまが明日、死ぬことになつてゐるからです。」

「それはどういふわけなんです」と獵夫が尋ねました。

「この町のむかふに高い山があります。」

と、主人が話し出しました。「その山の上に一匹の龍が住んでゐて毎年一人づつ、純潔な少女を供へなければ、國中を荒して仕方がないのです。けれどももう町中の少女は残らずあげ盡くしてしまつて今では王女さまが一人だけ残つたのです。で、今年はどうしてもその王女さまを出さなければならぬことになるました。その日がいよいよ明日の朝に迫つたので

す。」

それをきいて、獵夫はかう尋ねました。「なぜその龍を殺さないのですか？」

「それがねえ！」といつて主人は溜息をつきました。

「これまでも澤山の武士が手を出して見たのですが、生きてかへつたものはひとりもありません。あの龍を退治した者は、王女さまの婿にして、王のな以後には、この國を譲るといふおふれまで出てゐたのですがね。」

獵夫はその時はなにもいひませんでした。夜が明けると、獸をみんなつれて、龍の住む山へ登つて行きました。頂上には、小さな祠があつて、神前に酒の一ばいは

ひつた三つの杯がありまして、そしてそのそばにかう書いてありました。

「この杯をのみはすものは、世界一の勇者となつて、入口の關の下に埋められた劍を使ふ力を得るであらう。」

獵夫はじめ杯には手をつけずに、入口へ行つて見ると、なるほど一本の劍が地に埋まつてゐましたが、どうしてももち上げるものが出来ませんでした。そこで中へはひつて、杯の酒をのみはして、それから劍へ手をかけて見ると、今度はやす／＼とあがつて、自由にふりまはすことが出来ました。そのうちに、少女を供へる時刻が來ると、王と大將軍が先に立つ

て、澤山の家來が行列をつくつて王女を送つて來ました。王女は遠くから山の上にゐる獵夫の姿を見て、龍が自分の來るのを待つてゐるのだと思つたので、そこへ立つたまゝ、一足も出なくなりました。

けれどももしこゝから引かへしたら、町中のものが災難にあはなければならぬのだと思つたので王女は一生懸命になつてのぼつて行きました。

その間に王と家來たちは泣く泣く引きかへして行きましたが、大將軍だけが後へのこつて、遠くから様子を見てをりました。

王女は山の上まで行つて見ると龍だと思つたのは、若い獵夫でした。獵夫は王女にやさしい言葉を



かけて、きつと助けて上げますからといつて、そつと祠の中に入れてびつたりと扉をしめてしまひました。

しばらくすると、恐ろしい聲を先に立て、七つの頭をもつた龍が、こちらを目がけて進んで來ました。

龍は七つの口から火を吹きはじめました。その火がすぐにまはりの草へもえうつて、一面にもえひろがつたので、獵夫は煙の中に包まれて、今にも息がつまつてしまふかと見てゐる中に、五匹の獸はいきなり草の中へ跳び込んで行つて、火をふみ消してしまひました。それを見ると龍は獵夫を目がけて跳びかゝつて來るところを、

獵夫は劔をふりまはして、龍の頭を三つだけ切り落しました。龍はもう氣違ひのやうになつていきなり高く跳び上ると、頭の上から火を吹きかけて、獵夫を焼き殺さうとしましたが、獵夫はすばやくわきへ跳び退きながら、劔をふりまはしてまた三つだけ龍の頭を切り落しました。これで龍はすっかり弱つて、地面へ倒れてしまつたが、もう一度起き上つて、敵に向はふとするところを獵夫は、最後の力をふるつて、一つぎり残つた頭と尾を切りはなしました。けれども獵夫はもうそれで力が盡きてしまつたので獸たちを呼んで、龍の死骸をすたすたに噛みちぎらせました。

戦争がすむと、獵夫はすぐに祠のところへとんで行つて扉を明けて見ました。中には王女が怖れと心配のために、氣を失つて床の上に倒れてゐました。獵夫はすぐに王女を抱いて外へ出しました。そのうちに王女はやつと氣がついて、ばつちりと目をあいたので獵夫はすた／＼になつた龍の死骸を見せて、もうこれで安心だといつてきかせました。それを見ると、王女は大變によろこんですぐに珊瑚の頸飾りをはすして、十つぶの玉を、褒美として、五匹の獸にわけてやり、獅子にはまた別に金の留金をやりました。それから獵夫には自分の名を縫ひつけたハンケチをやつたので

獵夫は龍の七つの頭から七枚の舌を切りとつて、そのハンケチへ包んで、とつておきました。これがすむと、獵夫は龍と戦ひ火と戦つた疲れが一度に出て急に眠くなつたので、王女に向つてかういひました。『二人とも大變疲れてゐるから、こゝで一眠りして行きませう。』王女は獵夫のいふとほりになつて、一しよに草の上へ寝ころびました。その時獵夫は獅子に向つてかういひつけました。『よく番をしておいで。わたしたちが眠つてゐる間にだれか來るといけないから。』かういつておいて、二人はすぐにいびきをかいて、ねてしまひま



した。

(一)

獅子は獵夫と王女が眠つてゐる間、二人のそばに坐つて、番をしてゐましたが、自分もやつぱり先刻の働きで、くたびれてゐたので熊に向つてかういひました。『おれはちよつと一眠りするから君はこゝに坐つてゐて、誰れか來たら起してくれ。』そこで熊はたのまれたとほり獅子のそばに坐つてゐたが、これもまたくたびれて眠くなつたので、狼にたのんで、ねてしまひました。狼はそこに坐つてゐたが、ちきにまた眠くなつたので、狐にたのんでねてしまひました。

そのうちに狐もまた眠くなつたので、兎にたのんでねてしまひました。兎は狐のそばに坐つて番をしてゐたが、ちきにまた眠くなりました。けれどももう見張りをたのむものもなかつたので、ひとりで居眠りをしてゐるうちに、とう／＼ぐつ／＼と寝込んでしまひました。こんな風にして、みんながそろつて寝てしまひました。王女も、獵夫も、獅子も、熊も、狼も、狐も、兎も、みんな死んだやうになつて眠つてしまひました。その間に、下で様子をうかがつてゐた大將は、龍が王女をさらつて行つた様子はないのに、山の上が急にひっそりしてしまつたのを

見て、不思議に思ひながら、元氣を出してのぼつて行きました。上まで行つて見ると、龍はすたすたに切られて死んでゐるそばに王女と獵夫と獸たちが、死んだやうになつて寝てゐるので、元より心のよくない大將軍は、そつと劔をぬいて、眠つてゐる獵夫の首を切つて、王女をかへたまゝ、山の下へ運んで行きました。

その時、目をさまして震へてゐる王女に向つて、大將軍はかういひました。

『あなたを殺さうと、生かさうとわたしの心一つです。町へかへつたら龍を退治したのは、わたしだと言ひなさい。』

『そんなことはいへません。』と王



女は答へました。

『龍を殺したのはあの獵夫と獸たちですもの。』

これをきくと大將軍は劔をぬいて、もし自分のいふとはりにしなければ殺してしまふといつておど

したので、王女もとう／＼仕方なしに、いふとほりにしようと約束しました。

大將軍は王女を連れて城へかへると、もう怪物に食はれてしまつたとはかり思つてゐた王女が、無事にかへつて來たので、王は夢かとはかりに喜びました。

大將軍は龍を退治して、王女と全國の人民を救つたのは自分だから、約束どほり王女をいたゞきたといひました。王は喜んで承知しました。

その時、王女は父に向つてかうねがひました。

『たつた一つ、お願ひがございます。どうぞ結婚式は來年の今日まで待つて、いたゞきたうござい



す。

王女は一年の間には、きつとあの獵夫のたよりが分るだらうと思つてかういつたのです。

(三)

山の上では獸たちはまだ主人の死んだのも知らずに眠つてをりました。

その間に、一匹の大きな熊蜂が來て、兎の鼻へとまつたが、兎は手で拂つてまた眠つてしまひました。熊蜂はまたやつて來たが、兎はもう一度拂ひおとして、眠つてしまひました。熊蜂は三度目にやつて來て兎の鼻を、ちくりとさしたので、兎はやつと目をさました。兎は起き上つて、からだをふるふと、すぐに狐を起しました。それから狐が狼を起し、狼が熊を起し、熊が獅子を起しました。獅子が目さまして、王女の姿が見えなくなつて、主人が死んでゐるのを見ると、恐ろしい聲を立てゝ吼えだしました。

『これはだれの仕業だ？ 熊公、お前はなせおれを起さないのだ。』

すると熊は狼に向つて同じことをいひ、狼は狐に向つて、同じことをいひ、狐はまた兎に向つて、同じことをいひました。

可愛想な兎は、もうどこへもおしりをもつて行くところがなかつたので、ひとりで罪をしやつてしまひました。

そこでほかの獸が一どに兎にとびかゝらうとすると、兎は泣き聲を出してかういひました。

『まア待つて下さい。御主人を生きかへらせて見せますから。わた

しは藥草の生えてゐる山を知つてゐますが、その草を口へ入れさへすれば、どんな病でも、傷でも、見てゐるうちになほつてしまひます。」

すると獅子がかういひました。

『ちやア、二十四時間のうちにその草をとつて、こゝまでもつて來い。さうすればお前をゆるしてやる。』

兎は全速力でとび出したが、二十四時間のうちに草をくわへて歸つて來ました。

そこで獅子が獵夫の頭をからだへつけると、兎は傷口に藥草をあてました。すると見る／＼獵夫は生きかへつて來て、心臓が動き出しました。

した。そして獸たちを踊らせてはお金をもらひながら、旅から旅を渡つて歩きました。

それから丁度一年たつて、獵夫はあの龍を殺して、王女を救つた同じ町へまはつて來ました。

すると今度は、前の時とは違つて、どこの家にも赤い旗が立つてをりました。獵夫は宿屋へ行つて宿の主人にかう尋ねました。

『これはどうしたわけなんです。

一年前にこゝへ來た時には、町中が黒い布で包まれてゐたが、今日はまたどこもかしこも赤い旗ばかりだが？』

それをきいて宿の主人はかう答へました。

『一年前には、王女さまが龍の牲

そのうちに獵夫は目をさましました。自分のそばに王女のゐないのを見ると、びつくりしてかう思ひました。

『これはきつとおれをさらつておれの眠つてゐる間に、そつと逃げて行つたに違ひない。』

けれども獅子はあんまり急いだので、主人の首をあべこべにくつつけてしまひました。それをまた獵夫は少しも氣がつかずに、王女のことにばかり氣をとられてゐたが、おひるの時分になつて、何か食べようと思つて、ひよいと氣がつくと、自分の首がうしろ向になつてゐたので、どうしたわけかと思つて、獸たちに、寝てゐる間に何か變つたことでもあつたかと尋ね

ました。

そこで獅子はみんなくたびれて眠つてしまつたことから、目をさまして見ると主人が首を斬られて死んでゐたこと、それから兎が藥草をとつて來たこと、あんまりあはたので、首をつけ違へてしまつたことを話して、だが、すぐにつけなほしますから、待つてゐて下さいといひながら、もう一度獵夫の首を切つて、まつすぐに向けなほすと、兎は藥草をつけて、その傷をなほしました。

(四)

この時から獵夫は氣がぬけたやうになつて、いつも悲しさうな顔をして、なにか考へこんでをりま

にあげられるといふので、悲みのしるしに黒い布をかけたのですが



大將軍さまが龍と戦つて、退治してしまつたので、明日はいよく

王女さまと御結婚の式が舉げられるのです。そのお祝ひのしるしにかうして赤い旗を出してゐるのです。』

その翌日、結婚式の日になると獵夫は宿の主人に向つてかういひました。

『どうです、御主人。一つ賭をしちやア。わたしが今日、王様の召あがるパンを食べるか、食べないか？』

『よろしい。わしはそんなことはないといふ方へ百圓かけませう。』と主人がいひました。獵夫は金を出して、賭けておいて、兎を呼んでかういひました。

『おい、とび助、お前行つて王様の食べるパンを持つて來てくれ。』

すると兎は自分が一番小さいのだから、この使をほかの者へおつ、けるわけにはゆかないといふことを知つてゐましたが、それでも心のうちでかう思ひました。

「まア、どうしたもんだらう？　ひとり町を跳んで行つたら、肉屋の犬におつかけられるだらう。」
こんなことを思ひながら、ビク／＼やつて行くと、思つたとはり犬がおつかけて来て、立派な上衣をくはへようとしましたので、兎はビヨンと跳びあがつて、番兵の知らない間に、番小屋の中へとびこんでしまひました。犬はおつかけて来て、小屋から兎を逐ひ出さうとしましたが、番兵はその意味が分らないので、棒をふりまはし



て、犬どもを逐ばらつたので、犬は吠えながら逃げて行きました。



兎は敵のゐなくなつたのを見るとすぐにお城の中へび込んで、まつすぐに王女のところへ行きました。そして腰掛の下へもぐり込

んで、そつとお姫さまの足を引きました。お姫さまは、それを飼犬だとばかり思つて、

「あつちへお出で！」といひました。兎はもう一度、お姫さまの足を引きました。お姫さまはまだ犬だとばかり思つてゐるのでまた「あつちへおいで！」といひました。けれども、兎は腰掛の下から出ないで、もう一度お姫さまの足を引きました。お姫さまが椅子の下をのぞくと、見おぼえのある頸輪をつけた兎なので、すぐに抱きあげて、自分の部屋へつれて行つてたづねました。

「兎や、お前はなにに來たの？」
そこで兎はかう答へました。
「龍を退治したわたくしの主人か

らいひつかつてまゐりました。どうぞ王様の召あがるパンを一きれにいただきました。」
かうきくと、王女は大變によろこんで、すぐにパンを焼く家來を呼んで、王に差上げるパンを一つ持つて來いといひつけました。家來がパンを持つて來ると、兎はかういひました。

「そのパンを御家來に持つて行つてもらひたい。途中で肉屋の犬につかまるといけませんから。」
そこでパン焼き男が、宿屋の入口まで、パンを持つて行くと、兎は後足で立ちあがりながら、前足でパンを受取つて、主人の前へ運んで行きました。

「御主人。御覽なさい。百圓はわ

たしがいたゞいておきますよ。」
夫はかういつて、宿の主人のびつくりした顔をながめながら、
「さア、王様のパンにありついたら、今度は王様の召上る焼肉をもらつて來ませうか。」
宿の主人はきいてゐて、疑ひ深さうに、

「見るまでは、本當には出來ないね。」といつたが、それでももう賭けようとはいひませでした。

すると獵夫は狐を呼んでかういひました。

「狐や。お前ちよいと行つて、王様が今日召上る焼肉をもらつておいで。」

狐は云はれた通り、御殿へ出かけて行きました。（つゞく）



あゝ手品師の話

水谷 さま

これは外國の話である。
『さて、みなさん、只今改めましたとほり、この一枚の布には、種もしかけもあります。ところで、わたくしは、このなかへ一つの硝子鉢をとり出してごらんに入れます。然るもその硝子鉢のなかには、水がいっぱいあつて、きれいな金魚が三匹、ゆう／＼と泳いでゐるといふ、すばらしい手品をお目にかけるのであります。』
手品師は、にこ／＼笑ひながら、その布を右手に持つて高くさ／＼げ、あちこち場内を見まはしてさう云つた。
人々はみんなその言葉に驚いて、ばち／＼と手を拍つた。

『えらいもんだな！ どうしてそんなことができるだらう！』

そんなふうにつぶやいて、目を丸くしてゐる人もあつた。

ところが、舞臺の下、第一列の腰かけに腰をかけてゐた一人の男だけは、太い眉のあたりに、にがにがしく小皺を寄せて、さも聞えよがしに、

『なあに、あいつあ、ふところのなかに、隠してゐるんでさあ。』と云つた。

それを聞いた人々は、なるほどと思つてうなづいた。さうでなくては、とてもそんなふしぎなことができやう筈がないと思つたのであつた。そして、そのことは、それからそれへと傳つて行つた。すぐに人々の口々にさ／＼やかれて――

だから、その手品師が上手にその手品をしてしまつた時、ほんの少しの人が拍手をしただけであつた。『では次なる手品をごらんに入れます。』と手品師は

云つた。こゝに取り出しましたのは、有名なインドの指輪であります。一つづつ離れてをりますが、わたくしが手のなかへ入れて、一振り振りますと、みんなぞろ／＼つながつてしまひます。』

人々は驚いた。けれど、さつきの男が、

『なあに、あいつあ、別につながつた指輪を、ふところのなかに、隠してゐるんでさあ。』と云つた時、またなるほどと思つてしまつた。そして、人々はもう驚かなかつた。

手品師は、その男が憎らしかつた。なんの恨みがあつて、こんなにじぶんの藝の邪魔をするんだらうと思ふと、身體ぢゆうががと熱くなつてしまつた。いつの間にか、手品師の顔からは、愛嬌笑ひが消えてしまつてゐた。それを見た人々は、手品師が急所をつかれたことを知つた。

だから、うまくつながつた指輪のくさりを見せた時に、ほとんど拍手をする人がなかつた。

「では、次なる手品にとりかゝります。これはきつとみなさんの、喝采を博すものだと思へます。それはわたくしが、一つお帽子を拜借して、そのなかゝら、卵をいくつもとり出すのであります。さあ、どなたかお帽子を貸して下さいませ。はい、ありがたうございました。ではこゝに拜借したお帽子を改めます。」

またその時、例の男が云つた。

「なあに、あいづあ、ふところのなかに隠してゐるんでさあ。」

こんなふうにして、手品師がそれからそれへと、いろんな手品をしても、みんなその男の言葉のために、めちやくちやになつてしまつた。いくら、珍らしいふしぎな手品をしても、いつもいつも、ふところに隠してゐると云はれるので、手品師はもうかかん腹を立てゝしまつた。

「あんまりだ。なんぼなんだつてあんまりだ。そんな

なに、ふところへ隠せるものか。ふところへ隠すばかりが、手品ぢやないや。」

なるほど、それは手品師としては無理のないことだつた。だつて、小豚を箱から出した時にも、女の子を出した時にも、椅子を出した時にも、その男の云つた言葉を、人々がみんな信じたからである。

「ばかにしてらあ。だが、お客もお客だ。一から十まで、あの男の云ふことが、みんなほんたうだと、思つてゐる。ちえつ！」

けれど、最後になにか思ひついた手品師は、やつと元氣をとり返して、強いて愛嬌笑いをつゞけながら云つたのである。

「みなさん、わたくしは最後に、日本の手品をお目にかけます。これはごく最近に考へられたところの手品であります、實にふしぎな手品で、これならばきつと、みなさんのお氣に入るかと思へます。」

人々は日本の手品、それもごく最近に考へられた

手品といふので、よほどふしぎなものだらうと考へた。今度こそ、もうふところに隠してゐるわけではあるまいと思つた。

「ではあなた。」と手品師は例の男に向つて云つた。

「恐れ入りますが、金時計を拜借させて下さいませんか？」

その男は、胸にさ

げてゐた金鎖のさき

から、金時計をはづ

して、手品師に渡した。そ

の男は、なあにたいしたふしぎな

手品ができるものか、おれがまた種を

見つけてやるぞといふやうな、かなり手品師をばかにしたやうな顔をしてゐた。

「ところで、この金時計を、この箱に入れておいて



金槌で叩きつぶすことを、お許し願ひたいのであります。が、いかゞなものでせう？」と、手品師は、その金時計を持つたまゝ、例の男の方を向いて、大きな聲で云つた。

例の男は、うなづいて、そしてにや／＼と笑つた。

手品師は、そこにあつた木箱のなかへ、金時計をほうりこんで、金槌でめちやくちやにたゝいた。時計のこはれる音が、静まつた場内に高くひびいた。

「なあに、あいづあ、わたし時計をちやんともう、ふところへ隠してしまつたんでさあ。」

例の男はまたさう云つた。

「ところで——」と手品師が云つた。次にハンケチを拜借させて下さいませんか？ そしてそのハンケ

チへ、穴を開けることを、お許し願ひたいのでございます。」

例の男は、すぐに胸のかくしから、ハンケチをとり出して、手品師に渡した。手品師は、それを受け取ると、小刀でいくつも穴を開けて、その穴へ指をとほして見せた。

『いかゞでございます。ちやんと穴が開きました。種もしかけもございません。』

例の男は、じぶんのハンケチに、ちやんと穴が開いてゐるのを見たので、今度は顔をかゞやかした。そして、なにかふしぎが起るぞといふ氣持で、目を丸くしてゐた。

『さて次に、あなたのお帽子が拝借したのでございます。そして、そのお帽子のうへで、ダンスをしてもいいといふ、お許しを得たいのであります。』

例の男は、今度もじぶんから進んで、帽子を手品師に渡した。

『ありがたうございます。ではお許しを得ましたから、このうへでダンスを致します。』

手品師はおどけた足どりでダンスをして、その帽子を踏んだ。帽子は見る影もなく、べちやんこになつてつぶれた。

この時、例の男はひどくふしぎさうな顔をした。そして、思はずつぶやいた。

『こりや驚いた。こんな手品は、まったくはじめてだ。』

場内にある人々も驚いた。みんながや／＼となにか話し合つてゐた。

かういふふうにして、手品師は更に例の男から、眼鏡を借りてうちこはし、セルロイドの襟を借りて火で燃やしてしまつた。

例の男をはじめ、みんなますます驚いた。

やがて、手品師は、舞臺のはじへ歩いて來て冷やかに云ふのであつた。

『みなさん！ みなさんはわたくしが、この紳士のお許しを得て——』と、例の男の方を見て、

『金時計をたゞきこはし、ハンケチに穴を開け帽子のうへでダンスをし、

眼鏡をうちこはし、セルロイドの襟を火で燃やしてしまひましたことを、ちやんとごらんになつたと

思ひます。もしもつとこの紳士がお許し下さいますならば、着ておいでになる服に、青いペンキで縞を書き、あるひは、ズボン吊りでこの紳士を縛りあげ



ますと、まだ／＼みなさんを喜ぶことができやうと思ひます。けれど、お許し下さいませから、もうこれでおしまひに致します。』

そして、は

なやかな音楽

とともにカー

テンがおりで

しまつた。人

人はとにかく、ふところ

へ隠すのでは

なく、なにか

ちがつた手品

がはじまると

思つてふしぎがつた。

けれど、もうカーテンは二度とあがらなかつた。

(をばり)

舞踊 童謡

あ の 山 蔭

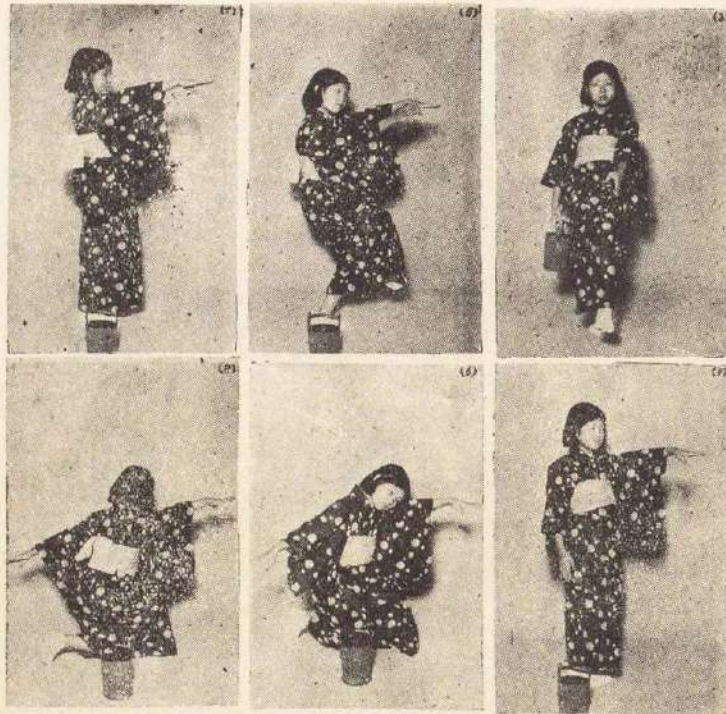
振付 林 きむ子 作謡 野口 雨情

表 現 高千穂 寵子 作曲 本居 長世

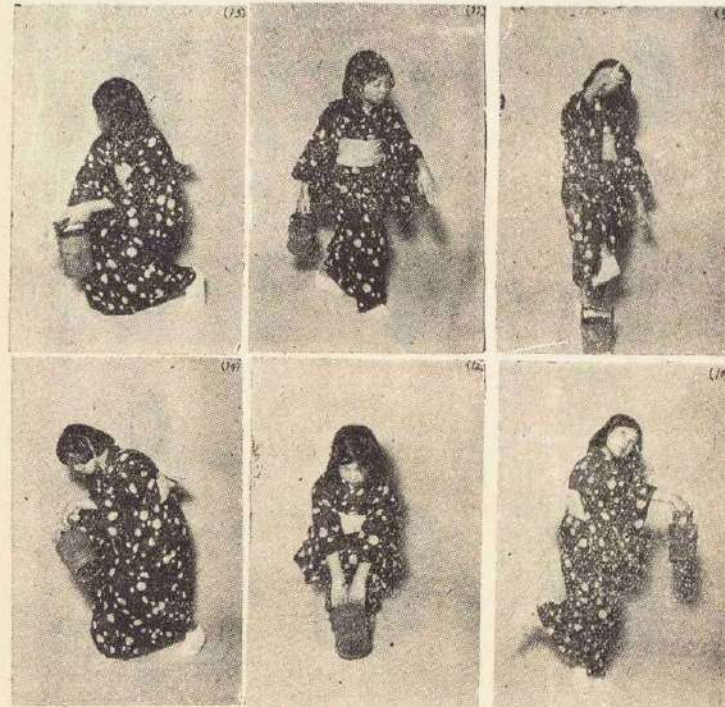


(この曲を通じて、わざと、今までの舞踊の定めにはづれた、手足のつかひ方をした所が、いくつもありますから、その心得で、うまく踊つて下さい。)

- (1) 『スタコラ』
左手を先に出し右足より出て、左足を返る。
- (2) 『スタコラ』
次に右手をのべ、左足を出し右足をすべる。
- 三度目の『スタコラ』から、右左とかはる、が
はる同じ形を漸次に早めて前かきみにはしりす
すむ、但し四度目の『スタコラ』から、左足は
つかはす、後へは上るやうに、前の拍子の半
分のはやきにする。



- (3) 『スタコラサ』
中央に來るに従ひ兩方に動かす手を漸次に、音
樂に合せて細くふり、後へあげてふた足をかは
る、圖のやうに前に低くあげ、次の歌のはじ
まるまでつづける。
- (4) 『あの山』
圖のやうに直立し手より一尺ばかり上に目を
つける。
- (5) 『こーえー』
右足をあげ、右手を左手に一寸そへる。
- (6) 『てー』
あけた足をそのまゝ、手と共にひいて、右足のひ
さを軽くつづ。
- (7) 『山こえ』
前向の時の通りにして足は左をつかひ、手は右
をつかふ。
- (8) 『てー』
前の通り。
- (9) 『あの山蔭へ』
手足をかはり、にあげて、向うを指す。
- (10) 『水くみに』
圖のやうに右手と左足からはじめ、次に左手
と右足、再び右手と左足にして、トンと一つ、



ふみ、この形でさる。
こゝで、かゝとて一つ拍子を待つて、再び前の通りの「スタコラ」をくり返し表現者の左方に一まわりする。

(11)

「短く間奏の中」
水に近づくと下に足を見ながら、音楽の拍子に合わせて、手と足をかへながら、圖のやうにすむ。

(12)

「一桶汲んでは」
水をくみあげる心もちですくふ。

(13)

「草にかけ」
水をやるやうにはねかしながら右足から三足すむ。

(14)

「二桶くんで草にかけ」
但、出来るだけ、ひざを折り少くなる。

(15)

「二桶くんで」は前の一桶の時の通りに元の位置まで来てくみ、二度目の「草にかけ」はSの字形にうねりながら進み、すむ。

(16)

「一桶かければ」
心もち左手までかへて来て手にかゝつた水を四度ふるやうにしてさる。

(17)

「葉のひび」
前にのべた手をそろへて下げて右方へ一つまわりし次いで圖のやうに一寸小さくなる。

(18)

「る」
立ちあがりながら漸次手なをばして圖のやうにさる。

(19)

「はなが」
二桶かければ、一桶の時の通りの手を、今度は右方に向つて二度つめて使う。

(20)

「咲く」
「はなが」圖のやうに左足をあげて、手を踏むながら右方にまわる。

(21)

「水くみに」
結んだ手を兩方軽く握つて合せて圖のやうに小さくなりながら、バツとひらかせる、なるだけ左手の掌を正面に見えらるやうに向ける。

(22)

「水くみに」
向う方が足らぬとお獅子の様になりますから次に桶はそのまゝ置いて手ばかりで、左方に一まわりし中央に来て、初めと反対の右方に向ひ前度一度後で一度前の通りに「あの山こえて」から「水くみに」までを繰り返す。

(23)

「水くみに」
其後に来る「スタコラ」で此度は右方に一まわりし、中央に来て今一度「スタコラ」の初めの拍子にかへり、ゆるやかに二度足をかへて後の草間に、かけ入るやうにして最後に飛び込む。

(24)

「水くみに」
三

(25)

「水くみに」
三

(26)

「水くみに」
三

(27)

「水くみに」
三

(28)

「水くみに」
三

(29)



童謡

野口雨情選

(大人篇)

つばめ

つばめ 東京市 萩山虹一郎

つばめ つばめ
かわいゝつばめ
ほゝべにつけて
子供をつれて
古巢にかへつた
かわいゝつばめ
古巢にとまつて
何してる。

ぼつぼの

鳩さん

大阪市 名方まさる

ぼつぼの鳩さん
豆やろか
豆がほしけりや
啼いてみな
ごろつぼごろつぼ
ぼつぼつぼ
豆をやるから
早よ食べよ
ぼつぼの鳩さん
可愛いゝな。
つくし
おはかまはいた
つくしんば
縁の原で

せいくらべしてる
あつちに一つ
こつちに二つ
はかま はきく
せいくらべしてる。

虫氣の神様

熊本縣 山川 省郎

虫氣の神様
敷の中
虫氣の神様
首出した
小供は居るか
首出して
虫氣はないかと
見張つてる。
わに
在南洋 法本 美夫
獨木舟ア あつても

近づくな

河にはわにが
居るだとな

河は濁つて
見えないが
時々姿を
見せるとき。

あの子の夢

東京 吉井 友海

お馬の背に
眠つてる
見せ物小屋の
女の子
どんなお夢を見てるのか
やさしいお眼々の
お馬さん
善い夢ならば
そのまゝに
静かにねんね

させてやれ。

ひばり

大阪府 河崎 鏝子

ピーチク雲雀
雨の日は
青い畑の
麦の中
歌もうたはず
何してる。
ピーチク雲雀
雨の日は
青い畑の
麦の床
可愛い子供と
ねてゐます。

たま虫こり

東京 松永 武夫
行かうよ

行かうよ

たま虫とり
お寺の紅葉が
青いうち。

案山子

甲府市 五味くに三

やま田の案山子よ
雀を追ひな
おべへも 破ぶけて
帽子もとれた
やま田の案山子よ
お米をとつて
お町で土産を
買つてやろ。

いちごばたけ

岡山市 山岡 静子
いちごばたけに
まいごのかへる



はねた またとんだ
葉つばがゆれる

ぼつぼの鳩さん

いちごばたけの
いちごは赤い

かへる またとんだ

いちごをみてる
いちごばたけから
たんぼは遠い
はねた またとんだ
まいごのかへる。

こころもり

東京市 寺脇としを

こころもり
夜のつばめ
ぼうふらおさがし
暗らからう
ちようちん
かそうか
おいらぬか
返事せんとで
どこ行つた。

小鳥は空に

加藤武雄

八

老伯爵は仙石執事の事務室の前に足をとどめた。聞きなれない婦人の聲が廊下にもまでも洩れて来たからであつた。



三八
『馬鹿にしないで下さい。義雄さまも伯爵家のお孫様でせうが、何といつても私の一郎が御世嗣には相違ありません。義雄様はお三男義澄様の御子様だし、私の一郎は、長男義朋様の獨息子さまなんですからね。』
仙石老人の冷かにおちついた聲が答へる。

『いや奥様。あなたの仰言る事はよく解ります。ではありますが、あなた様が義朋様の御夫人であつたといふ證據もありませず、況して此の坊ちやんが義朋様の御息だといふ確な理由も認められませんでありますからして、後日何か確かな證據でも御手に入りましたら改めて御相談いたさうではありませんか。さあ、今日はこれで御引き取り願ひます。』
『何ですつて、わたしは物貰ひや詐欺に來たのでは

ありませんよ。歸れといふなら歸りもしませうが、あとで悔まぬやうになさい。』
さうは云つたが、婦人は椅子から腰をあげた様子もなかつた。

『阿母、歸らうよ。』

子供の泣き聲も聞へてくるのであつた。

伯爵は、もう堪らなくなつた。扉の外で聞いたばかりでも様子は知れた。義雄を伯爵家の世嗣として迎へたといふ事は今朝の新聞に出る前に、既に世間には知られてゐた。義雄を迎へるまでに長男の義朋にも次男の保之にも若しや子供はありはしないかと手を盡して調べたのであつたが、そんなあとかたもなかつた。これは屹度、縁もゆかりもない子供を當家の血統だと詐つて乗り込んで來た悪人に相違ない伯爵は荒々しく扉を開いた。そして大きな聲で叫んだ。

『タマルを呼べ。此の客人が歸らねばタマルを呼ん

で送らせよ。』

『タマル、タマル!』老伯の荒々しい聲に、何處からか猛犬タマルは猛獸のやうに駆けつけて來た。

『阿母、をつかないよう。』

十二三になる男の子が、その母親の背にしがみついた。タマルは銀色の毛房を立て、うをうと一聲ものすこく唸つてみせた。

そのときタマルの跡を追ふて駆け込んで來たのは義雄であつた。膝きりの短いズボンに麻の上衣を着て、光澤のよい前髪を女の子のやうに伸して居たが、ちつとも物をちのしない勇ましい少年であつた。

『タマル、タマル。吠へるんではないよ、お客様だからね。さあ行かうよ。』

さういつてタマルの首環にすがりながら、ふとそのお客を見た。

『あッ、いつかの小母さんなんだ。お祖父様、いつかの夜の小母さんなんですよ。』

義雄が此の邸に引きとられて来て間もないある夜、老伯はピストルを携げて暗闇の中に後を追うたその怪しい女の姿を伯ははつきりと思ひ出した。タマルは勿論それを記憶してゐたに相違ない、義雄に首環をとられながら物凄く唸つて飛びつかうとした。それには怪しい女も恐れをなした。

「一郎や、さあ歸らう。出るところへ出ればどちらが眞實の世嗣か、裁いて下さるんだからね。」

さう云ふ言葉を残して出ようとした。廊下には二人の元氣な書生が恐ろしい顔をして立つてゐた。老伯は暫く、その後姿を見送つて居たが、やがて口の中で呟いた。

「何人が何といはうが、義雄は僕の孫ぢや。滅多に詐されるものか。」

そのため、義雄の邸に就て仙石老人に言ふつもりで來た叱言はすっかり忘れてしまつた。そして却つてこんなことを言つた。

「あんな者が来るやうでは別邸の方も嚴重に取締らねばなるまい。あちらには書生が幾人居たかね。今夜から氣の利いたものをやつて警戒させねばならぬよ。」

老伯は不愉快でたまらなかつた。こんな時には愛馬にまたがつて郊外を乗りあるいたらきつと心が明るくなるにちがひない。此の頃でこそ病氣のため久しく乗らない馬ではあるが、もとく武張つた事の好きな老伯は華族仲間でも知られた騎手であつた。

「義雄や、おちい様と馬に乗りなさいかい？」

義雄は此の邸に引きとられてから馬丁の貞吉に教はつて此の頃では邸内の芝生を自由に馳けさすくらゐの騎手になつてゐたので、祖父について郊外に出ることは嬉しかつた。間もなく栗毛の亞刺比亞馬に乗つた威風凛凛な顔をした老人と、同じ色の仔馬にまたがつた少年とが轡を並べて駆け出すのを召使どもは嬉しさうに見送つた。



「殿様がお馬に召すなどとは珍らしいことさ、もう二年ほどもない事なんだからね。」馬丁の貞吉が云つた。

「さうだよ。屹度お身體の工合がよくなられたんだよ。さういへば此の頃はお叱言も少なくなつたやうだね。」

「それもみんな義雄様がいらつしやつた故なんですわ。御覽遊ばせ、御前様のあのお嬉しさうなお顔を、そちらと義雄様のお姿を眺めてゐらつしやるわ。」河本夫人は、あとを追ふやうに身乗り出して云つた。

「まったく河本さんと云へば義雄さんの御自慢ばかりだからやりきれない。何でも彼でも良い事は義雄様の故なんだからね。」

さう書生の一人が云ひはしたが、召使のすべては河本夫人と同じ考へであつた。あの快活で美しい少年が現はれてから、冬に寒されてゐ

た邸にも春が来たやうに感じられるのであつた。
『もう梅が咲いたね。』と、たれか云つた。



四二
郊外に出ると義雄の仔馬が先に立つた。いつの間
に覺えたか、手綱を軽く曳いて、赤革の靴を鍔に淺
くかけて、カツカツと驅けるのであつた。名騎手で
鳴らした伯も、今では病氣と老齡
のために、背を曲めて、汗みどろ
になりながら孫のあとを追ふので
ある。二寸ほどに伸びた緑の麥畑
や、櫟の芽立つ丘の中の小徑を抜
けて久し振りで老伯は晴々した蒼
空を眺めた。そして、いつしか別
邸の丘の麓に出たのであつた。
そのとき、門のかなたから信子
夫人が坂道を降つて來た。美しい
婦人ではあつたが、涙に包まれた
やうな寂しい面影があつた。老伯
は信子夫人を知らない。まだ會つ
た事がない故であつた。だが、義



情のしるしに動かしたばかりでも
機嫌の悪かつた老伯が、今日は義
雄に公然と母に會ふ事をすゝめ、
そして軽い戯言さへ殘して去つた
不思議といへば不思議である。だ
が顔と顔を合してゐながら、孫
の母に挨拶をすら許さなかつたの

雄は逸早く母の姿を見た。

『お祖父様。お母様がいらつしやいます。』

老伯ははつとした。何といふ氣高いそしてや
かな姿であらう。伯は愛する孫の母が、考へてゐた
やうな下賤な婦人でなかつた事を安心した。

『ではお前はお母様にお目に掛るがよい、僕は今日
は失禮すると傳へておくれ。夕方になれば真吉を迎
へによこすから、久し振りでお母様のお乳でもいた
だくだな。』

別邸の窓と本邸の窓と、灯と灯を胸にあふれる愛

は何故であらう。

『まあ、義雄！』

母は吾子の馬上姿を眺めて喜悅の瞳を輝かせた。

『お母様、御機嫌よろしう。此の馬は太郎つて名な
んです。見て下さい。僕ちよつと、驅けさせますか
ら。』

さう云つて手綱をゆるめると鍔をとんと蹴つたの
で、仔馬は坂道をとつととつとかけつた。信子夫
人ははらはらした。

波の上を歩く人

小島政二郎

初めは少し退屈かも知れませんが、しまひへ行くと面白いから我慢をして読んで下さい。

白耳義の海岸に、オステンドと云ふ市街があります。昔は寂しい漁村でした。この海岸の沖合に、



四四

う。乗りたければ急いでお出でなさい」と云ふ知らせでした。

すると、その時ふいに蘆の中から一人の男の姿が現れました。まるで地面から湧き出たか、それとも今までそこにグッスリ寝込んでゐたのが、角笛の響に目をさまされて慌て、立ち上つたやうにも見えました。一體この人は泥棒でせうか、或は旅人でせうか。

兎に角この人の姿を見ると、上等席にゐた八人の人達は、云ひ合せたやうに今まで立つてゐたのを急に「もうこゝには一人も腰掛けるところはありませんよ。」と云はんばかりに、一人で一人前半位づゝ場席を取つて腰掛け一杯に坐つてしまひました。意地の悪い人はよくこんな事をしたがるものです。

では、この人達は八人とも意地の悪い人達なのでせうか。上等席にゐる位ですから、自分達は皆いゝ人達ばかりですのに。八人のうち四人までは白耳義の

カヅザンドと云ふ小島がありました。この間を今は蒸汽船が通つてゐるでせうが、昔は十人か十二三人しか乗れぬ小さな渡船で人や荷物を運んでゐました。今しも夕方、カヅザンド島を出る一番しまひの渡船が、棧橋に繋がれて客を待つてゐます。棧橋の向ふは蘆の一面に生えた土手になつてゐて、そこへ後から／＼と乗客が現れては船へ乗り込んで来ます。この渡船は、真中に六人漕手が坐つて櫂を操る席が出来てゐる外は、船先の方が下等席、艫の方が上等席、その後に船長が舵を握つて立つところが出来てゐました。

もう上等席にも下等席にも客が一杯になりましたが、親切な船長は、乗り遅れて今日中にオステンドへ行けない人があるとイケないと云ふので、纜を解く前に、

『ほう、ほう、ほう……』ともう一度角笛を高らかに吹き鳴しました。これは「最後の渡船が出ますよ

四五

貴族で、中でも二匹の猛犬を連れた若い騎士は、寶石の鑲めである帽子を被つて、時々威張つた様子でビンと張つた口髭を捻りながら端の者を見くだしてゐました。

それから生れのいゝ貴夫人が一人、鷹狩の歸りと見えて手に鷹を据ゑてゐます。この貴夫人も威張つた様子で、傍にゐるお母さんと、位のいゝお坊さんと、若い騎士と、この三人以外の者とは口も利きません。

さつきからこの四人は、ベチャ／＼まるで端の人にゐないかのやうに勝手放題な事を喋り散してゐました。

ところが、すぐ傍には、この地方での大金持が、立派な寛やかな外套を着て、泥棒に出逢つた時の用心に、軍人のやうな装をした家來を併に連れて腰掛けてゐました。成程、泥棒を恐れるのも無理はありません。家來の足許には金貨を一杯詰めた大きな袋

が二つ轉つてゐました。

その隣には、或大學校の教授が、何か研究に行つた歸りでせう、書記を一人連れて矢張濟まして腰掛けてゐました。この八人は、自分の連れとは話し合ふのですが、知らぬ同志とは一切口も利かず、知らん顔をして唯じろ／＼見合ふばかりでした。

さて、例の遅れて船に乗り込んで來た旅人ですが、チャリとこの八人の様子を見たまゝ、船の下等席の方へ歩いて行きました。

そこには食しい人達が一塊になつてゐましたが、一番先きに目についたのは、茶色の上着を着た禿頭の老人で、帽子も被らず何の飾りも身に附けてゐませんでした。それでゐて、おのづと具はる威厳があるところから、同船の人達は、慈悲深い市長様か何かのやうに思つて丁寧口を利いてゐました。

その隣には、老いた兵士が坐つてゐましたが、例の遅れて乗り込んで來た人を見ると、自分は軍隊で

骨折仕事には馴れてゐると思つたのでせう、船縁の方へ半分程身を引いて、彼のために席を明けてやりました。すると、乳飲子を抱へた若いお神さんまでが、幾らか腰をすましてくれたので、例の人はそこへ坐る事が出来ました。

「有り難う。」

その人は、いかにも品のいゝ態度で二人に禮を云つてから、靜かに腰を卸しました。すぐその後にはお百姓さんが一人、十程になる子を連れて坐つてゐましたが、舳の渦巻いた綱の上には、襦袢を纏つた皺クチャの乞食婆が、空の袋を持つて屈んでゐました。乞食ですから、無論渡船賃を持つてゐはしません。それを哀れに思つてトーマスと云ふ老いた船頭が只で乗せてやつたのでした。その時、老婆は、「有り難うよ、トーマス。今夜のお祈りの時、貴方のために、ピーター様のお名前を私は二度唱へますよ。」と云ひました。

二

これ等の人達は、上等席の人達とは違つて、誰も偉がつてもゐず、隔てなく仲よく話し合つてゐました。この方がどんなに端の見る目にも美しいでせう。

やがて渡船は岸を離れました。船長は舵を握つて艦のところに立つてゐましたが、船が外海へ出るが否や、船頭達に向つて、

「みんな、一生懸命に漕いでくれ。力一杯漕いでくれ。悪魔め！海は狂風の來るのを喜んで頬笑んでゐる。舵を操つてゐると、大きなウネリ波を感じるよ。困つたな、こりや嵐が來るに違ひない。」

船長の言葉は、波の音に馴れない人の耳にはなかなか聞き分けられないものです。ですから、この船長の言葉も、乗客には聞えませんでした。併し船頭達は、この言葉を聞くと俄に漕ぐ手に力を入れたやうに見受けられました。六人の櫂の調子がよく揃ひま

した。

ところが、上等席にある貴族達は、この死物狂ひで一生懸命に漕いでゐる船頭達の骨折なんか少しも察せずに、真黒な腕や日に焼けた顔や、櫂を動かす度にムクツ／＼と肩や二の腕に膨れ上る力瘤などを眺めながら、

『どうです、あの右側の二番目の船頭の顔と云つたらありませんね、をかしな顔をしてゐるぢやありませんか。』など、呑氣な事を云つては笑ひ合つてゐました。

そこへ行くと、下等席の人達は、日頃自分達も働いてゐるので、骨折仕事をしてゐる船頭達の身にもなつて同情してやる事が出来ました。その上みんな外に出て働いてゐる人達でしたから、老兵士も百姓も乞食婆も、怪しい空模様を見て嵐が来るのではあるまいかと早くも悟つて、心配し始めてゐました。

『こりや悪くすると、時化ですせ。我々が無事にオ

スタンドへ着けたら、それは全く神様のお慈悲ですよ。』と老兵士が百姓に云ひました。

そんな話を聞きながら、若いお神さんは、むづがる赤ん坊を寝かし附けようとして、低い聲で讃美歌を歌ひながら、静に膝の上で揺つてゐました。

その間に、海や空はどうなつたかと云ふに、太陽は西に沈んで、そこから赤い後光がさしてゐる外は茶色の雲が空一面に擴つて、やがて烈しい嵐が吹いて來さうな氣勢が感じられました。海は悲しげな聲を立て、唸り出しましたが、まだ左程波は高くありません。

程なく太陽が沈み切つてしまふと、今まで茶色に見えた雲が急に黒々となつて、突然西風が烈しく吹き出しました。それと一緒に波も高まつて、山のやうなのが後から後からと襲つて來ては、船を波の峰へ颯と引ッ攫つて行つたかと思ふと、すつと波の谷底へ放り込む勢は、何とも彼とも云へない位恐ろし



く、水は澄慮なくジャブツ、ジャブツと船の中へ這入つて来るやうになつたので、上等席の人達は生きた心地もなく眞蒼になつて顫へてゐるばかりでした。

五〇
う云ふ生死の中で高慢チキな事を云つてゐました。「奥様、御安心なさい。」と若い騎士が美しい貴夫人の耳に囁きました。「私は泳げます。船が沈んだら、すぐ貴女を抱へて岸まで無事に連れ戻します。併し貴女だけです。貴女のお母様まではとてもお助けする事は出来ません。」

「あ、沈む。」と、船が谷底へ引き入れられる時の恐しさに、思はず貴夫人が叫び聲を挙げました。

「最後のお祈をして下さい。」と頼んでゐましたが、どうかして助かりたいと自分の事はかり考へてゐるお坊さんの耳にはその言葉も這入らないのでせう。「キリストの神よ、どうか私だけはお助け下さい。」と人の事なんか構はずに勝手な祈りを上げてゐました。金持は、

「あ、私は何と云ふ不幸でせう。こんな下等な人間に混つて死ななければならぬなんて……。」と、か

きなさい。」

「オランダのお寺に入らつしやる聖母マリヤ様、

どうぞお助け下さい。私をお助け下されば、一生の間、お寺でお使ひになる蠟燭をお納め致します。それから金で聖母様の像を作つて献納致します。」と、大きな聲で祈りました。すると、

安らかにになりました。

「聖母マリヤが、オランダの寺にゐて堪るものかマリヤなんと云ふ者は、どこにもゐやしない。」と、學者が知つたか振に反對しました。

いや、若いお神さんばかりではありません。船中の人が、貴族も學者も船頭も乞食も皆この時一齊にこの人の顔を見上げました。御覽なさい。金色をした柔い髪の毛が、静かな朗かな顔の上で右と左とに別れて、肩の上に房々と縮れ掛つてゐます。顔は神しく澄みわたつて、思はず見惚れてしまふ位慈悲深い色を湛へて、あたりの物凄光景の中に優しく浮んでゐました。

上等席の方はこんな有様でしたが、デハ下等席の方はどうかと云ふに、初めに悲しみの聲を上げたのは、若いお神さんでした。

百姓と息子と老兵士と乞食婆とは何も云はずにこの人の顔から目を離す事が出来ませんでした。この人の顔さへ見てゐれば、嵐も恐しくなく、心は安らかでした。

「あゝ、可哀さうなこの子。誰がこの子を手助けしてくれるでせう。」

三

すると、その時まで黙つてゐた例の一番後から乗り込んで来た人が、

幸福にも、船は、船長の指圖がよかつたせゐでせう、沈みもせずにオランダの家々が見えるところ

「たゞ神様をお信じなさい。貴女も赤ん坊も救はれるでせう。」と初めて口を開きました。その落ち着き拂つた聲を聞くと、不思議に若いお神さんの心は

五二

まで来ました。併しどこに不幸が潜んでゐるか分らないものです。
後五十歩で岸へ着けると云ふところまで来た時に、ふいに横波を喰つて、あつと云ふ間に船は覆つてしまひました。皆は一度に海の中へ放り出されました。

その時でした。

『神様を信仰してゐる者は助かるであらう。信仰のある者よ、わしの後に従ふがいく。』と云ふ朗かな聲が聞えて来ました。

見ると、例の慈悲深い顔をした人が、波の上へスツクと立つて、水の上を静かに岸の方へ歩いて行くではありませんか。頭の上には丸い後光が輝いてゐました。

あれ、赤ん坊を抱いた若いお神さんが水の中から這ひ上つて、後光を持った人の後から波の上を歩いて行きます。



老兵士も、

『貴方の行くところなら、悪魔のところへでもお供致します。』

と云ひながら、海の上を歩いて行きました。百姓も息子も、乞食婆も、乞食婆を只で船に乗せてやつた報いで船頭のトーマスも一旦は波の下に沈みましたが、やがて浮び上つて水の上を歩いて岸へ辿り着く事が出来ました。船長は、板子にしがみ附いて、これも助かりました。

後の不信心者は、皆荒れ狂ふ波の下に沈められてしまひました。

(をはり)





幼年詩

若山牧水選

外國人(賞)

埼玉縣寶平野 慎吾

電車の中で私を見て笑った

女の外國人なつかしい

外國の人

評、美しい上品な歌です。

ゆすら(賞)

朝鮮京城 河野 浩
(九歳)

ゆすらの花がさきました

櫻の花みたいにまつ白く

さきました

評、これも美しく清らかで、何でもない様でながい所がある

雨(賞)

山梨縣尾山小學校 茅野 卓雄

雨が降りさうだ霧がこくなつた

向ふからくる人がよく見えない

朝起會の歸り

評、實際経験した事から出来た歌にはながい、いい所がある

うまや

福岡縣下妻校四年 友添 義人

うまやに

夕日がさして馬のはいするよ

ざくざく

評、うまい、實にうまい、少しうますぎる位だ。(牧水)

かげ

福岡縣下妻校四年 下川みさを

くらい所にいたらかげがなくなつた

かげがなければさびしいよ

評、右のと同じ。(牧水)

かがみ

山形縣下妻校四年 峯田アサ子

かがみのまへに立つたらかほが うつつて

五四

はずかしい

評、鏡の中のあなたの顔が見え、ます、ホラ、笑つた。(牧水)

櫻の木の下

山口縣鹽田校五年 木村 勇

いつも通る櫻の木の下

ひやい風が吹く

評、これも實際から来た歌でせう。(牧水)

牛

水戸高女一學年 久米 百代

うしうしそんなきたない所へ

評、牛がにつこり笑ひました。(牧水)

ひのまる

福岡縣下妻校四年 右田マツキ

青い麥に

ひのまるのかげうごくよ

魚つり

富里分校 大柴 喜孝

何度行つても

つれない魚が

今日はつれたよ

二匹の魚が

松の葉

北海道釧路オチニミナイ

佐藤 錠二
(十三歳)

雪がきえると

おにはの松は

あゝをい青い

葉を出した

私の家

東京西馬場町廣申塚 日向 もも
(二五歳)

あそんで歸つたら

家の障子があかるい

母さんの聲がする

たのしそうな

私の家

大工小屋

新潟縣來迎寺村 藤井 靜代

大工小屋から

煙が出て

火事にならなきや

よいがなあ

家を建てる木材が

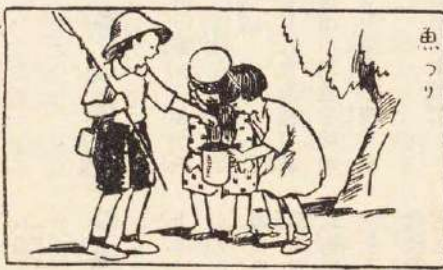
もえてしまふと困るなあ

青いお池

茨城縣水海道校四年 田村 壽美

青いお池に

魚つり



石なげた

じやふんといつて

わになつた

さくらの花

千葉縣平岡校高二 鈴木 とし

できない算術を

みてたら

さくらの花が

美しいよ

停車場のさくら

千葉縣平岡校高二 長島 實

一本さくらが

さいてたよ

僕達はその下で

轉任の先生送つたよ

風がふいて

花びらが

先生の室に

とびこんだのを

覺へてるよ

五五

四つの幽霊

三井 信衛

(一) 奇しき運命の孤兒



發端

八月十二日の夕刊は、一齊に大きな標題を掲げて、ある出来事を報導しました。それはオリエンタル・キネマの映畫俳優であるトオマス高田が、突然映畫界から身を退いて、しかも行衛が不明になつたといふ、意外な事件でした。

『あの高田の姿も、もうスクリーンには見られなくなつたのか。』
多くの映畫好きな人たちは、新聞に掲げられた高田の寫眞を眺めながら、かう言つて溜息を洩しました。
その筈です。高田は四年前アメリカで、名監督トオマス・エイチ・インス氏の下に腕を鍛へた優秀な俳優で、大變表情が巧みであつた

上に、又扮装が殊の外上手で、殆んどその道の天才とさへ言はれてゐたのでした。わけても高田の主演となつた『ゴーストマン』といふ怪奇活劇は、封切されたのは今から三年前でしたが、日本でも稀な映畫として、未だに人々の目に残つてをりました。
何故彼は、突然住み慣れた映畫界を去つたのでせうか？ いや、映畫界を去つた彼は、一體何處に

身を寄せたのでせうか？

それを知る者は誰もなかつたがそれから又暫く經つて、あらゆる新聞は一齊に高田のことを報導しました。が、その記事は、高田が再びアメリカへ行つて、早川雪洲等とその國の映畫に出るといふのと、それからフランスへ行つて、舞臺の人となるといふのと、この二つに分れてをりました。

かうしてさまさまの噂の中に、トオマス高田のはつきりとした行衛は、未だに何の手掛りもありませんでしたが、これが抑々この『四つの幽霊』と題する、奇怪な物語の發端なのです。トオマス高田、彼は一體何處に身を匿したのでせうか？

一 純郎と貢一

代々木山谷にある園見家のお邸は、純郎が病床に臥してからといふもの、一層淋しい日が打ち續きました。もう父も母もずつとの以前にあの世へ去つて、今では純郎と弟の貢一と、さうして田舎から來た下男の宗兵衛と、下女のお喜美との只つた四人暮しでした。

『兄さん……。少しはいゝの？』
純郎のベッドの側に、ちつと附き添つてゐた貢一が、つと足の顔を覗き込んでかう言つたが、兄はもう何事も答へずに、只深い眠りに陥つてゐたのでした。

先刻まで見舞に來てゐた麻布の伯父も、もういつか家へ歸つて、

この薄暗い病室には、月が青々と射し込んでゐました。何といふ静かな、淋しい夜でせう。貢一が氣づかはしげに純郎を見守つてゐた時、そつとドアを開けて入つて來たのは、下男の宗兵衛です。
『醫者が來たよ、醫者が……。』
『さうかい。ちやア早く、お通し申しておくれ。』

間もなく下女のお喜美に伴はれて、靜かに病室へ入つて來たのは掛りつけの近藤といふお醫者でした。純郎の身體を診終つて外へ出た時、貢一はその後を音もなく追ひ絶りながら、囁くやうに訊きました。

『先生……。あの……。お兄さんの御容態は如何でせうね？』

「あゝ、お兄さんか……。」
お醫者は額の邊りに深い小皺をよせて、しばらくは黙つてをりましたが、つと思ひ切つて答へたのでした。

「貢一さん、ではあなたにだけは知らしておくが、お兄さんは到底難しいと思ふ……。」
「えゝッ？ それは本當でせうか……？」

「あゝ……。それも、もう餘り遠いことはないのだよ。」
「先生、どうかお兄さんを助けて下さい。……私には只つた一人のお兄さんです。何とかして、助けして下さい……。」
さう言ふ貢一の顔をちつと眺め深い同情に目を瞬いた醫者は、何

事も答へずに、静かにそこを立ち去つたのです。

二 「嘘を言はないで……」

「貢ちやん……。」
それからざつと半時間ほど経つた後、純郎は不圖ベッドから首を擡げました。

「あゝ、お兄さん、目がさめたの。もう少しの辛棒ですよ。今、お醫者は、もう五六日、五六日もしたら、すつかりと元氣が出るつて言ひましたから……。」
さう言つた貢一の聲は、何故ともなしに慄へてをりました。すると純郎は、それには何も答へなかつたが、ちいつと弟の顔を見て言ふのでした。

「貢ちやん、もういつまでも僕に嘘をつかない方がいゝよ……。」

「えゝ？ 嘘……。」

「僕は何も彼も知つてゐる……。」
純郎は淋しく言ひました。「自分の身體のことは、自分が一番よく知つてゐるものだ。……僕がもう近い内に、死んで行くといふこともちやんと僕にはわかつてゐるのだよ……。」

「そんな馬鹿なことが……。兄さんは偶に病氣をしたから、そんなに思ふんですよ。」
「いゝや」と純郎は強く首を振りました。「心配しないでつていゝんだよ。ね、貢一、兄さんはすつかり覺悟してるんだ。……それに又お前と僕は仲のよい兄弟ぢやな

いか。その兄弟が……死際まで嘘を吐き合つてゐるといふのは、何といふ哀しいことだらう。だから決して嘘を言はないで、本當のことを話しておくれ。……僕は是非呼吸のあるうちに、お前に語つておかねばならないことがあるのだから……。」

言はれて貢一は、ちいつと深く首垂れました。兄はもう何も彼も知つてゐるのだ。しかも亦兄は、覺悟さへしてゐると言つた。さうまで言つてゐるのに、もうこの上いつまでも秘してゐるのは、死んで行く兄の心を、却つて掻き亂すことにならう。……貢一はつと決心したやうに、
「お兄さん、本當は……。」

と只それだけを言つて、純郎の手を強く握つたのでした。

「貢一、よく言つてくれた。……これで僕も、何だか心が伸びくしたよ。」

兄は貢一の手を取つて、また淋しげに微笑みました。貢一の二つの目には、いつの間にか涙が溢れてゐたのでした。

「貢ちやん……。」不意に純郎はかう呼びました。

「えゝ？」

「あの大きなテエブルの、一番右の抽斗を開けて……それから、青い状態に入つたものを出しておくれ。」

言はれて貢一が、兄の手から一挺の鍵を受け取ると、何故ともな

しに関めく胸を抑へながら、静かにベッドを立ち去つたのでした。

三 色の褪せた手紙

次の部屋には桃花心木で拵へた立派なテエブルがありました。まだ父や母が生きてゐたころから、その紅いテエブルはめつたに開けたことはなかつたが、今貢一が兄から借りた鍵で、言はれた通り一番右の抽斗をそつと開けると、そこにはもう古びて色も褪せた、一通の手紙が入つてをりました。

「お兄さん……。これでせうか？」
貢一はそれを持つて、再び静かに純郎の側に來たのでした。
「あゝ……。と純郎はそれを手に取つて、しみんと言ひました。



「貢ちゃん、兄さんはこれだけは是非、お前に言っておかなくちやならない……それは亡くなつたお父さんの、御遺言でもあつたのだから、どうか心を落ち着けて聞いておくれ……」

「はい……」
「お前は今まで何も知らなかつたらうが、實は貢ちゃんとは、本當の兄弟ぢやないのだよ……」

「え……？」
「……が病室であることも忘れたやうに、貢一は大きく目を睨りました。何といふ思ひがけない兄の言葉だらう！」

「え……？……それぢや兄さんは……」

「うむ、お前は丁度十四年前、お

父さんがまだ盛岡の市にゐらしたころ、その家の裏にあつた大きな樫の木の下に、可哀想にも捨ててあつたのだ。……お前の苗字も名前も、勿論何一つわからなかつたが、お父さんはお前を拾ひ上げて、貢一といふ名をお付けになつたんだよ。それから僕と一緒に可愛がつてお育てになつたのだ……」

初めて聞かされた自分の生ひ立ちに、貢一は深い思ひに閉ざされた。

父、見知らぬ父！ その父は一體何處にあるのであらう？

「……さうして、捨てゝあつたお前の身體には、この一通の手紙が添へてあつたのだ。」

兄から示されて貢一が開くと、そこには美しいペンの字で、細々と認めてありました。けれどもその最後には、只「父より」と書いてあるばかりでした。

貢一はその手紙を、再び桃花心の木の机の奥深く藏ひました。だが純郎は、刻一刻と危篤に陥つたやうでした。今し方前に來た伯父の香川も、純郎の側に來ましたが、園見の家の親戚と言つても、今はこの香川の外には誰もなかつたのです。

「貢一……」
つと首を擡げた純郎は、直ぐ側にゐる貢一の手を、しつかりと捕へました。

「僕が死んだ後は、いつまでもこ

の園見の家を、大切にしておくれ……。それから若しお前のお父さんに會ふやうなことでもあつたら一緒にこゝで暮しておくれ。……それは亡くなつたお父さんの、御遺言なのだから……」

「お兄さん……」

「お、純郎、心配するな。伯父の香川も、しつかりと純郎の手を取りました。」

「わしは必ず貢一を守つて、この園見の家を立派に立て、見せるよ。」

「伯父さん……ではくれぐれも。」
さうして純郎は、もはや歸らぬ人となつたのです……

四 謎のやうな祈り

小石川臺町の閑静な高臺には、大きなゴシック風の建物がありました。

だが、もう餘程以前に建つたものと見え、その屋根もその窓も又その壁も、一様に黒ずんだ灰色に染められてゐたのでした。

それは今から二十二年前、アメリカ人のマデン・ルウカスといふ人の建てた、黎明教會といふ教會で、いまの會主の波多野裕策は、博學な慈悲深い宗教家として、多くの人々から、敬はれてをりました。

今、その大きな石段を昇つて、靜かに禮拜堂のドアを開いたのは、貢一少年でした。

兄の生きてゐた時分には、この

波多野牧師には數度の深い教へを受けた貢一、彼は何をかおもてこの教會を訪れ、さうして死んで行つた兄純郎のために、心からのお祈りを捧げて貰はうと思つたのでした。

「先生……」

がらんとした會堂の中に入ると波多野牧師は禮拜壇の片隅で、大きな聖書を讀んでをりました。

「お……貢一君かい。」

「はい……兄が亡くなりました……」

さう言つた貢一の目には、早や涙が溢れてゐたのでした。

「ふむ、兄さんが、純郎さんが……」

と牧師も早や、深い哀しみに襲

はれたやうに、聖書を伏せて音もなく立ち上りました。

「先生、どうか兄さんのために、お祈りをしてあげて下さい……」

「お、それではこれから、代々木のお宅へ伺ひませう。」

父のやうに優しい波多野牧師、やがて彼は貢一に伴つて、小石川の會堂を後にしたのでした。

さうして何時間かの後、代々木の園見家の門前をつと入つたが、その時波多野牧師は、何故かそこに、ハツと立ち止つてしまひました。

「先生……どう遊ばしたんです。」

「いやや……何でもない……」

貢一の言葉に牧師はさう答へたが、その場にちつと佇んだまゝ、

靜かに「十字を切つたのでしたさうして彼は、兄の屍體の置かれてある一室に入ると、ちつとその前に首を垂れ、深い祝福を與へました。

その折柄、そつとドアを開けて入つた來たのは、伯父の香川でした。

「お、これは……波多野先生、御遠方をよくこそお出で下さいま

した。さぞかし純郎も喜んでをりませう……」

が、波多野牧師は、それには何一言も答へなかつたが、立つてゐる伯父の前に、俄かにがばと跪きました。

「お、父なる神よ！ 哀しき我等を救ひたまへ……！」

さうして側にゐる貢一の手を、ちいつと握り締めたのでした。

(つづく)



牧師は何故こんなことをしたのでせうか？ その暴動の一つ一つは不思議の種です。賢明な皆さんは、もう何かしら奇怪な事件が生れようとしてゐることをお察しになつたでせう。孤獨な貢一少年の周圍に起らうとしてゐる事件、それは一體何事でせうか？

船

竹久夢二

千艘や萬艘

赤い帆

青い帆

おふねや

ぎつちらこ

千艘や萬艘

南の風だ

帆綱をはれよ

おふねや

ぎつちらこ

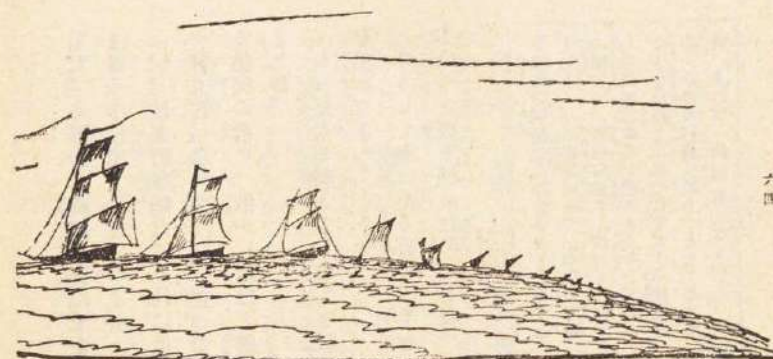
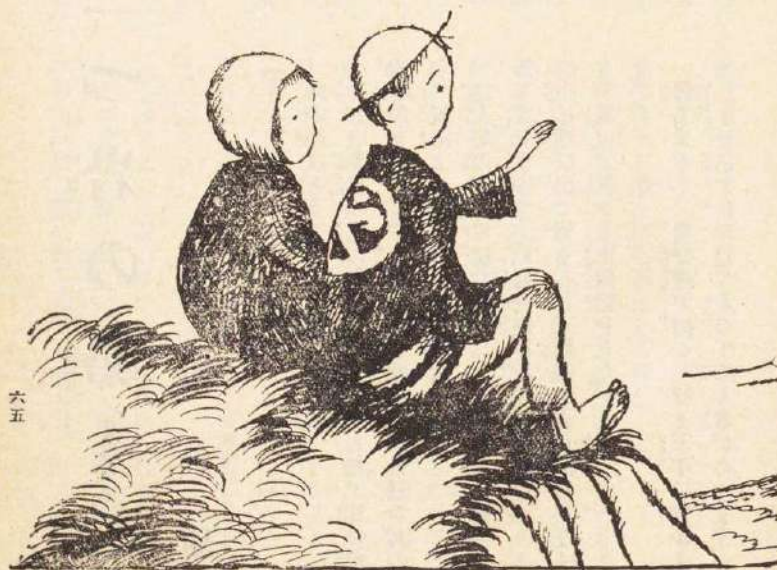
千艘や萬艘

おいらの濱だ

帆綱をおろせ

おふねや

ぎつちらこ





二つ岩の貉 (推薦)

三浦 大船

六六

佐渡に初めて貉が渡つた頃でした。

或る村に、太助と云ふほんたうに正直な評判者の親子が住んで居ました。太助の家は大變貧乏で、毎日山へ薪を取りに行つては、其の日の御飯を頂いて居ました。

今日も父子二人の者は、山で働いて居たのです。『父つあん。もう家へ歸らうか……』と太助は、父の方を見て云ひました。

『うん、もう歸るとしよう。』

此の時はもう、太陽も西の山に沈まうとして、空は美しい夕暮の色に染められて居ました。日の光は木の間を通して、油ぎつて赤味を帯びた爺さんの顔を、氣持よく照して居りました。

二人が山の麓に出た時には、太陽は全く西の山に落ちてしまつて、只自分達の行く路がぼつかりと闇の中に浮び出て居ました。親子の者は淋しさをまぎらす爲に、色々と世間話をしながら歸つて行きました。

暫くすると、自分達が歸つて行く下手の方から、一―群にゴブ目かけて走つて来る者があります。

『も見ませんが。』

『何見ない？ 見ないと云ふ法があるか。隠しだてをしないと、恐い目にあはせるぞ。』

『でも見ませんでござえます。』

『ではどうあつても見ないと云ふのか、よし。』

お役人の眼は恐しいやうにかゞやきました。それを見かねて息子の太助が、

『え、あのお役人様。私等が山から下る時、下の道を黒いもんが走つて行きました。父つあまも年がよつてゐますから、二人づれで見たのを忘れたんでせう。ねえ、父つあま。』

『うん、そうだつたなあ。ほんとに俺は年のせいで忘れちゃしたぞ。どうかお役人様、御勘辨して下さいまし。』

『うん。そして其の黒いものは何處へ行つた。』

『はあ、此の道を真直に行きました。』と太助は、横手の山へ行く細い道を指さしました。

『おやッ』と思つて後を振りかへつて見ると、その者はすぐ前に来て、二人に手をあはせて居ります。二人は驚いてよく見ると貉でした。悲しい事に言葉が通じませんが、それは『助けてくれ』と云ふやうに見えました。そして貉の可愛らしい眼には、大つぷの涙が光つて居ました。二人のものは可哀さうになつて、

『うん、よし、助けてやるぞ。』と云つて、後の方に隠してやりました。

すると今度は大勢の人々が手に手に松火を持つて上つて来ました。先頭にはお役人らしい人が五六人ゐはつて来ました。そして二人の者を見ると、大聲出して、

『あ、こりや百姓。お前達は今此處へ貉が逃げて来たのを知つて居るだらう。』と、訊きました。

二人は非常に驚いたが息を吞んで、

『へえ、あの私等今山から下りたばかりで、なんに

六七

「うんさうか。隠しては爲にならんぞ。」とお役人は自分の刀と二人の顔を見て、家來をつれて細道を急いで行きました。

其等の影が森の彼方に消えるまで二人は見つめて居ました。影が見えなくなると、

「太助歸らう。さあ、お前も歸らう。」と、貉の頭をなでながら云ひました。

三つの黒い影が、彼等の歸るあとに、白い路に印されて行きました。

(二)

淋しかった太助さんの家も、楽しい日が續きました。貉は近所の者からも可愛がられ、こんな可愛らしいものを殺さうとした役人を皆悪く云ひました。で、誰いふともなく、貉の事を圍ちやん／＼と呼びました。近頃は人間の云ふ事をすっかり覚えてしまつて、一寸したお使は、一人で行つて来るやうにな

りました。

こんなに楽しく暮して居た太助の家にも、悲しい事が起りました。

それは太助の父が、お役所へ行つて罪を被なければならぬと云ふ事でした。

其時は丁度、圍ちやんが遊びに出て家に居りませんでした。お役人は二三人もやつて來ました。先に名主さんが家へ入つて來て、

「今日は、おい甚吉居るか。」と聲をかけました。甚吉が出て見ると、名主さんがこまつた様な顔つきで、

「お前偉え事が起きたぞ。あのお前、貉飼ふてゐるのか。御役人様が來て、お前が飼つてゐると云つて、お前を引つぱつて行くと云はれるぞ。」と、おろおろ聲で云ひました。

父親はあまりの事に驚いて、物も云ひ得ませんでした。すると御役人が、すつとはひつて來て、

「お前は甚吉と云ふのだな。よくもお前は貉を飼つ

て置いたな。」と云ふや、すぐさま縄で後手にしばつてしまひました。

息子はちいさんに取すがつて泣きながら、身代りにして下さいと願つたけれども、頑固なお役人は、「うるさい。」と一言云ふばかりでした。父親はとうとう家から引き出されました。

親子のものは、只涙の眼で「行つて来るぞ」「行つておいでなさい」と云ふ様な別れの挨拶をしました。

お役人は後を向いて「日暮に親父を迎へに來い。」とすごい眼をして行きました。

皆の姿が小さくなると、急に涙が一杯になつて、太助はすうり泣きをしました。

すると何處から歸つて來たか、圍ちやつて來て、太助の傍へすりつきました。太助は、

「おい、圍ちやんや。うちの父つあんはなあ、悪い役人が來て引張つて行つてしまつたぞ。俺は悲しうて泣いてるが、おれの云ふ事が分るか。」



すると團は、眼に大粒の涙を浮べてうつむいたのでした。

『お、お前も悲しいか、うん。』と、又新しい涙が出ました。

俄に團は、太助から離れて、非常に早く庭の方へとび出しました。何處へ行くのかと見て居ると、すぐ前の道を横へ曲つて行きました。

それから何時間が過ぎましたが、團は歸つては来ませんでした。

其處へひよつくりと父親の甚吉が歸つて来ました

『お、父つあんや。ばかに早かつたの。』

父親は不思議さうな顔をして、

『はて、俺はどうして歸つて来たんなあ。』と一人ごとの様につぶやきました。

すると太助は嬉しさに、

『神さまが助けて下さつたんだ。ほんとにさうだ。』と、叫びました。

二人の者もたゞ神様のお救ひだと、よろこんで居ました。さうかうして居るうちに、日はだん／＼と暮れて行きました。鶏が淋しい音をたて、鶏小屋に上りました。夕暮は次第に深くなつて来て、前の松の梢を染めて居た夕陽は最う西に入つてしまひましたが、まだ團は歸つて来ませんでした。二人の者は團の行衛を案じながら、貧しい夕餉に坐りました。其の時、こと／＼と、音がして、團が縁端へ来ました。

『お、團ちゃん、歸つたのか。うん、此處へ来い。今日はするぶん遅かつたね。』と二人は機嫌をとりましたが、すこしも嬉しさに常の様に側へ来ません。不思議だと思つてよく見ると、どうでせう。團の眼には一杯涙が浮んで居ました。

『おや、何した』と側へよつて見ますと、驚きました。背中一杯打たれて、傷が付いて居ました。

『お、こりあ何うだ。』と、ぢいさんは一杯涙を浮



『わりあ俺の代りに打たれて来たか、うん。』と云ふと、微に首を縦に振りました。

『うん、そうだったか。ほんとにすまなんだ。こんなもんでさへ少しの恩着たと思ふて、代りに打たれたか。』

親子二人の者は、この小さい動物に向つて、神さ

まのやうに手を合せて御禮をのべました。それから
團ちやんの傷を手入して、團ちやんを真中にして、
色々な話をしながら床に就きました。

翌朝皆が起き出た時には、小鳥はやつと眼を覺し
たばかりで、東の空は黄色になつて、まだ太陽は出
ませんでした。

ちいさんは團に向つて、悲しい別れの話をしまし
た。團はだまつて、うつむいて居ました。

「お前と長く居りたいけれどなア、團や、俺等が苦
しいのは、いくら我慢しようけど、此所に居ると
お前の命が無えからなあ。どうか今のうちに行つて
くれ。外の人に見られると悪いからな。よう團よ。」
と涙を流して父親は云ひました。

團も分つたと見えて、暫くはちつとして居まし
たけれども、やがて二人の者に名残惜しさうに何度
も何度も頭をさげて、遂に姿が見えないやうになり

ました。

(三)

父親はふとした事から、病の床についてしまひま
した。それは團が居らなくなつて、一週間位後の事
でした。太助はたゞ一人野山に出ては、父親のお薬
代と御飯を買ふ錢とを働き出さなければなりません
でした。

今日も太助は、山又山を歩き廻つて居ました。そ
の内に歸る頃になつたので、歸らうとして歩いて行
きました。が、いつも来る道をどう間違へたのか、今
まで見た事もない端がない野原に來ました。

あゝ變な所へ來たわいと思つて居ると、遙か向ふ
の方から、大勢の人々が此方へ向つてやつて來ます。
はてと思つて居ますと、段々近づいて、立派な御大
名が何百人とも知れない供を引きつれて、黒馬を靜
靜歩ませ、其の上から太助の方を見て居ます。



「あゝ御大名様だ。」と思つて、堅くなつて側に平
伏して居ますと、黒馬の御大名は太助の前でびたり
と馬を留め、

「こりあ太助、面を上げい。」と云ひました。

太助は驚いて顔を見ると、見るからに立派な衣装
を着け、冠を被ひつて居る白髪の老人でありました。

何處となく神様の様に尊く思はれました。太助は、

「はあつ」と云つて、又頭を下げました。

「汝は我々にとつては、非常な恩人である。又其の
方は、親によく仕へると聞いてゐる。今その褒美を
與へるによつて我が館に參れ。」と、神々しい言葉を
かけて行列は進み初めました。太助は、何事か分ら
なかつたけれども行列の最後について行きました。

行列は長い廣い野原を横きつて、一つの大きな岩穴
の中へはひつて行きました。中には立派な、お寺と
もお宮ともつかない建物が、幾つも並んで居りまし
た。空はほんたうに美しく晴れ渡つた青天井でした。

立派な建物の中央に、先の神々しい人が坐り、兩側には美しい眼の覺める様な女が數十人坐つて、又偉らさうな人がたくさん並んで居ました。太助は士間に坐りました。やがて老人は口を開いて、

『私はつと以前、貴方や貴方のお父さんに救はれた團です。貴方方に御別れして以來出世して、名を團三郎と改め手下も此の通りです。どうか今日は貴方への御恩返しだから、心やすく話して下さい。其れにこれは貴方への御禮の印ですからどうか取つて置いて下さい。又お父さんの病氣は、どうか此のお金で直してあげて下さい。』と云つて、さんほうに黄金を山のやうに積んで太助の前へ出しました。

太助は眼から熱い涙が溢れ出しました。それをおし戴いて、次に御酒を頂戴しました。やがて美しい女達が歌を歌ひ出しました。美しい何とも云へない良い聲でした。

だーん、だーん 團三郎
二つの岩屋に
黄金を集め
恩と情に吹き散らす。

たどうつとりして居ると、皆立つて踊り出しました。すると突然、皆の顔は、口の尖つた見にくい絡の顔になりました。

『あゝ』と思つて居ると、今まであつたはずの宮殿も人々も無く、自分はたゞ一人、淋しい野原に坐つて居るのでした。けれども黄金ばかりは、山ほど前に積まれてありました。

附。二ツ岩の團三郎は今でも神様に祀られてあります。佐渡へ来た人々は皆御詣りに行く所で、相川と云ふ所にあります。これは佐渡へ船が渡つた初め頃の傳説です。
(作者住所、新潟縣佐渡郡畑野村)

晝寝 (推薦)

和歌山市 柳瀬まさとし

海風涼風
晝寝ごろ

坊やは
木蔭の
ハンモック

りんく
風鈴
ねむりませう





わすれぐすり

長崎 五 六

ある山里の村に、一軒の宿屋がありました。昔はこんな山間のところでも、旅人の往来があまりして、毎日夜泊りの客で、この宿屋でも相應に繁昌してゐました。

そこでほかの宿屋は、商賈をへなしたり又はほかの土地へ引移つたりして、この宿屋一軒だけ残りました。

ギリシャ神話

オデッセーの航海

難船の巻

藤川 篤 夫 譯
寺内 萬治 郎 畫

オデッセーの乗つた船は、次第に「人魚の島」へ近づいて参りました。この島には美しい人魚たちが大勢棲んでゐて、沖を通る船を見ると、なんとも云へぬいゝ聲で歌を唄ひ始めるのでした。水夫達は一度その聲を聞く

と、たゞもうラッとりとしてしまつて、前後の考へもなく島へ上陸してしまひます。上陸したら最後、水夫達は皆人魚の爲に殺されるのです。この島の海岸には、殺された人々の骸骨が、到處所にころ／＼と轉がつてゐました。

併し悪水夫達は、人間の骨を見ないで、人魚の可愛らしい顔と、長い黄金色の髪に引寄せられて、つひうか／＼と上陸してしまひます。オデッセーはこの事をよく知つてゐましたから、船が次第に島へ近づいて來ると、水夫達の耳の穴に蠟を詰め込んで、人魚の唄が聞えないやうにしてしまひました。併し、オデッセー一人だけは蠟を詰めこまないで、その代り自分の身體をしっかりと帆柱に縛らせて、どんな美しい歌聲を聞いても、決して島へは上れないやうにしました。

やがて翌朝の音とともに、人魚の唄ふ聲が聞えて参りました。それを聞くとオデッセーは、前の事などはすっかり忘れてしまつて、身をまがいたり、眉を動かしたり、地面を踏んだりしながら、家來達に向つて、早く繩を解いて、島へ上らせて呉れるやうにと頼みました。併し、耳が塞がれてゐる水夫達は一向平氣で、どん／＼和を潰いで、遂にこの恐ろしい島から遠く離れる事が出来ました。



往來を眺めてゐました。

『こんなにつづて來ては仕方がない。今にこの家へ人手に渡さなければならぬ。なんとか今の内に、いい工賃があればいいのだなあ』と言つて、亭主は胸組みをしました。

おかみさんは、

『それだから前から早く商賈をへなしよう』と、すゝめたのに、お前さんがいつまでも、黒圖々々してゐるので、だん／＼貧乏になつて來たのです。

すると亭主は、

『今更そんな事を言つても仕方がない。商賈をへなしたいにも金はない。あゝ金がほしいなあ。』

夫婦は、一つ、二つと星を見て來る空を眺めながら、溜め息をついてゐました。

やがて山寺の鐘が「ゴーン／＼」と聞へますので、

『あゝもう日が暮れる。看板へ灯でも入れよう』と、軒先の行燈へ灯を入れますと、すげな行燈も、バツと明るくなつて、(めうがや)と、筆太に書いた字が讀まれました。

この行燈を見かけて、入つて來た一人の旅



シラと云ふのは、足が十二本で、頭が六つもある怪物でした。オデッセーの船が近づいて来たのを見ると、怪物はその長い首を延ばして、船の間に家来の六人、その鋭い口に啣へてしまひました。

流石のオデッセーも、このシラだけはどうする事も出来ませんでした。愛する家来達が殺されるのを見ながら、手をつかれてこの島を去るより他しかなかったありませんでした。

やがて船は、島の神の牛が草を食べてゐる

美しい島に着きました。

以前、魔法使のサーセは、オデッセーに向つて、

『貴方は決して、島の神の牛を殺してはなりません。もしその牛を殺すと、貴方の船は難船して、家来達は一人残らず死んでしまひますから……』と、云ひました。

併し、家来達は、餘りお腹が空いたもので、オデッセーの眠つてゐる間に、こつそりと牛を殺して、食べてしまひました。

忽ち、恐ろしい出来事が起りました。

引き裂かれた牛の皮が、ひとりでに動きだし、串に刺された肉が、モ〜と聲を立てて鳴き出したのです。

家来達は驚いて、眠つてゐるオデッセーに叩き起して、大急ぎで船に乗り込みました。併し、未だ一町も行かない中に、烈しい大暴風が吹き起りました。帆柱は二つに折れて、どこかへけい飛んでしまひ、船は碎けて船は全く進退の自由を失ひました。

と、今度は雷が落ちて、船が火で一杯になつたやうに見えました。その拍子に、乗つ

てゐた人々は一人残らず、海の上に掃き落されてしまひました。

オデッセーはふと気が附いて見ると、自分だけ一人が波の上に乗んでゐて、あたりには家来達の影も見えませんでした。オデッセーは波の間を泳ぎ廻つて、木片を集め、それで一つの筏を作る事が出来ました。

ところが、困つた事には、筏は潮の流れに乗つて、次第に例の恐ろしい怪物、シラの住んでゐる島の方向へ、流れて行く模様なので



少のあるところを見ると、よつぽとありさうだ』と亭主が言ふと、おかみさんは、

『ドレ〜チヨイトお見えなさい』と扇巻を手を取つて、

『なる程、澤山入つてゐますね。このお金の半分もあつたら、私達はどんなに榮が出来るかあ、お金がおほしい、お金がおほしい』と、夫婦揃ひで、お金がおほしいと言つてゐました。

やがておかみさんは、何か考へてゐました。低い聲をして、

『もしお前さん、このお金を取るの、工賃があるがどうでせう』と言ひますと、亭主は驚いて、目を丸くして、

夫『そんな事をすれば泥棒だ。泥棒をすれば二人が懲役に行かなくてはならない』

婦『そう早合ひ込みをしてはいけませんよ。その工賃と云ふのは、このお金を預けたことを忘れさせるのですよ』

夫『ナニ忘れさせる、そんな事が出来るものか』

人がありました。

その姿を見ると、その頃流行つた、(モヘル)と云ふ、縞縞のトンビ合羽を着て、尻端折の下から白メリヤスの股引が見えて、黒皮の半靴を穿ひてゐました。

『今夜は御厄介になりますよ』と言つて、靴を抜いて上りますと、夫婦は喜で一番上等の二階座敷へ通しました。

ところがその一番上等の座敷も、しばらく手を入れないので、壁は落ちかゝり、天井は雨漏りのシミだらけで、畳はブク〜ジメ、汚れた座り心地の悪い、汚いところでした。夫婦は交る〜お客の前へ出て、お世辭な言つてもてなしました。

やがてお客は寢床へ入る時に、扇巻を出して、

『これは大切な物だから、明日立つ時まで、シツカリと預つて下さい』と言つて、亭主に渡し、そのまゝ横になつてしまひました。

夜が更けてから、下座敷で夫婦は、ヒソヒソ話をはじめました。

『久しぶりによいお客が来て有難い。それにこの預つた扇巻は札らしいが、ズツシリと重



オデッセイは驚いて、どうかしてこの潮の流れから逃れたいと思つて、四圍を見廻して居ますと、一本の無花果の木が、海岸から長くその枝を海の方へ伸ばしてゐるのが眼に入りました。

オデッセイは直ぐその枝に飛び附きました。そして一日中、海風に吹かれながら、まるで蠅のやうにぶら下がつてゐました。

夕方になると、幸ひ潮の流れが變つて、彼が再びオデッセイの足下へ歸つて來ました。オデッセイは枝の上へ飛び下りて、あり合せ

た木片を取り、力の限り漕ぎました。九日九夜の間、彼は波の上を漂つてゐましたが、十日目の朝になつて、漸く一つの島へ着きました。この島には、カリブソーと云ふ美しい女神が住んで居ました。

カリブソーは照り輝くやうな着物を着て、金の帯を締め、歌をうたひながら、金と銀の枝で綴つてゐました。そして、オデッセイが來た事で大變喜んで、立派な着物を持つて來て着せたり、おいしい御馳走を作たりして、心の限りもてなしました。

婦「ところが出来るだらうと思ふのは、ホラお前さんも覺へてゐるでせう。あのおふか嬢さんが、亡くなつたお爺さんのことばかり思つて、毎日泣いてゐた時に、あれを食べさせたら、ケロリと忘れたやうになつたのを」

夫「そう、裏の畑の老荷を食へさせたことだらう」

婦「さうですよ。それから、空兵衛さんが毎日お金の儲けに來てしやうがないので、あれを御馳走したら、あれつきり、來なくなつたじやないの。あんなに利き目があるのだから、明日の朝、老荷料理をこしらへて、澤山食べさせたら、お金を忘れて行くかも知れない、一つ行つて見ようではありませんか」

夫「それじやあ行つて見よう。夜の明けないうちに、裏の畑で取つて來よう」

婦「さうして下さい。わたしは料理の支度をしませう」

と、夫婦二人は一晩眠らずに、自分勝手の相談をして、やがて亭主が畑から、老荷を澤山取つて來れば、おかみさんは料理をはじめ

カリブソーの家の廻りには、紫色の薔薇が、一面に咲亂れてゐました。オデッセイは美しいカリブソーから、自分の欲しい物はなんでも貰ひましたけれども、少しも楽しいと思はないばかりか、悲しくて仕方がありませんでした。オデッセイは矢張り、自分の生れ故郷が戀しかつたのです。この何もない美しい島で、何時までも生きてゐるより、自分の故郷の山野を一目見て死の方が餘程いいと思つてゐました。

オデッセイは毎日海岸へ行つて、故郷イ

サカの方角を眺めながら泣いてゐました。カリブソーは、もうこれでは到底、オデッセイを此の島へ留めて置く事は出来ないと思ひました。

「オデッセイせん。もう泣かないで下さい。私は貴方をお國へお歸しします。私は自分の考へよりも、神々のお心通りにしなければなりません。さ、この舟を差上げますから、森へ行つて好きな木をお切りなさい。そして筏を作つて、お國へお歸りなさい。」と、優しく云ひました。



て、お客の起るのを待つてゐました。旅人は腹心がわるいので、中々眠られず起たり寝たりしてゐる中に、いつか晝の寝で、グツスリと眠つて、目を覺ますと、太分日ざしが高くなつてゐるので、起き出して顔を洗ひ、食事のお膳へ向ひました。

先づお膳の蓋を取ると、ブンと老荷のよい匂ひがします。一口吸つて「これはうまい」と舌鼓を打つて、向ふ付けのお皿へ箸をつけると、これも老荷の煮つけ、こちらのお膳口はと見ると老荷の酢の物、そのほか澤山、老荷づくめの料理に、お客は喜んで、

「さすがは老荷屋と言ふだけあつて、珍らしい料理だ。こんな料理は東京でもめつたに口へは入りません」と、賞めしたので、お給仕に出た、おかみさんは、うまく行きさうだと、内心で喜びまして、階子段から下りて來ると、待ちかまへてゐた亭主は、

「どうだうまく行きさうか」と言ひますとおかみさんは、ニコニコして、

「大そう喜んで、みんな食べてしまつたよ」



オデッセーはどんなに喜んで事でも直ぐ森の中へ行つて、大きな木を伐り倒し、それで一つの筏な拵らへました。カリブソーは、新しい着物の、酒だの、水だの、オデッセーの好きな食物だのを澤山持つて来て筏に積み込んで呉れました。

やがて筏は海岸を離れました。

「さようなら。オデッセーさん。」

岸に立つて見送るカリブソーの眼には涙が浮んでゐました。

筏は、カリブソーが吹起して呉れる風に送

られて、滑るやうに海の上を走つて行きました。そして十八日目に、自分の國の近くの、フエーシヤンの丘といふ所までやつて来ました。

所が、海の神のボセイダンは、オデッセーのこの幸福な有様を見て、大へん腹を立てました。海の神は雲を呼び寄せて、烈しい暴風を起せると同時に、自分の使ひの海馬に、びしりと鞭を當てました。海馬は白い腹を立て、海を走り廻りましたので、浪はいよ／＼荒くなつて参りました。

たうとうオデッセーは、筏から海の上へ投出されてしまひました。そして、恰度風に吹かれる木の葉のやうに、大浪にもまれ、北風が吹けば南に流れ、東風が吹けば西に流されると云ふ風に、長い間弄具にされてゐました。

女神のアテネは、この有様を見て、大層可哀さうに思ひました。そこで直ぐに暴風を止めて、たい早い北風が起したので、

「強く吹け北風。オデッセーがフエーシヤンの丘に着くまで吹きやむな！」



かう、女神アテネは北風に云ひ附けました。オデッセーは二日二晩、浪の上で浮いて流されましたが、三日目の朝になつて、やつと、フエーシヤンの濱邊に打ち拘られました。

オデッセーは、もう疲れ切つて、身軀は腹れ、手足は痺れて動かなくなり、鼻の孔から飲んでゐた鹽水を澤山吐き出し、氣が遠くなつて死んだ人のやうに横になつて居ました。

（オデッセーは我家に辿り着いて、どんな活躍をするでせう。次號をお待ち下さい。）

「大變な忘れ物をした。昨夜預けた圓巻を出して下さい。」

これを聞いて二人は、グツタリと腰を抜かしたやうに座つてしまひましたが、亭主はやつと立ち上つて、圓巻を惜しさに眺めながら出しますと、旅人は結び目をあらためて、「イヤどうも有難う。たしかに受け取りました」と言ひ棄て、また駆け出して行つてしまひました。

夫婦二人は顔を見合せ、しばらく聲も出ませんでした。

「あ、情ない、ぬか喜びの御馳走の食べられ損になつた」とおかみさんが言ひますと、亭主は立ち上つて、

「アツ忘れて行つた」と大きな聲をしたのでおかみさんは思はず飛び上つて、

「まだ忘れ物があるの」と言ひますと、亭主はガツカリした顔つきで、

「とつ／＼宿賃を忘れて行つた」

（なはり）

と話してゐると、二階でボン／＼と手が鳴るので、おかみさんは急いで上つて行くと、お客はセツセと支度をしてゐました。

「マア大そうお急ぎで、どうぞ御ゆっくり」と言ひますと、お客は、

「イヤ朝晩したので、日ざしを見ると大分おそくなつた。今日は充分歩るかねばならぬ、またこの次ぎに厄介になります」と言つて、

「有難う御座いました。どうぞ御精進よく」と、夫婦の嬉しうな聲を後にして、大急ぎで出て行きました。

夫「有難い、こんな利き目があるとは、思はなかつた」

婦「これも私の知恵から出たのですよ。今日は早速、衣物でも買ひに行きませう」

夫「今日は一日休んで一緒に出かけよう。序に家も探して来ようか」と二人は小躍りして、喜んでゐる所へ、イキセキ駆け戻つたのは、さつきの旅人で、店へ駆け込んで、

只四郎のお嫁さん 久米 一



たら、毎日どんなに不愉快な事だらう。

只四郎と云ふ、よく働く農夫がありました。

或時、考へますには、

「俺も、もう二十五になつたのだから、一つお嫁さんを貰ふ事にしよう。」

只四郎は以前から、お嫁さんについては、色々の注文を持つて居りました。先づ第一、自分の所へ来るお嫁さんは、身體が丈夫でなければならぬ。働く事も出来ずに、ともすればお粥を食へたがるやうなお嫁さんは、百姓の自分にとつて、まことに迷惑である。次にお嫁さんは、顔が綺麗でなければならぬ。只四郎のお嫁さんのみづともない事、など、云はれるより、只四郎のお嫁さんの可愛らしい事と云はれる方が、確かに嬉しいに違ひない。それからお嫁さんは、おとなしい人でなくちや駄目だ。いくら身體が丈夫で、顔が綺麗だつて、亂暴な我儘者だつ

お天氣のいゝ朝早く、只四郎は小屋から馬を引出して、お嫁さんを探しに出て行きました。

暫く行くと、大きな河がありました。その土手に添うて、下の方へ下つて行きますと、お爺さんが一人、せつせと牛蒡を掘つて居りました。

「お爺さん。」

「はい、何です。」

「此處いらにお嫁さんはありませんか？」

お爺さんは腰を伸ばして、

「お嫁さん？ 貴方が貰ふのですかい。ありますよ、つひこの近くに一人……」と云ひました。

只四郎は馬から飛び下りて、

「そのお嫁さんは、おとなしいですか？ 我儘者ぢやありませんか？」と聞きました。

「えゝゝ。おとなしいですとも。よく云ふ事をき

さます。」

「では、身體はどうです。丈夫ですか。」

「身體は丈夫かつてですか。いや、丈夫も丈夫も、まるでこの牛蒡のやうです。」

お爺さんはかう云つて、今抜いたばかりの牛蒡をぶら下げて見せました。

「牛蒡のやうに丈夫？」 只四郎はひやりとして、

「そして、そして、顔はどうです。顔は。」

「それがねえ、貴方。水車小屋の娘ですから、あまり綺麗でないのです。色が黒いものですからね、このあたりで、牛蒡娘だなんて云つて居るのですよ。」

只四郎はそれを聞いてがっかりして、また馬に乗つて出かけて行きました。

村の入口の所で、お婆さんが一人、藪から糸を探つて居りました。

「お婆さん。」

「はい。何です。」

すぐと馬に乗つて出かけて行きました。

町へ這入りました。

或るお菓子屋の前で、女の人が二人、お餅を搗いて居りました。

「一寸お伺ひ致します。こゝいらに私のお嫁さんになつて呉れるやうな人はありませんか。」

二人は、じろ／＼只四郎の顔を見て居ましたが、

「さうですね。一人ありますよ。」と、云ひました。

「顔は綺麗ですか？」

「え／＼。この町での評判者なんです。色の白いことゝ云つたら、このお餅のやうですよ。」

「おとなしいですかね。」

「え／＼。おとなしいですとも。」

女の方は、搗きたてのお餅を、ひよいと拗つて見せて、

「朝、かうやつて曲げて置けば、晩まででもその儘で居るやうな、素直な娘です。」

「此處いらにお嫁さんはありませんか。」

「お嫁さんですか。ありますよ。ちようどいゝのが一人……」

「顔は綺麗ですか？」

「え／＼。綺麗ですとも、まるで、この絹糸のやうですよ。」

お婆さんは傍の絹糸の束を取つて見せました。

「おとなしいですか？」

「いや、おとなしいの、なんのつて、まるでこの糸のやうです。」お婆さんは、今採つたばかりの細い絹糸を、くね／＼と曲げて見せました。

「併し……併し、身體は丈夫ですか？」

するとお婆さんは、ニヤリと笑つて、

「それがねえ、貴方。あんまり丈夫でないんです。

家はお金持なんですがネ、身體が弱くて、ひどい仕事は出来ないのです。」

それを聞いて、只四郎はがっかりして、又、すぐ

「併し、身體はどうです。丈夫ですか？」

「いや、丈夫も丈夫も、まるでこの白のやうです。」

只四郎は喜びました。

「どこです、そのお嫁さんの家は？」

「この横丁を、すーつと行くと、右側で、門に大きな柳の木のある邸です。」

只四郎は禮を云つて、とつと馬を走らせて行きました。

(二)

お金持らしい家でした。只四郎が上へ上つて、主人と話してゐると、娘がお茶を持つて來ました。

「綺麗な人だ。そして、又、何と云ふ見事な髪だらう！」

實際、お嫁さんの髪は見事で、恰度、小間物屋のお店に飾つてあるものゝやうでした。只四郎は大變氣に入つて、早速貰ふ事に話を決めました。そして

其場で夫婦の盃を擧げるなり、お嫁さんを自分の馬に乗せて、家へ歸りました。

翌る日からお嫁さんは働きました。薄暗い内に起きて、御飯の仕度をする。掃除をする。やがて只四郎が起きて来ると、二人で暖い御飯を戴いて一緒に野良へ出て行く。お晝には又、お嫁さんだけ家へ歸つて、お茶を沸したり、お辨當を作つたりして只四郎の所へ持つて来る。全く一寸の休み間も無いのです。

只四郎は、自分の考へ通りのお嫁さんを貰ひました。世の中に、自分ほどしあはせな者があらうかと考へてゐました。

ところが、此處に妙な事が起きて來たのです。といふのは、お嫁さんが來た日に、一杯口まで入れて置いた米櫃が、まだ一週間も経たない内に、もう空っぽになつてしまつた事です。

「人数が殖えたんだもの。前よりお米の要るのはあ

たりまへだ。」とは思ひましたものゝ、それにしても餘りに無くなりやうが早いのです。

「鼠でも引くのではないか。」と思つて調べて見ましたが、さうでもありません。

又、前の通り、澤山のお米を、米櫃一杯にして置きました。これも四五日で無くなつてしまひました。

だん／＼「不思議だ、不思議だ」では、濟まされなくなりました。「馬鹿な事を！」と初めは打消しては居りましたが、遂には、お嫁さんを疑はずには居られなくなりました。

或日の事、只四郎は、お嫁さんがお晝の支度に家へ歸るのを、そうツと跟いて行つて見ました。

土間へ這入つて行くと、お嫁さんは今、御飯を炊きつけた所と見え、竈には大きなお釜がかゝつて、「ぶ々ウ、ぶ々ウ」と吹いてゐる最中です。併し、お嫁さんは何處へ行つてゐるのか、姿が見えません。

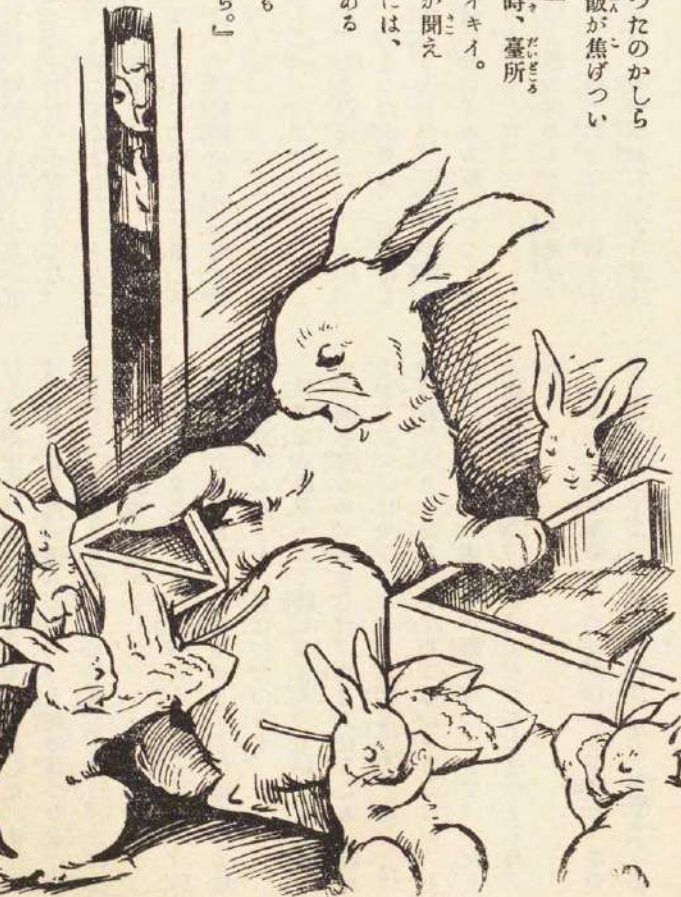
「はてな。何處に行つたのかしらん。それにしても御飯が焦げついたら大變だがな……」

すると、丁度その時、臺所の隣の室から「キイキイ。

キイキイ。」と云ふ聲が聞えて來ました。その室には、大きな米櫃が置いてあるのです。

「なんだらう。鼠でも居るのぢやないかしら。」

かう思つた只四郎は足音を忍ばせて近寄り戸の隙間からそツと覗いて見ました。



どうでせう。
米櫃の傍には、大

な犬ほどもある白兔が手に樹を持つて坐つてゐるのです。その大兔の廻りには、可愛い、小兔が五匹、ちよこなんと並んでゐました。小兔はみんな、手に桐の葉を一枚づゝ持つてゐました。そして大兔が米櫃から量つて出すお米を、めい／＼桐の葉に入れて貰つてゐるのです。貰つた小兔は、嬉しうに『キイ、キイ。』と泣いて、縁側から外へ出て行きました。

『なんだい。ありや……。』

只四郎は呆氣にとられてしまひました。

お米をすつかり量つてしまつた大兔は、如何にも満足さうな様子をして立上りました。そして今度は只四郎のお嫁さんの、鏡の置いてある所へやつて来て、其處にある櫛を取り上げました。

『何をやるのかしら？』と思つてゐると、大兔は、鏡に自分の顔をうつしては、櫛で頭をなでて居ります。すると、驚いた事には、兔の頭がだん／＼黒く

なつて、女の髪の毛のやうに變つて來ました。それが濟むと、今度は、兩方の耳をなで始めました。長い耳は、見る見る内に縮んで來て、人間の耳のやうになりました。今度は身體中をなで廻しました。これは美しい女の着物に變りました。

やがて、すつくりと立上つた女の姿を見た時、只四郎の驚きはどんなだつたでせう。それは紛れもない、自分のお嫁さんの姿だつたのです。

只四郎は眼を大きく腫つたまゝ、ちい／＼とお嫁さんの顔を見つめて居ました。物を云はうにも、喉が干からびついたやうになつて、聲が出ませんでした。たゞ肩で大きく息を吐いてゐるばかりでしたが、その内に何だか眼の先が暗くなつてきて、どたりと後に倒れた切り、氣が遠くなつてしまひました。

あんなに一生懸命になつて、むかうを尋ね、こつちを訊ね、やつとの思ひで見つけて來たお嫁さん。ど

こ一つとして欠けた所のない立派な娘だと思つて貰つて來たお嫁さんが、白兔の化身だつたのです。只四郎が氣を失ふのも無理のない事でした。

(三)

只四郎が再び氣がついて見ると、自分の身は床上に寝かされて居りました。

家の中には、お嫁さんの姿は勿論のこと、お嫁さんが持つて來た道具類は、影もありませんでした。一體、誰れが自分を介抱して呉れたのだらうと思つてゐると、其處へ一人の色の黒い、丈夫さうな女の人が這入つて來ました。

『如何ですか、御氣分は？』

女の人は訊ねました。

『え、有難う。御蔭さまで大分いゝやうです。』

只四郎はちい／＼と女の顔を見詰めて居ましたが、其時、頭に浮んで來た事は、この娘はあの水車小屋

の、牛蒡娘ぢやないかと云ふ事でした。色は白くない。併し、おとなしくて、身體が丈夫だと云ふあの娘……。

『貴方は、牛蒡娘ぢやありませんか？』

と、只四郎は訊ねました。

『さうですよ。』

女の人はにこ／＼しながら答へました。

『私のお嫁さんになつて下さいませんか。』

女の人は、ちい／＼と只四郎の顔を見詰めてゐましたが、暫くして、

『なりませう。私はよく働くんですよ。なにしろ牛蒡ですもの……』

と、云ひました。

其後、白兔はどうしたか、たゞ只四郎と新しいお嫁さんが、お百姓をしながら一生を楽しく暮したと云ふ事のほか、一向に存じません。

(をはり)



童謡

野口雨情選

(子供篇)

針の汽車(賞)

岩手縣 川村 花子

私のお針
針の汽車

チク／＼チク／＼

チツクチツク

急行列車は

おさまりの

チク／＼チク／＼
チツクチツク。

こんぼり(賞)

臺北市 佐伯 秀夫

お池のふちを

飛びまわる

おつほの長い

とんぼさん

捕らふとすれば

飛んで逃げ

向ふの草へ

ちよつととまらる。

おに瓦

神戸市 高橋 久藏

雀が話しかけても

しらぬ顔

國へゆき

ふしぎな話を

知つてゐる

とんぼとり

雀のおうち

千葉縣 渡邊 馨

小鳥のおうちは山のおく

青い木のお家です

小鳥が二匹居るばかり

母さん鳥はえさとり

小鳥二匹が話してた

母ちゃん歸りは

まださうか。

つばめ

大分縣 矢田 末吉

つばめは南の



ちつとでも話して

くれないか

子つばめ追ふたり

九二

赤い花の芽がでたよ。

雨

茨城縣 中村喜美子

お池の中に

雨ふると

たくさんこんべと

ういてゐる

たべやうとすると

すぐきえる

さえるとすぐに

又できる。

お家の鶏

東京 村越 教正

お家の鶏

ひよ生んだ

一に生れた

しやせんぞ。

麥畠

石川縣 塗師岡丈吉

山のふもとに

廣い島の中に

農夫が一人立つてゐる

ひばりのお宿は

此處だらう。

目だか

秋田縣 岩谷 貞三

このごろ少しあつたかい

小川へ出て見りや

目高が ふら／＼

あつちへ

こつちへ

つら／＼。

九三

ひよつこは

黄色い白い

ひよ生んだ

二に生れた

ひよつこは

黒い白い

ごましほで

びよつ びよつと

ボブラ

千葉縣 吉原 平

ボブラの帯が

お空を掃いた

青いお星がびつかり

光つた。

フクロウ

群馬縣 林 喜平



毒を入るれ

野島辰次

九四
むかし、或るところに「珍らしい石」を集めることが何より好きだ、といふ一風変わった人がゐました。この人は學問はあるし、それに劍術もなかく上手でしたが、本を讀んだり、劍術の稽古をするひまには、珍らしい石を集めることにはかり夢中になつて、日を暮してゐるのです。

或る時、その國の真ん中を流れてゐる大きな、それはあの多摩川を何十倍か廣くしたやうな河を、船を雇つて、ひとり百里も上流の方へと出かけました。皆さんも遠足や旅行で、海岸へ行つたり、また川原へ出ると、珍らしい貝類や、美しい石などを拾つて、お家へ持つて歸るでせう。そして、いつまでもしまつて置くでせう。あれはなか／＼樂しみなものです。

この人も、もと／＼こんなことが何より好

さう思つたので、或る晩、船頭達は相談を始めました。

「あの人を殺してしまつて、寶物をみんな奪つてしまはう。さうすりや、われ／＼は忽ち大金持になれる、こりやうまいことになつたわい。」

船頭はみんな四人ゐました。一人の爺とその息子が二人、もう一人は雇はれてゐる男でした。この悪い相談をしたのは、その息子と二人と傭人の三人でした。

ひそ／＼相談してゐるところへ、爺が入つて來たので、三人はびつたり話を止めてしまひました。が爺は年寄だけに、三人の顔色を見て、すぐ變だなど思ひました。いろいろ問ひ詰めたので、實は、これこれだと、悪い相談を打明けました。

「どうしてお前達、お客様を殺すなんて、そんなことが出来るものか。」

爺は三人の若い者を叱りました。

きなんですから、その大河を何日もかゝつて淺い上流まで漕ぎつけると、遠い兩岸の青い樹や、近くに迫つて見える高い山や、大きな石にぶつかつて白い浪が碎けてゐる清水のやうに澄んだ水の流れなど、それは／＼いゝ景色を眺めながら、せつせと珍らしい石を搜しては拾ひ集めてゐました。

青いのや赤いの、白い水晶のやうなの、丸いの、細長くてとがつてるのなど、一生懸命に集めたのでとう／＼歸りまでには、お米の俵くらゐの大きさの袋に、五つも集つてしまひました。

石は一々袋に入れて、中でもすぐれて立派な珍らしいのは、大切な寶物のやうに、一つ一つ布に包んで歸りの船の中でも、あれを出し、これを手にとつては、撫でたり擦つたりして喜んでゐました。

その様子を見て、船頭達が不思議に思ひました。「ありやきつと石ぢやない。何か寶物に違ひない。賣つたらきつと高い値段で賣れるに違ひない。」

「でもお父つあん、大したものだぜ。あのお客を一人やつけるのは、そんなに六ヶ敷いことぢやなし、船の上のことだから世間にや判りつこなしさ、何も心配することはないぢやないか。」

腕つぶしの強い頑固な若い男三人が、慾に目のくらんでゐるところですから、爺はどう取鎮めようもありません。『どうも困ったことになつたものだ。』とたゞ氣を揉むばかりでした。

その時、お客は寝てゐましたが、ふと船頭の話し聲で眼を覺しました。どうしたんだらう、こんな夜中に、と思つてそつと起き出して、船頭のある方に耳をそばだてますと、丁度悪い相談の最中でしたが、それをすつかり聴いてしまふと、平氣でまた寢てしまひました。

船は下へ下へと下つて、あくる日の夕方には、人の家なんか、どつちを見廻しても一軒も見えない、ばう／＼と葦の生へたところへ出ました。そこで今

夜は泊ることになりました。すると若い船頭の一人が、お客のところへ、晩の御飯を持つて参りました。『今日は神様へお供へをする日です。その残りですが、旦那に御馳走しませう。どうか御遠慮なく召上つて下さい。』

『そりや結構だね。』

と、云ひますと、その船頭は、にこ／＼笑ひながら、お客の杯にお酒をなみ／＼注ぎました。

が、お客はそのお酒の中に毒の入つてゐることをちやんと知つてゐますから、杯を下へ置いたまゝで飲まうともしませんでした。船頭達は、その容子を見て『こりや威づかれたかな』と思ひましたが、廣い海のやうな河の真ん中で、ほかに船もありませんから、逃げられる心配もないので、もうそれ以上にお酒をすゝめはしませんでした。

そこでお客は、自分がつつて來た荷物の中からお酒の甕を取り出して、それを飲みました。すつかり

酔つたふりをして、あかりを消して寢床へ横になりました。

しばらくすると、三人の惡漢——若い船頭がめいめい刀を持つて、お客の寢てゐるところへ現れました。月のない晩で、星あかりにも、もの凄く光る刀を揮つて、一人が先づ力の限り『やっつ』と斬りつけました。斬りつけましたが、その惡漢は『おやつ』と思ひました。刀の手筈へがどうも變だつたからです。すぐ夜具を刳ね除けて、よく見ますと、それは人ではなく、蒲團を圓めて、人の寢てゐる恰好にしてあつたのでした。

『おい／＼みんな、大變だ。お客はどこかへ逃げちやつたぞ。』

さう叫んで、驚いた三人が、あたりを一生懸命に搜してゐますと、

『こゝにゐるよ。』

と、船の隅の方から、お客の聲がしました。



それツと、三人は聲のした方を目がけて、馳けて行きますと先頭の男が、眞暗な中を飛んで来た石に當つて、右の腕をひどくやられて、ばたり刀を落してしまひました。あとから續いた二人も、また同じやうに石にやられてしまひました。

そこへ飛び出して来たお客は、三人とも打倒して一かたまりに積み重ねておいて、そこに落ちてゐた刀を拾つて、みねの方で、びちやり／＼と三人の首筋を叩きました。

「前からちやんと解つてゐたんだ。のめ／＼お前等に殺されて堪るものか。おれは別に澤山にお金も持つて来ちやゐないのに、何が目當でこんなことをするのかと思ふと、可笑しくつて仕方がなか たんだが、どんなことをやるか、まあしばらくからかつて置かうと思つて黙つてゐたんだ。さあ貴様達、たゞ生かしちや置かないから、覺悟しろ。ほんとになまいきな奴等だ。」

ものを、今旦那様の刀にかけられては、此のおいばれの後嗣が絶えてしまひます。さうなつたら此のおいばれは明日が日からも、もう全く途方に暮れてしまひます。どうぞ旦那様、何分のお慈悲を持ちまして、命ばかりは助けてやつてお呉んなさいまし。」と、爺は泣きながら、手を合せて、命乞ひをしました。

すると、お客は何を思つたのか、右手に持つてゐた刀を静かに下へ置きながら、

「よろしい！ではお爺さん、此奴等三人の命は、お前に預けるとしよう。——三人ともすぐ根性を入れ替へるんだぞ。命が助かつたからと云つて、もし又今度こんな悪いことをたくらんだら、その時こそはもう承知しないから。」

爺が喜んだことは云ふまでもありません。三人の船頭達は、もうとても命はないものと思つてゐたところを助かつたのですから、みんな涙を流して喜び

お客から刀で首筋を、びちやり／＼叩かれる度毎に三人は冷りつとしながら、ぶるぶるからだを慄はせてゐました。

「どうか旦那様、命ばかりはお助け下さい。命ばかりは旦那様。」

と三人は、泣いて謝りました。

そこへ、齒の根をがち／＼慄はせながら、爺があらはてゝ飛んで来るなり、お客の袖にすがり附きました。

「お爺さん、お前にはちつとも罪はない、心配しなくつてもいい。」

お客は、爺にはやさしい言葉をかけてやりました。

「へえ旦那様——」と爺は舟板へ頭を擦りつけて云ひました。「——こいつ等の罪は何と云つたらいいか誠にもう此上ない重い罪にや違ひありません。ですが旦那様、息子を折角今日までに大きく育てました

ました。

「みんなよく聴け——」

と、お客が四人をそこへ並べて置いて云ひ出した。

「——こんな寂しいところを一人で旅をするほどのものは、見かけはどんなに弱さうでも、腕に覚えのある人間だ。これに懲りてこれからは、旅人を見たら正直に親切にもてなすやうに心掛けろ。今夜のやうな真似をすると、今度こそどんな目に遇ふかわらないぞ。解つたか、一時の泣つ面ちや駄目だぞ。」

「へえ——」

四人は、そこにひれ伏してしまひました。

それから、船頭達はこのお客を神様のやうに敬ひました。珍らしい澤山の石とお客とを載せた船は、無事に河を下つて行きました。

(をはり)

ひき蛙の死（推薦）

大胡 敏郎

村の子供達は、學校へ行く途中の細い野道を歩いて居りました。右側は水をうつすらと湛へた水田で



左側は草花の咲いてゐる空地です。今朝まで雨が降つて居たので路は柔くしめり、緑色の小草の葉末には美しい露が輝いて居りました。子供達は大きな聲で話をしながら歩いて行きました。

短い紺の着物、うすいぞうり、いが栗頭、汚いふろしき、そんなスタイルの五六人が細い道を歩いて行きます。

ふと先頭の一人が大きな聲で叫びました。

「やあ！蛙だ蛙だ！大きなひき蛙が死んでるぞ。」

「どれ、どこだ、どこだ。」

みんな先頭の少年の指す所に立ち止まりました。それは田圃のふちで一匹の可成大きなひき蛙が白い腹を上に出して引つくり返つて沈んで居るのでした。

「それか、大分つかいな。」

「僕氣味が惡や、こんな圖體をして死んでるなんて」

「どうしたんだろな。」

など、皆がてんでに何か言ひ乍ら見て居りました

「アッ、此れは昨夜僕が殺してやつたひき蛙だぞ」

と、一人が叫びました。

「本當か。」

「とツつかれるぞ。」なぞと皆は言ひました。

「おい、何か棒はないか、棒でついてやれ。」

一人がかう言ひますと即座に一人が走つて行つて一本の泥の付いた竹の棒を持つて來ました。彼は其れで皆をおし分けて蛙をつゝついてやらうとしますと、他の一人がいきなり其れをひつたくらうとしました。

「やい、おれにも貸して見せろ。」

すると棒を拾つて來た少年は怒つて、

「俺が拾つて來たんぢやないか、君もやりたかつたら拾つて來い。」

と言つて、棒を離さずひき蛙の背中にズブツと突き刺しました。

「チエ、けち／＼していらあ。そんな棒なんていら

ねえや。」

そして彼は自分で棒を拾ひに行きました。皆が田圃の中で蛙を突ツつきまはして居る中に、一人の子供が突然蛙の體を棒の上にうまく乗せて、

「わあッ！」と叫びながらさつと皆の上へ投げ出しました。すると皆は、

「ヒヤー」

と叫びながら、一齊に逃げ散りました。

そして又引き返して惡戯をしようとする、一人の少年が、

「おい、もうおそいせ。いゝ加減にして行かないと今夜化けて出るぞ。」と叫んだので、

「あゝ、もうおそいせ、行かうよ。」

「行かうよ。」と言ひながらてんでに棒を田の中に投げ捨てました。その中の一人は蛙を又田の中に蹴落して皆の跡を追ひました。そして大聲に話して、學校の方へ歩いて行きました。

哀れなひき蛙は、棒につつかれて痛ましく體中に穴を明けられ、濁った田の水の中に浮いたり沈んだりして居りました。

彼の背中には大きな穴があいて居り、頭の右側はメチャメチャに打ち毀されて原形をとどめません。四本の足は皆もぎ取られたり、途中からくちかれたりして、満足なものは一つも有りません。そして創痕には遠慮えしやくもなく、汚い泥が入り込んで居りました。

さて、此の哀れな蛙はどうして死んだのでせうか。それとも殺されたのでせうか？
これからそのお話を致します。

或日の夕方、一匹のひき蛙が、自分の棲んで居る藪の中からノコノコと匍ひ出しました。かはたれ時の事で、うす暗い霞がそのへんの立木や竹の間に立ちこめて、段々と暗さを増して行きました。

空にはもう密柑のしづくのやうな美しい色をした星が二つ三つ出て居りました。

蛙は段々と歩いて来てふと向ふの方を見ますと、草の葉つばの上にとても圓い大きな光つたものを見出しました。併し其の光は太陽程ひどくはありません。とても美しく坐つてゐるやうでした。

蛙の足は何時の間にか其の不思議な圓いものに向つて進んで居りました。彼は歩く事が他の蛙達にくらべて一番下手です。そして一番圖體がでつかけておまけに甚だ伶俐でないのです。彼は自分が今一生懸命にとんで行く目あてのものは一體何だらうか？そんな考へは全然無かつたのです。

たゞ、たゞ彼は全身の力を傾けて、あの不思議な美しさにみちた物に進んで行きました。

ひき蛙は田圃に沿ふた細い路に出ました。そしてその細道を一生懸命に跳んで行きました。めくらめつばうです。

ふと、彼の頭がゴッン！と大きな音を立て、何物かにおぶつかりました。彼は驚いて前を見ますと、眞黒な大きな何かのかたまり見たいな物がガツチリと坐つて居ります。

それは一つの石でした。

さつきのあの圓い美しい物は、其の爲に見えなくなりました。さあ蛙は氣が氣ではありません。急いで石によち登らうとしましたが、その石から突然太い腕がとび出して彼を突きころばしました。そして大きな恐い聲がどなりました。

『コラッ！だれだ！ひとがいう氣持で寝てゐるのをじやまじやがつて。』

蛙は驚いて飛びのき、目をバチクリさせて見てゐました。



『誰だ、どいつだ！うるせえ野郎だな——あ、そこに居るのはひき蛙じやねえか？え、さうだらう。今時なにしに出て来たんだい。ひとが好い氣持で寝て居るのをじやまじやあがつて……』

『誠にすみませんでした。私はあなたの坐つてゐる所のすつと向ふの方にとても美しいまいるい物を見附けましたから、其れを見に行くのです。』

『何、そんなきれいな物がどこにある。俺にやちつとも見えねえや。お前何かの間にちがひじやねえか』

『決してまちがひじやありません。たしかに見たんです。』

併しぐづ／＼して居てあれがどこかへ行つて了ふと大變だ、さう思つたので蛙は石をよけて通らうと

しました。それで、

『私は急ぎますから、さよなら。』

と言つてびつこを引き引き石の横に來て向ふを見ますと、有る、有る、やつぱり彼の圓くて美しく、ものは輝いて居ります。彼は足腰の痛さも打ち忘れて、ビヨコ／＼と一心に跳ねて行きました。

しばらく行きますと、何だかあの圓いものが少し上へ上つたやうな感じがしました。蛙の心は益々あせり出しました。

ふと、彼の左の後足がツルリとすべつて田の中に落ち込みました。彼はあわてゝ匍ひ上らうとしますと、田の水が聲を掛けました。

『おい、おい、ひき蛙かい。いやに大きな體をしてゐるくせにのろまだな。せつかく俺が居眠りをしているのにバチャバチャ音を立てやがつて、もつと静にしてくれないか。』

ひき蛙は、

僕だつてこんな所に用は無いのだ。』

ひき蛙は仕方なしに、



『さうですか。』と言つて又痛さや口惜しさを我慢しながら、ソロンソと匍つて行きました。

ふと、彼の體が仰向けにひっくり返つて了ひました。彼は死ぬ程驚いた。村の悪太郎が此の細道に通る掛つて、ビヨコ／＼と跳ねて行くひき蛙を見て石

『ごめんなさい。つひ足元に氣が付きませんでしたから。』とあやまつて一生懸命にかけ上り、又一心不亂に進んで行きました。

突然、ひき蛙の背中に小石が一つとんで來てゴツンと音を立てゝ當りました。彼はあつと叫んで思はず引っくり返つて了ひました。せなかの痛さに堪へ切れなかつたのです。彼は大きな聲を出して唸り、ころ／＼とこがり廻りました。痛い、痛い、とても痛いです。氣違ひの様になつて呻いて居るうちに少しづつ痛みが取れて行きました。彼は兩手兩足をついてウンウン唸りながらちつと小石を見つめました。所が小石が大きな聲でとなりつけました。

『うるさいやい。静かにしろ。そんなにでつかい圖體をしやあがつて何だ。そのざまは。おい、僕のせいだと思ふと間ちがひだぜ。僕はな、決してこんな所へ來たかあないんだ。此の村の腕白小僧が俺をいさなりひつつかんで、こんな所に投げ付けたんだ。』

を投げ付け、そして又竹の棒でひっくり返したので。それからもう哀れな蛙は地獄でさいなまれる亡者よりもひどい目にあはねばならなかつた。ホツケーのボールの様にあつちに投げられこつちに飛ばされ、さうしてなぶられて居る内にも彼はあの美しい圓いもの、彼の憧憬の的を心の中に思ひ續けて居たのです。

けれども、一つ強く彼のおしりが叩かれて彼の體がボーンとばされたせつな、世界中が急に眞暗になつて了ひました。彼はその憧憬の的を見失つて了つたのでした。

哀れな蛙はどう／＼死んだのです。そして田の中に打ち飛ばされました。

可哀さうなひき蛙の體がれた、あの圓くて美しく輝くものは、東の空に上り、青白く蛙の沈んだ水田をてらして居りました。(をばり)

(作者住所、東京芝區白金三光町四五一 福澤三八方)

郭公

若山牧水

さびしい さびしい

カツコウ カツコウ

郭公の聲が聞える

カツコウ カツコウ

どこで啼くのか

カツコウ カツコウ



東におもへば

カツコウ カツコウ

西におもへば

カツコウ カツコウ

郭公の聲が聞える

カツコウ カツコウ

さびしい さびしい

カツコウ カツコウ





八大地獄めぐり

西川 勉

一
等活地獄の下に降りると、黒繩地獄といふ大地獄があります。獄卒が罪人を捉へて地に打ち伏せ、熱い焼けたざれた鐵の繩でもつて罪人のからだに堅横に筋を引いて斧を持つて來てその筋のところを切り裂いたり、鋸で引いたりしてゐます。また、刀で腹綿を抉り出して百千段に切つて、こゝかしこに散したりしてゐます。また、傍の方を見ると、まづかに焼けた鐵の繩を懸け廻して、その中へ罪人を追ひ入れると、ひとりでに風が吹いて來て、焼けた鐵の繩が罪人のからだに纏はり付いて肉を焼き骨を焙つて狂ひ死にさせるやうな

二〇八
仕懸けになつてゐるところがあります。さうかと思ふと、この地獄の右の端と左の端には大きな黒鐵の山があつて、その頂に轆が立つてゐて、轆の尖にかたい鎖を付けて兩方へ張り渡し、罪人に重い荷物を脊負はせてこの鎖を渡らせて居ります。鎖の下には大釜がたくさん据え並べてあつて、その中に湯がぐらぐら煮えくりかへつてゐて、湯玉がほどばしつてゐます。罪人は重い荷物を脊負つて鎖の上を歩かせられるのだから、みんなこの釜の中へ落ちてしまつて溶けるのです。この地獄の苦しみは等活地獄の十倍よりも、もつとひどい苦しみなんです。
獄卒は罪人を責めてかう云ひま

す。
「心が第一よくないのだ。惡をつくるのも心からだし、自分のからだを縛つて、閻魔大王のところへ伴れて行かせて、われとわが身で地獄へ落ちるのも、皆、自分の心からだ。」

泥棒をするために人を殺したり泥棒したりする者は、この地獄に落ちるのです。

この地獄には、また別所の小地獄が十六あります。その中の一つを見れば、罪人を非常に高い岸の上に集めて、焼けたざれた鐵の繩で縛つて突き落す處があります。岸の下はみな焔で、その中に切先の鋭い及が上に向いてかす限りなく立つてゐます。身を投げて死ん

だ者がこの地獄に落ちるのです。

晨太郎はこの黒繩地獄を見廻つてゐた時に、石川五右衛門と出會ひました。五右衛門は湯玉のほどばる大釜の中に、ゆで蛸のやうなまつ赤い顔をして、齒を喰ひはつて立つてゐました。そして腰から下はもう半分以上も溶けかけてゐました。しかし、泥棒ながら傑い男だから、いくら苦しくても泣いたり唸いたりしないで、齒を喰ひしはつて我慢してゐました。黒繩地獄の下に衆合地獄といふ大地獄があります。この地獄には黒鐵の山がたくさん向ひ合つて聳立つてゐます。それからこの獄卒は頭が牛で胴から下が人間だつたり、胴から下は人間の形で、頭

だけ馬になつてゐたりして、變なものがたくさん居ります。さういふ變な獄卒どもが、鐵棒、刺又などのいろいろな責道具を持つて罪人を追ひ廻して、黒鐵の山の間へ逃げ込ませます。すると、兩側の山がひとりでに追つて來て罪人のからだをひしやば碎いてしまふのです。だから血が流れてその邊とそこどころに湖が出来てゐます。また、平たい石の上に罪人を寝かせて置いて、上から大きな岩を落つことしたり、白に入れて黒鐵の杵でついてお餅にして虎や狼などに食はせたりします。鳥や鷲なども食へて來るのです。口から炎を吐いてゐる兀鷹が腹綿をつかみ出して木に懸けて置いて食へたりし

ます。川の中に鋭い釣針をかす限りなく落して置いて、罪人をその中へ投り込んだりします。川の中には熱い、熱い銅の汁が流れてゐるのです。だから、川に投げ込まれた罪人は重い石のやうに沈んで

しまふものもあれば、手を舉げて天に向つて救ひを求めて泣き叫ぶものもあり、二人抱き合つて嘆き悲しむものもあります。しかし、救ふ者も、助ける者もなく、いつまでもこの苦しみを受けるので



す。また、こゝには刀葉の林といふものがあります。この林の木は葉はみな刀や劔になつてゐて、罪人のからだを切り裂いたり骨を通したり、筋を断ち切つたりいたします。木の上に自分の兄弟がゐるからと思つて登つて行くと、木の葉がみんな下に向つて、それが刀や劔になつて、からだ中どこもここも切られるやうになつてゐるのです。そして血を流して漸く木の上に登つて見ると、さつきまで木の上におたと思つた兄弟がもう下に降りて地の上に立つてゐます。急いで降りて話をしようと思ふと今度は木の葉がどれもこれも刀や劔になつて上に向いてゐるのです。だから降りる時には、またひどい

怪我をして、からだ中傷だらけになるのです。そして降ると、また兄弟が木の上に登つてゐるやうに見えるのです。だから、また登つて行つたり降りて來たりします。すると、その間に皮膚が破れて血



が流れて見ても慘たらしい有様になるのです。かうして百千億兆年も苦しむ續けなくてはならないのです。流石の最太郎少年もこの有様を見て、ぞつと身震ひして恐しいと

思ひました。衆合地獄の下に叫喚地獄といふところがあります。この地獄の獄卒は黄金のやうに黄色い頭を持つてゐて、眼の中から火を噴き出します。赤い着物を着てゐて、手足が太くて長く、走ることにかけては風よりも早い位です。そして、琵琶湖の向側にゐても聞えるほどの大聲を出すのです。かういふ獄卒どもが、罪人を的にして弓で、射殺すのだから堪りません。『どうぞお助け下さい。暫くの間でも好いから許して下さい。』罪人たちがかう云つて頼んでも獄卒どもは決してきき入れないで追つかけて廻して、鐵棒で頭をひつぱいたり、焼棚に罪人をのつけ

て焙つたり、鍋の中に投げ入れて煮たり、焔が一杯になつてゐる部屋へ追ひ込んだりします。また口の中から銅の湯を流し込んで、胃袋や腸や肺などを焼いたりするのです。

晨太郎はこゝまで来て、八大地獄のうち半分だけ見ることが出来ました。つまり第一は等活地獄、第二は黒繩地獄、第三は衆合地獄、第四は叫喚地獄です。これらの四つの大地獄を探險して、晨太郎はかうした地獄に落ちた人間が可哀さうで堪らなくなりました。そこで思ひ出したのは小判型の割符のことです。閻魔大王の机の上から見付けて来た割符のことです。それには「地獄の鬼どもを自由に使

へる割符」と書いてあつた筈でした。さあ、こゝで一つ試めして見ようと思つて、晨太郎はそれを右の手で差上げて呼びました。

『第一等活地獄、第二黒繩地獄、第三衆合地獄、第四叫喚地獄、この四つの大地獄の獄卒の鬼ども集まれ。』

さあ、大變です。獄卒の鬼どもは罪人を責めることを止めて、みんな集まつて来ました。

『お前たちは百億年間こゝに坐つて居れ。』

かう命じたから堪りません。獄卒の鬼どもは百億年間動けないことになつたから、地獄の火がすっかり消えてしまつて、長い間この四大地獄で苦んでゐた罪人がみんな

二二
な救はれました。

二

五つ目の地獄が大叫喚地獄です。これは叫喚地獄の下にあります。こゝの地獄の苦しさはとてもお話にならないほどで、前の四つの本

地獄の苦しさと、それぞれ本地獄に喰付いてゐる十六つゝの別所の地獄の苦しさとをみんな合せて、それを十層倍重くしたほどに當ります。

晨太郎少年は餘りの惨酷さに怯えながら、遂々この地獄へ降りてまゐりました。

者が送られて来るのです。(他人に非常な迷惑になるやうな嘘のことを妄語と申します。)

『妄語は焔のやうなものだ。妄語の焔は大海だつて焼き盡してしまふ。だから、妄語を喋つた人自身を焼く位のこと、枯れた草木を燃やすやうなものだ。』

獄卒が出て来て、かう云つて罪人を脅かしたり、いぢめたりします。

この地獄の附屬の十六の別所のうちに、受鋒苦といふところと、受無邊苦といふところとがありま

してしまひます。受無邊苦といふ別所では、獄卒が熱鐵の金鉄で罪人の舌を抜き取ります。抜いてしまふと、またあとから生えて来ますから、それも抜き取つてしまひます。また生えたら、また抜き取ります。眼玉も舌と一緒に抜かれてしまひます。そればかりではな

い。罪人はからだぢうずた／＼に切り裂かれるのです。こんなにしてまでひどい苦しみを受けるせられるところが、受無邊苦といふ大叫喚地獄附屬の十六の別所の地獄の一つです。

六つ目は焦熱地獄です。この地獄は大叫喚地獄の下にあります。こゝでは獄卒が罪人を捉へて熱鐵の地面の上に横にならせて、仰け

前の五つの地獄の火は、まるで雪か霜か位にしかな思はれないさうです。だから、この地獄に墮ちた罪人たちは、前の五つの地獄を見て非常に羨ましがります。

四方の門の外には、また十六の別所があります。その中に、分茶離迦と名付けるところがあります。こゝでは罪人のからだの中に芥子粒はとも燃えないところはなと云ひます。獄卒が罪人に向つて、『お前たちみんな早く来い。こゝに分茶離迦の池がある。水が清いから飲めもするし、濕つた木の影もある。』

と叫びます。罪人たちがこの叫び聲を聞いて、駆けて行つて見ると、道端に穴があるので、はいつ

て行くと、忽ちそこから一面に火が起つて、からだちう悉く焼き盡されます。

また、闇火風といふ別所もあります。罪人が惡風に吹かれて、空中で寄り付くところもなく、車の輪のやうにぐるぐる吹き廻されて目にも止らぬほど早く廻轉してゐます。と忽ち、惡風の中に無數の劔が混つて吹き付けて来て、からだちうに突刺さります。かういふ苦しみをいつまでも、いつまでも永久に受けさせられるところだ

七つ目は大焦熱地獄です。焦熱地獄の下にあります。こゝがまたこれまでの六大地獄とすべての別所の地獄の苦しみを十層倍重くし

て受けなければならぬところだ

す。流石に勇敢なる晨太郎少年も地獄の責苦の餘りの烈しさに驚かされてしまひました。驚かされたところではない、膽を潰させられてしまひました。そして、ともすると、氣怯れがするのをちつと耐へて、漸く七つ目の地獄まで降りて来たところだ。さて、この地獄の有様を見るに、獄卒からして面相が外と大分違つてゐます。こゝの獄卒は面相がとても鋭くて、手足が眞赤で、からだ法外に太つてゐて、肱が怒つてゐます。そればかりではない、時々、大きな呼吸をする度毎に脹れた腹から、黒雲と稻妻とが一緒に飛び出すやう

な火焰と煙とを吐き出します。口の兩側からは鋒先のやうな鋭い牙が出て居ります。

こんな恐しい獄卒が罪人を縛つて、引つ張つて行くのですから、たまつたものちやありません。

『どうだ？ この地獄は一目見てさへ恐しいだらう。火の釜にはいつて焼かれる段になると、かなな屑に火を燃すやうなものだ。だがお前たちは地獄の火で焼かれるのだとは思ふな。世の中でして來たことが悪いから、その惡業の火に焼かれるのだと思つてあきらめろ。』

獄卒どもは罪人たちに向つて、憎さげにかう云ひます。

この地獄にも十六の別所の地獄

があります。その中に受一切苦惱所といふのがあります。こゝは焰の倉のやうなもので、焰のないところは針の耳の穴はともありません。罪人たちが、顔も、手も、足も、からだちう残らず皮を剥ぎ取られて投げ込まれるところなんです。そして獄卒はこの焰の倉の中へ大坩堝で溶した鐵の熱湯を注ぎ込みます。

三

八つ目が阿鼻地獄です。大焦熱地獄の下にあります。この地獄は一名無間地獄とも云ひます。大焦熱地獄からこの地獄へ降りるには虚空の道を通らなければなりません。

晨太郎少年は、この虚空の道で阿鼻地獄へ送られて行く罪人の群れと獄卒どもに會ひました。然し自分の姿を隠して行つてゐるのでたゞ黙つて後から跟いて行くばかりでした。すると、罪人のうちの一人が非常に悲しさに嘆いてゐました。

『あゝ、四方八方燃えさかる火の海に墮されるのだ。寄り付く島もないし、友だちもなし、みなしごのやうに、いつまでも地獄の底で苦しめられて、目の目を見ることが出来ないのだ。』

この溜息を聞いて、一人の獄卒が叱りました。

『自分で惡業をつくつて置いて、そのために地獄へ墮ちるのだ。他

人の知つたことぢやなし、他人が救へるものでない。こゝから阿鼻地獄の有様を遙かに眺めて恐がつてゐたつて、こゝから見える苦しみは大海の水の中のひと掬ひの水のやうなものだ。今の苦しみはひ

と掬ひの水で、後の苦しみは大海の水だ。』さて、阿鼻地獄といふところは七重の黒鐵の城で出来てゐて、その周囲にはやはり七重の黒鐵の網が張つてあります。その網の周囲



には劔の林が聳えてゐます。東西南北の要所には銅身の犬が番をしてゐます。この犬の脊の高さは四十萬尺で、眼玉の光は稻妻のやうです。牙は槍、齒は劔の山、舌は黒鐵の炎、毛穴といふ毛穴から火を吐いてゐて、その煙が膝々と立ち昇つて居ります。獄卒は六十四の眼玉を持つてゐて、高さ四萬尺の牙が生えてゐます。そしてこの牙のきつ尖から火を流し、その火が阿鼻城の上に充ち充ちてゐます。不思議なことは、それでもこの城が焼けないことです。そればかりではない、この地獄の卒獄の頭の上には、牛の頭が八つ喰付いてゐて、ひとつびとつ頭の頭に十八本づつの角が生えてゐて、角の尖から



は猛火を注いでゐるのです。また七重の城内には黒鐵の旗が七本立つてゐて、この旗竿の頂から火を吐いて流れ出してゐます。それがちやうど煙の泉が湧き出して大瀧になつて流れ落ちてゐるやうな

恰好です。城の四方の門の邊りにある八十個の大釜からも赤銅の湯が湧き出してゐるし、黒鐵の蜂と大蛇とが火を吐き毒を吐いて城内にはびこつてゐる有様、流石に地獄の大本城だけあつて、物凄

りです。そのほか、八萬四千の嘴を持つた蟲が五百億四ゐて、みんな嘴から煙が出てゐます。だからこの蟲が集まると、火がいよゝゝ盛になります。この蟲どもが城の屋根に集れば、屋根の火が一番すさまじくなり、庭に集れば庭の火が一番盛になるのです。こんなところで苦しめられるのだから、どんな罪人でもたまつたものぢやないでせう。こゝへは親を殺した人間が送られて来ます。(諸君！親殺しの罪人にはこの位の苦しみはさせても好いかも知れませぬね。)

とにかくこの地獄の苦しさは、前の七つの地獄と、それぞれ附屬

の別所の地獄の苦しさの千層倍に當ります。

この阿鼻地獄にも十六の別所の地獄があります。

その中に、鐵野干食所といふのがあります。罪人たちが焰の中に立たされてゐると上から黒鐵の瓦が夕立のやうに降つて來るところです。そして、焰の牙を持つた狐が喰ひかゝるところです。

お寺に火を付けて焼いた人間がこの地獄へ墮れます。

また、閻婆度所といふ別所もあります。こゝには閻婆といふ惡鳥がゐます。からだは象ほどあつて、嘴は港の荷物を船へ積んだり船の荷物を卸したりする鶴嘴ほどうります。

この鳥が罪人どもを銜へて空中に飛び上つて、あつちこつち舞つてゐて、どかんと落すのだからたまらない。鋼鐵のからだでも碎けてしまひます。

地獄の有様は先づこんなものです。

晨太郎少年は、遂々八大地獄を見廻つて、その恐しさ、慘たらしさに怯えながら、胸にちつと閻魔大王の割符を當て、目をつぶつてまた大聲に叫びました。

『大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄の鬼ども、みんなこゝに集まれ。』

なにしろ晨太郎少年にかう叫べると、閻魔大王の割符の威光が

ありますから、流石の荒くれた獄卒ども、集まらない譯には行きません。

『こりや獄卒ども、上の方の等活地獄、黒繩地獄、衆合地獄の四大地獄の火はみんな消してしまつたのだ。大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄、鼻阿地獄の四大地獄とそれぞれ附屬の別所の地獄の火をみんな消してしまつて、お前たち獄卒どもは百億萬年間、こゝに坐つて居れ、動くことはならんぞ。』

晨太郎少年はかう云つて嚴命を下しました。そして、八大地獄を廻り盡くして、悉くの火焰を消させて目出度凱旋いたしました。

(をほり)



綴 方
齋藤佐次郎 選

お祖母様を

お送りして(賞)

滋賀縣師範學校附屬校第五

山本みゆき

學校から歸つた私は、げんくわんに見なれぬ下駄がぬいであるので、誰が來たのであらうと、胸をわく／＼させながら思ひ切つて、「たゞいま」といつてしやうじを開けると、そこには私のなつかしいお祖母様が坐つてをられました。お祖母様は私を見ると、なつかしさうに「お、おみいちゃんか。大

きになつたなあ」と、いはれました。私は其の時、うれしいうなはすかしいやうな感じが、胸に一ぱいになつてゐました。お祖母様はあたゝかい四國からおいでになつたのです。

私は遠い四國からおいでになつたお祖母様を毎日のやうにあらこちらを見せて上げましたが、かうした楽しい日は長くつゞきませんでした。お祖母様はもうお歸になるのです。私と弟やお母様は停留場迄お祖母様を送つて行きました。しばらくまつと電車がきました。お祖母様は私たちに「ごきげんやう、さやうなら」といつて電車にお乗りになりました。弟たちは「おばちゃん又きてね」といつてゐました。私は涙の目でお祖母様を見上げました。そして「お祖母

様又きてちやうだいね」といつた

きりで、もう何にもいへませんでした。電車はしづかに動き出しました。「さやうなら。ごきげんやう」といふ聲を後にして、電車はしづかに／＼向ふの森へさえて行きました。私はいつまでも／＼も電車を見つめてゐました。私の目には涙が光つて居ました。「ねえちゃんもうかへろ」といふ弟の聲に、私ははつと我にかへつたやうに顔を上げました。あたりは暗くなつてゐました。空には星がかなしさうにまばたいてゐました。そして電車の消えていつたあと、せんろは電燈の光で淋しく光つて居ました

春雨の夕(賞)

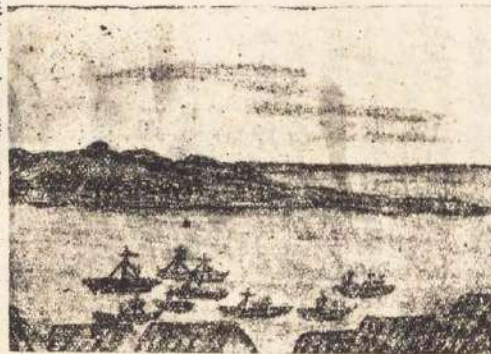
神奈川県足柄上郡上中村養正學校卒業

内 藤 利 雄

ふと障子を明けると、煙る様な

「春の海」(賞)

秋田縣荒川村 岩谷 天藏



春雨が音も無く降つて居る。風もない夕暮であつた。生温い空氣が部屋にズーと満ちて来る。此の甘い甘い春雨でバラの芽もずつと伸

びるであらう。櫻のつばみもふくれるだらう。田や畑の畔の草の芽も萌へるであらう。なども思ひつつ外を眺めると、前の電柱から内の家や、近所の屋根に引かれた電線を、白い水晶の様な水の玉が、スー／＼と這つて行く。幾つもの玉が並んで這つて行く。途中で、ボタリ／＼と落ちるものもあれば、取り附けられた屋根まで這つて行くものもある。たゞ「静かだ」と思はせる外に何の變化もない。街は次第に暮れて行つた。ちつと見詰めた電線の玉がバツと一度に落ちた。雀が一羽止つてゐる。電線は小さく揺れて居る。濡れしよばになつた翼をふくらして、動かない。時に歸る友鳥に、置いて行かれたのか？ 途方に暮れたと言ふ様に、時々首を傾げて思案顔であつたが

110

チ、と鳴いて元氣よく電線を蹴つて何處かへ飛んで行つた。雨の玉は再びバツと一時に落ちた。揺れて居た電線は次第に小揺れになつて、又また美しい玉を連ねてゐる。幌をかけた人力車が廻り角で鳴らした鈴の音が寂寞を破つた。空車と見へて、手木を高く上げ雨の中を行く姿が、此の春雨の夕を一層淋しく思はせた。やがて、雨合羽を頭から被つた自動車も過ぎた。毎朝前の道を東へ行く蒲鉾屋の歸りらしい。かうした二三の景色の動いた後は、又寂寞そのものであつた。「お、寒む」と我にかへつて障子をしめると、部屋には何時か電燈がついて居た。冷へた體を又床へ横たへた。ボカ／＼する柔い床の中は嬉しいが、今見た夕暮の淋しさが眼について、何時か熱い

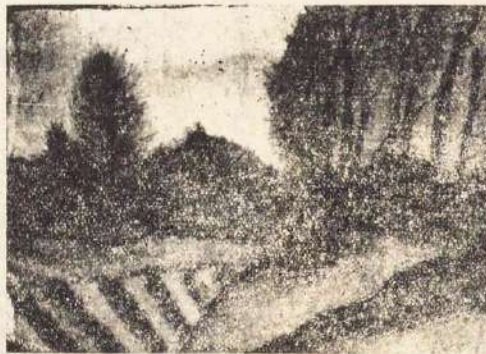
て行つた。

靖國神社のお祭(賞)

東京市麹町區中六番町五十五

井 關 正 子

(十二歳)



涙が譯もなく一杯になる。外にはボタ／＼と落ちる雪の音のみが聞えて、障子に映る外の明りは次第に薄れて電燈の光りが強くなつ

「赤羽にて」(賞)

東京本郷元町 中坂石次郎

火花がどんと上つてバリ／＼と落ちてくる。サーチライトはピカピカと空をてらしてゐる。私は胸がもうどき／＼してきた。いつも遊びにきてゐるのに、なぜ今日にかぎつてそんなに珍らしいのだとお兄様に云はれる程私の心はうれしかつた。先づお参りして馬場へ入つて行くと、兩側に賣物店、見世物などがずらりと立ちならんでゐる。今年は大祭りだと云ふのでずいぶん人が出てゐる。いつたい何人位ゐるだらうと云つたら、弟が五十百人位居るよ、と云つたので大笑した。そうやつてゐる内に

曲馬の前まで来た。私は此の曲馬が大好きなので、お母さまにせがんで入つた。入ると人が眞黒で何をしてゐるのかわからない。やうやく空間を見つけて入つて見ると、今丁度高い所からつるした竿の上を私とおない年位の少女が、渡つてゐる。そしてその中途にきて、一寸とまつて下を見た。下にはこわい顔をした男の人が上をぐつとにらんでゐる。少女は又泣くやうな悲しい聲を出してはあと云つた。そして又しづ／＼と渡り初めた。私は思はず手にあせをにぎつた。やつと其の藝とうが終つたので、私とお母さまと弟は、お兄様だけのこして外へ出た。空にはお星さままでが今の少女をかはいそうに思ふやうに、冷たそうに光つてゐた。

111



サイドウセンセイ

京人形

山口縣熊毛郡雄田小學校高一
加藤 正子

二かいの物置をそうじしてゐると、たて一尺、横五寸位の木の箱が出て来た。ふたを開いて見ると中からは大分古くなつた京人形が出た。私は「まあ、きれい」と言ひながら、その京人形をだき上げた。

のはながないのである。はなの所だけとべ色をしてゐる。「まあ、どうしたんだらう。こんなきれいな人形のはなをものがしたりなんかして、むちやなことをする人もあるものだ」と言つたが、私はなんだかこの人形に見おぼえがあるやうだ。私は私のうでにのつてゐる、古い京人形をじつと見つめながら考へた。

花笑谷 田秋「生先藤齋」

きれいな錦の振袖を着て、どんすの帯をしめてゐる。ところが人形の白い顔が私のひとみにうつた時、一寸おどかされた。そのきれいな美しい顔を、心にくい程、悪く見せてゐるのは、その人形

ふと私の頭にうかんだのは、私の五つの時のことである。その頃父様がどこへやらいらつしやつたお土産に、美しい京人形をいただいた。私はうれしくて、毎日人形をだいてはお友だちに見せて歩いた。あんまり持ち歩いたものだから、ほつそりと高い美しいはなにきたないしみがついてしまつた。私はどうしようかと思つたけれどどうすることもできないので、大きなこゑで泣きだした。母様はあんまりなくので出て来て「どうしたの」とやさしく問はれた。私はなんとも言はずに、泣きながらお人形を母様に見せた。「おや、お人形のはなにしみがついたね。あんたがあまり持ち歩くからですよ」とおつしやつて、人形をとり上げて床の間にかざつておか



新緑 中村省二郎

れた。私はくやしくてならなかつた。どうしようかしらん。どうしたらあのしみがおちようか。お、そうだ。水できれいに洗つてやらう。そうしたらおちるにちがいない」と思つて、かなだらに水を一ぱいくみこんで、着物が水にひたらんやう氣をつけたが、人形のはなを洗ひはじめた。ところがおちるところか、はながもげてし

まつた。小さい私はびつくりした。すると私の頭の上で「まあ、お人形のはなをものがしてはんだうにあきれちもうね」と言ふ聲が聞えた。私は二度びつくりして上を見た。そこには私をねらめつけた母様が立つていらつしやつた。私ははつと思つた。そうしておそろ／＼お母様のお顔とお人形とを見くらべた。

小さい時の思出は次から次と私の頭にうかんで来る。私は苦笑した。そんなことを思ふと私はたまらなくこの古い京人形がなつかしくなつた。

夏の午後

朝鮮京城若草町一〇六
河野 正三郎
(十三歳)

「また歩くのかな」と思ふと、家に歸るのがいやになつてくる。日はかんかん照りつけてゐて、ちつとしてゐても暑くなつて来る。向ふのボグラの木では蟬がしきりにないてゐるので尙暑い氣がする。その中にそろ／＼歩き出した。少しばかりの日かげがあるの、其所をつたつて行つた。家につくまでに何度も汗をふいた。門の前に来ると、うちのもみちが涼しさうな緑色をみせてゐる。「早く行つて水をのよう」と獨りで小さい聲でいつた。そして急いで臺所へ行つた。思ふぞんぶん水をのむと、一時に汗が出て来てふ

「木の葉」

山梨縣 武藤 壽幸



いても／＼ふききれない。其中にだんだん涼しくなってきたので二階へ上つて机の前にすはつた。

目いばの屋敷

群馬縣高濱小學校第六女 萩原 シズ

「あら、おしいさん、又目いばが出来ましたなあ。あんたはほんまによう目いばが出来ますなあ。」と姉さんの言葉。「ほんまにこの子はよう目いばが出来る。敏しやんもこの子と一しよによう目いばが出来る。」とおばんがいはれる。私はほんまにみんなからいはれるやうに目いばがかはり／＼出来る。今度出来たのは、前に出たのとちがつて、上まぶたの中途の外側にちよきんと小さく出来た。ホーサンで洗ふのも面倒なので、何も手をつけずに、ほうつておいた。ほうつておいたけれども、何もひどくならすいたまらずなほつてしまつた。

一二四

まだ出来てゐる時であつた。學校へ行くと、みんなが「あれ、おしいさん、又出来たんか。」といはれる。私は目をかくしながら、くす／＼笑つて「うん」といつた。

休時間がきた。休時間にでもまだ「あらーおしいさん。又出来たがな。あらー、おかしい。」といつて笑はれる。私は手を目のふちへやつて、目のふちの空気をつかひやうにして「そらー、うつしてやろ」といつては、又する。みんなはにげるやうにしてあちらへ行かれる。とちゆうで、みつちやんに出合ふたので、又みんなにしたやうにして、うつるやうにした。おもしろいものだから、かうしてはみつちやんに出合ふたに似た。そしたら或る時、みつちやんが「おしいさん、それ目いばがうつた

種蒔

長野縣北佐久郡小諸町

小口 すま子

わいなあ。しらんで／＼、なほしてよ」といつて目を出される。私は「あれーあんなうそのことをいひなある。きらひやつ」といふと「あれほんまやでなあれー、ちいちゃん」といはれる。私はまだほんまに出来ない。「うそやんな、ちいちゃん」といふと、ちいちゃんは「ほんまや」といはれた。私は「そんならみせてみなあれ」といふと、

「それ」といつて、みつちやんは又目をむいて出された。私はあんじよう見たが目いばらしいものも見えなかつたので「それ見なあれやつぱりうそやんな」といふと「あれほんまやで」といはれるが、其の時は中々ほんまに起きなかつたみつちやんは、入學準備をしてをられた。いよ／＼試験をうけにいかれた。二日間であつた。かへられてからさいて見ると、みつちやが、たいかくけんさをしてもらはれた時「目いばが出来た」といはれたそう。あ、やつぱり、出来ておつたのかい。らんことをして、目いばをうつしてすまなかつたと思つた



「顔」 山梨縣小山市町 加藤 正文

戸棚の中からモロコシと豌豆の種を出して紙に包んで居ると、母さんは物置小屋から鎌を出して来て「上手に蒔んですよー」とおつしやりながら、鎌を渡して下さつた。お返事をしながら畠に出た。太陽は真青な空に浮んで居る雲の切れ目から、暖い光を地上にながてゐる。鎌をにぎつた手が次第に汗ばんで来る。半分程土を掘ると、もう腕がいたくなつた。時々土の中からみづがでて来る。其のたびにヒヤリとしながら土をかぶせる。たら／＼と玉の様な汗がひたひたを流れる。やう／＼種を蒔終へて母さんに見て頂くと「大へん上手に蒔きましたね。これならお百姓になつても好いね」と笑ひながらいはれました。

一二五

秋田より (講演により)

沖野岩三郎

五月二十一日の夜八時に上野を立つて秋田に向ひました。汽車の中ではみんな毛布を用意してゐましたが、私は其の用意がなかつたので、眠つては風邪をひくと思つたので、冷えて行く膝を撫で乍ら朝まで青物を讀みました。そしてウトウト眠つたと思ふと「秋田」の駅で目を醒まして聞きました。汽車は午前十一時に秋田へ着いたのです。

を面白く話されて大成功でした。しかし疲れた私の甲高い聲は、あの會館では反響がひどくて、ちつと聞えませんでした。だから私は二十分程話して、話をやめました。鹽谷君が私の作をお話と下すつたので、私の責任も軽くなりました。集つた千八百の子供さん達には誠に氣の毒でしたが、私は涙のんで話を中止いたしました。話した所で聞えないのですから、悲觀して旅館へ引揚げて、少しく静養して午後七時から郊外の土崎男子小學校で、五百人に話しました。最初鹽谷君は私の作「熊の袋」を面白く話しました。そして私も一時間あまりゆつくり話しが出来ました。書の失敗を夜取返したのです。

五月二十四日午後一時から秋田市の北方にある五城の目小學校へ行き、鹽谷君と二人で五百人の子供さん達に愉快に話しました。夜は七時半から縣立圖書館で大人の友達にお話をしました。

五月二十五日、秋田新聞の熊井主幹と鹽谷君と三人で青森縣に近い北秋田郡の大館町に行きました。そして女子小學校で六百五十人に、男子小學校で三百人に一回づつのお話をしました。それから又た輕鐵に乗つて鹿角郡の小坂町に行きました。こゝは小坂嶺山のあつた所です。午後七時から、康樂座といふ新しい劇場で一千人の子供さん達にゆつくり話しました。鹽谷君も話しました。子供さん達も歸つたあとで、大人の方だけ二百五十人程残つて、私は又た一時間お話をいたしました。一日四回ですから随分疲れました。

五月二十六日は三人で北の果てなる能代港へ行きました。女子小學校で千二百人に話しますと、もう聲が疲れてしまひ、男子小學校の千二百人に對しては駄目でした。私の話は半分しか聞えませんでした。午後七時から男子小學校で大人百五十人の爲めに二時間話しました。

五月二十七日、三人は秋田へ歸り、更に佐

野氏と鹽谷氏と共に由利郡の本莊町會議事堂で五百の生徒さん達に話しました。大へん氣持のよい講堂で、ゆたかに話されました。鹽谷さんの話も大成功でした。午後四時にお話を終ると直ぐ汽車に乗つて五郎を西に走つて、象海町の小學に行き、子供さん達二百五十人にお話をしました。私は疲れてゐますから、二十分程話して、あとは鹽谷君にお話を願ひました。子供さんの會が果て、後大人百五十人に對して一時間四十分お話をし

ました。子供さん達に對する私の講演は十回のうち六回まで不成功でした。それは私の言葉が東北の子供さん達に解りにくいのと、私の聲量が少ない爲でした。しかし私は東北の八千人の子供さん達と、千五百の大人の友達にお目にかゝる事を得た事を大層うれしく思ひました。私は一つ歌を聲えました。

秋田名物八森鱒、男鹿では男鹿餅、
能代春慶、桧山納豆、大館曲ワッパ
と云ふのです。到る所ツ、ジが美しく、

燃えるやうに咲いてゐました。

秋田へ歸つた私はぐつすり疲れて、二十八日の朝、眼をさましてみますと、もう十時過ぎでした。

今度の旅行で嬉しかつた事は、鹽谷羊友君が、私の作つた童話を實に上手にお話を下すつた事でした。これからさき、東北の子供さん達に、鹽谷君は主として私の作品をお話して下さる約束をしました。

募集締切

各地に傳へられたる歴史童話

愛讀者の方々から各地に傳へられてゐる歴史に關係ある童話を募集しました處、非常に面白い作が澤山に集りました。只今編輯部で嚴選中であります。九月號に於て發表いたしますが、發表の曉は、必ずや大きな反響のある事でありませう。次號をお待ち下さい。

頼朝「七騎落」

三島霜川



一二八

一

頼朝が、石橋山の戦に打敗けた時のことでございます。これは、どなたも御存知のお話ですが、その時頼朝は、主従、僅に八人になって、杉山の麓の岩屋といふ谷へ来て、そこに大きな臥木のあるのを見つけ、八人とも、少時、その洞ろのなかに隠れて居りました。

すると、敵の大庭景親と梶原景時とが大勢の兵を引きつれて、落人の頼朝を討取らうと、だん／＼その臥木の方へ近づいて來ました。

「もう駄目だ。」

臥木の洞ろのなかでは頼朝を始め、皆な然う思つて、息を、ひそめて居りました。もし、見つけれられ、疲れに疲れてゐる八人は、討死して丁ふほかはないのでした。と、不思議にもふいに、ハタ／＼と羽音を立て、鳩が二羽、その洞ろのなか／＼飛

出しました。

「や、鳩が飛出したな。それでは、こゝには誰も隠れてゐない。」

なんと思つたのか、梶原景時は、さう云ひました。景時はもう、洞ろの直ぐ傍へ来てゐたのでござい

ます。
「然うだな。だが、他に隠れるやうなところは無いので、佐殿（頼朝のこと）は、たしかに、こッちへ逃込むで來たのだからな。どれ／＼。」

と、景親は、迂散くさい顔つきで、つか／＼と、洞ろの方へ立ちよらうとしました。

「覗かれては、大變だ！」と、云ふやうに、景時は慌て、洞ろの前に立ちふさがるやうにして、止めました。「いや／＼、誰も居りません。人の居るところから、鳩が飛出す筈がないではありませんか。こんなところに、愚圖々々してゐるより、他を探しましう。」

一二九

此の景時と景親とは、従兄弟で、仲も至って好かつたのです。それで、景親も強つて争はないで、うなづきました。そして、二人、連立つて、そこを去りました。頼朝としては、實に、九死一生といふ、危いところを脱したのでございました。

頼朝の蛭ヶ小島の旗上げは、まづたく失敗してしまひました。そして、伊豆一國には、今は立ちよる木蔭もありませんでした。もちろん、いつまで臥木の洞ろに隠れてゐることも出来ません。そこで、一と先づ、海を渡つて、安房上總の方へ落ちて行かうといふので、洞ろのなかを出て、やはり、主従八人、一緒に、海岸の方へ落ちて行きました。さうして、敵に見つかつてはならないと、非常に用心をして、やつとの思で、その翌くる日の暮方、真鶴ヶ崎といふところまで参りまして、そこから船に乗ることになりました。お供をしてゐる面々は、土肥の次郎實

平、その子の彌太郎遠平、岡崎の四郎義實、新開の次郎忠氏、土屋の三郎宗遠、土佐坊昌俊、田代の冠者信綱、いづれも、頼朝のために、命を捨て、妻子を捨て、平家を滅し、源氏の世にしようといふ勇士ばかりでした。そのうちで、岡崎の四郎義實だけは、殊に年を老つて、よば／＼して居りました。

二

八人ともに、もう船に乗つて了つて、沖の方へ漕出さうとしてゐる時のことでした。

ど、ど、どつと、沖から打ちよせて来る浪、その浪が、船の軸にぶつかつて、バツと、潮のしぶきが散る。と、その、しぶきをくゞつて、羽根の白い鷗が、しめやかな、しかし、明い／＼夕日に、どうかすると、金の鳥のやうに耀いて、くるり、くるりと飛んでゐました。風が少し立つて、紺青色の沖の沖の方には、白浪がチラ／＼と駛る。秋の海は、やゝ

荒氣味になつてゐました。

時は治承四年八月廿五日の暮方——戦にこそ敗けたれ、乗つた船こそ小さけれ、頼朝に取つては、安房上總で、二度の旗上げをしようといふ、まことに大事な船出でございました。

頼朝は、船の胴の間に坐つて、誰が見ても、敗戦の大將とは見えぬほど、きつと、凛々しい顔をしてゐました。それが、今、船を漕出さうといふ間際になつて、急に暗い顔をして、何か、しきりに、鬱込むでゐました。

「實平、船中に供をしてゐる人数は何人であるな。」頼朝は、傍にゐる土肥の次郎實平に向つて、ふいと、かう訊ねかけました。

實平は、「變なことを聞くものだ」と思ひましたが、すぐに「左様でございます。御覽の通り、七人でございます。」と、答へました。

「七人か。すると、頼朝を数えらると、八人になるな。」
「左様でございます。」

「それは可かん……ム、きつと思出したことがあるぞ。祖父の六條の判官爲義が、九州へ落ちて行かれた時も、八人であつた。それから、父義朝が、平治の戦に打敗け、江州から尾張へ落ちて、長田の無道人に、お頭(首のこと)を渡された時も、やはり、八人であつたぞ。八といふ数は、源氏に崇る。大事の船出に、八人は不吉や。實平、よきに、はからうと、誰か一人を船から下ろせ。」

と、きつと言渡した。

「はッ、心得申した。」

と、實平は、つつと立ちあがつて、船中の人々の顔を、次から次へと、静に見廻しました。そして、

「艦の方に居らるゝはッ。」

と、よば／＼した、岡崎の四郎に呼びかけました。

「義實でござるよ。」

「岡崎殿か。」

と、云ったきり、實平は、うつむいて、じつと考
込むで丁ひました。「ア、困ったことが出来た。こ
の人たちは、いづれも、大將のために、屍を枯野の
末に曝さうと覺悟して、こゝまでお供をして來たの
だ。さて、誰を此の船から下ろさうか。」

と、困りきつて、顔を凝め、ぐづ／＼して居りま
した。

「こりや實平、何にを愚圖々々致し居る。疾く／＼
おろさぬか。あれ、聞け、山陰に人聲が聞こえる。」



多分大庭の追手であらうぞ。」

と、頼朝は、いら／＼して、急ぎたてました。

なるほど、その時、日の沈み行く山陰から、わや
わやと、夥しい人聲が、風につれ、浪の音に打消さ
れながら、斷々に聞えて來ました。實平はいよ／＼
その敵のなかに、誰にもあれ、見棄てゝ行くことは
出来ないと思ひました。

けれども、大將の云渡しではあり、また、敵が目
の前へ近づいて來てゐるのです。ぐづ／＼してゐて
爲義や義頼のやうに「八」の數に崇られて、こゝで
残らず、討死して了つてはならないと思ひました。
で、きつと、心を勵まして「いかに、岡崎殿。大將
の御ン仰せでございます。御ン年に面じて、急ぎ、
船より御ン下りくだされぬか。」

と、ていねいに云ひました。

義實は、さつと顔色を變えた。「何んと、某に、此
の船より下りよと云はるゝか。」

の老武者にてござる故、かい／＼しく大將の御用に
立つまじと思はされて、左様に仰せあるか。」

と、義實は、白髪のを振り立て、鎧の草摺をた
たいて、頑張りました。

「いや／＼、左様な儀ではござらぬよ。和殿が、艦
の方にあられて、陸が近うござるによつて、申した
までぢや。」

「いや、左右うに及ばず、此の船より下りよう者は
命を二ツ持ちたる者とお定めあれ。」

「命を二ツ持ちたる者と云はるゝは？」

と、實平は、不思議さうに問反しました。

義實は、ハラ／＼と涙を落して「さればでござる。

某も、昨日までは 命を二ツ持ちたれど、はや一
ツは大將に差上げ參らせて、今は只一ツになり申し
た。」

「と、仰せある云はれは。」

「御ン聞きあれ。昨日石橋山の合戦に、某が一人子



「いかにも。」

實平は、うなだれて、眼を瞑つて云ひました。

「これは、思ひもよらぬ。八人のうちにて、某、一

眞田の與一義忠、俣野の五郎景久と引ッ組むで、組敷きはしたれど、俣野の郎等が二人まで駆付け、一人は足にて蹴倒しながら、武運拙なく、遂に、一人に討たれ申した。残るは老の一つの命……いや、和殿こそ、此の船に、親子一緒にお在る。和殿、残ッて、遠平をおろさるゝか。遠平、残ッて、和殿が下りらるゝか。いづれをも、一つの命を御ン棄てあれ。」

實平は、理づめの此の言葉に顔を赤くしました。「御尤の仰せである。餘りの御ン道理、もはや何にも云はるゝな。いかに遠平、大將のお言葉であるぞ。急ぎ、この船を下りよ。」

「これは、父上」と、遠平は、不服らしく、唇を尖らせた。「遠平は、稚き者ではあるなれど、大將の御ン大事に立たうと存すること、誰にか劣りましうぞ。いえ／＼、いかに仰せられても、船よりは。」
「下りぬと申すか。」

と、聲を荒げ、太刀の柄に手をかけてつツと、遠平の方へ進みました。

「やれ、待たれい！」と、義實は聲をかけました。「芽出度き大將の御ン船出であるに、血を見ることは、不吉でござらうよ。誤られな、實平。」

「オ、これは某、誤り申した。いかに、とても下りぬと申す者を下ろさうより、某、船より下り申すべし。」

實平は、情れきツて、爲方なしに然う云ひました。遠平は、びつくりして、父の方へ、つツと寄ッて鏡の草摺に取りすぎりました。「いかに、父じやが下りると仰せあるか。」

「いかに、大將の御運の開くる御ン爲であるぞ。」と、實平は、我が子の手を拂ッて、體の方から下りようとする……

遠平は、慌てゝ、今度は、父の鏡の袖に取りつきました。「父じや、父じや……まづ、御ン待ちあれ。」

「いかに。」

「おのれ、小ざかしきことを申す奴かな。大將の御ン爲め、父が指圖であるぞ。」

と、實平は、きツと、きめつけた。

「いえ／＼」と、遠平は、頭を振ッて「たとへ大將の御ン爲め、父じやのお指圖でござらうとも、いかにしても、此の船は。」

と、遠平は、さしうつむいて、心苦しうに、齒を喰ひしはる。つや／＼した髪、その髪が、肩さきから腮のあたりへ流れたすきから、涙の煙くが見えました。

實平にも、今一度、大將の爲めに、花々しく戦ひたいといふ、遠平の心もちが、よく解りました。で「可哀さうだ。」と、胸が一杯になッて來るのでした。が、義實に對しても、そんな様子は見せられせん。「やア、言語同斷。父の指圖を背くと申すか。その儀ならば、人手には掛けぬぞよ。」

遠平、誤りて候。いづれの道も、大將の御ン爲め、遠平、船より下り申さん。」

「何んと、下りるとあるか。ム、いしくも、申しつるよ、實に／＼、今こそは、某が子にてあるぞ。」

と、實平は、我が子の手を固く把ッて、眼をしはた／＼。涙が、ハラ／＼と落ちた……

その時、まだ其の姿こそ見えなかつたが、わやわや云ふ人聲が、もう間近に聞こえて來ました。

實平は、涙をはらッて「あれ／＼、はや、大庭の勢が打ッて出づるよ。某が子と名のツて、いさぎよく討死せい。心得たか。」

「はッ。」

「名残こそ惜しけれ。」

と、實平は、靜に、我が子の手を放しました。遠平は、すぐに船の體から、波打際に飛んで下りました。頼朝を始め、船の人々は、いづれも、うなだれて「親子の別れ、いたはしや。」と、二人の心を思ひ

やり、鎧の袖を濡らしてゐました。

「とく／＼船を御ン出しあれ。」

と、實平は、弱氣を見せず、きつと云ひました。

新開の次郎は、心得て、手早く綱をといて、櫂を抜く。船は、ゆらりと、浪に乗って、波打際を離れました。

まだ、十六歳の蓄の若武者——遠平は、砂の上に着くまうて「父じやの別れは、申すに及ばず、御ン大將を始め参らせて、皆、人々に御ン名残こそ惜しう候へ。」

と、呼びかけました。

「御ン名残こそ惜しう候へ。」

と、義實を始め、船からも呼びかへしました。實平は、一度、後を振向いて見ようともしませんでした。新開などは、す／＼り上げて、泣きました。

船は、浪の上に、ゆらりと浮いては、また白浪にさつと沈み行く、夕風、や／＼荒くなつて、日は薄れ

一三六
鳴が飛ぶ。遠平は、汀にたゞすむで、じつと船を見送つてゐました。けなげに、雄々しくはしてゐてもどこやらに打慚れた姿は、どんなに哀に見えたことぞございましょう。

船は、だん／＼に沖の方へ漕いで行きました。「今は、心安けれ」と、振りかへる後の崖に、浦波ならぬ鯨波の聲が、どつと上がつて、大庭の勢の三百騎ほどが、えい／＼、えい／＼と、濱へ駆け下つて来る。遠平はきつと、見ると、太刀をスラリと引きぬき、三百騎の眞つた中を目がけて、傍目もふらず駈向つて行きました。

すはや遠平は、討たるゝとて

頼朝も、あはれみ、陸を

見給へば、さすが、實に

恩愛の契も、たゞ今を

限りぞと思ひ、實平は

磯邊に向ひ、人、知れず

心の、ま／＼ならば

あはれ、遠平と一

所に

討死せばやとあこがれて

飛立つばかりに思子の

別れぞ、哀れなりける……

三

行方定めぬ、船路かな

沖なる、浪の音までも

関の聲かと、恐ろしや

黄昏の海の上には、まだ薄明りが残つ

てゐました。頼朝等の船は、遠平が只一

人、勇ましく敵の中へ斬込むで行くのを

見ながら、眞鶴ヶ崎を遡つて、安房の方



へと漕ぎ急がせました。もう、敵の姿も見えませんが、鯨波の聲も聞こえなくなりました。

すると、今しも、彼方の磯の蔭から、現れた一艘の船。

それが、こちらの船を目がけて、

『おい、おい。いかに、それなる船に、物申す。』

と、呼びかけ、急ぎに急いで漕いで来る兵も、だいたい乗ってゐるやうでしたが、どうも敵の船とも思はれませんでした。

『いかに、それに見えたるは、御ン大將のお座船にてはなきや。』

やがて、その船から、さう云ふのが聞えました。

『して、それなるは、誰が召される船ぞ。』

と、實平は、舷に突ッ立ッて、たづねました。

『まづ、そなたより御ン名告りあれ。』

と、かなたの船で答へました。

『これは、土肥の次郎實平が、乗りたる船に候よ。』

す。

『何んと、御ン大將は、其の御ン船には在さぬと仰せあるか。』

『面目もなき儀でござるよ。』

と實平は、情れて、さも「真」らしく云ひました。

『や、や、何んと仰せある。御ン大將には、その船に在さぬとか。』

と、義盛は、力も、張りも、抜けて了ッたやうに、タジ／＼となりました。

そして、

『某味方に別れ、今また、月とも日とも頼み参らする御ン大將にも離れては、命ありとても、何にかせん。いで、自害を。』

と、どツと坐ッて、腰の刀に手をかけました。

『やれ、御ン待ちあれ。今は何にか疑ひ申さう。御ン大將には、此の船に在するぞ。』

と、實平は、慌て、呼びかけました。

『何んと、土肥殿の船と仰せあるか。』

『いかにも。さて、御ン船は。』

『これは、和田の小太郎義盛でござるよ。』

『何んと、和田殿とか。』

『義盛にて候よ。かねて、内々、和殿まで申し通せし如く、御ン味方に参らん爲め、たばかりて、大庭の手に加はり、只今、やう／＼是まで参り申した。さて、御ン大將には、その船に在するか。』

さういふうちにも、双方から、船と船とを、だんだんに漕ぎ近づけた。

何んと思ッてか、實平は、少らく返事をいふつてゐた。

『いかに御ン大將は。』

と、義盛は、急込むで、問反した。

『申合はせたる如く、これまでの御出陣、芽出度うござる。さりながら、昨日の暮方、御ン大將を見失ひ、かく、浮かれ舟となつて、御ン行方を尋ね申

『何んと、それなる船に在するとか。』

『いかにも。まづ／＼、それなる船を、急ぎ、こなたへ御ン寄せあれ。とも／＼に船をば、陸によせてかしこにて、芽出度う御對面あらうするよ。』

『心得申した。』

と、義盛は、船板を鳴らして、躍上がつて、悦びました。

濱に篝火を焚いて、そこに、頼朝の主従七人と、味方に加はッて來た義盛と、そして、其の郎等とがづらりと居列んで、對面の式も、芽出度く終りました。

『御ン大將を見奉ッて、某、命を拾ひ申したよ。』

と、義盛は、心の底から勇氣と悦とが満ち溢れるやうに云ひました。

『實に／＼。海の上にて、互に、めぐり遇ふたは、八幡殿、まッた、父義朝の御ン導でもあらうよ。』



と、頼朝も、はれ／＼しい顔をして云ひました。
『いかに土肥殿。この悦とあるに、只一ツ、心得ぬ
は、此の御子供のうちに、何にとて、御子息、遠平
の在さぬぞ。』

と、義盛は、ふと、氣づいたやうに、軽く、不審
を立てました。

實平は、目を伏せて、じつとなりましたが、直ぐ
に、

『いさ、か所故あつて、眞鶴御ン船出の時、遠平の
みは、陸に残し申した。』

『何んと、陸に残されしとか。一人にて、大庭が勢
を引受けよとてか。さても、ようこそ。』

と、義盛は和りと笑つて、
『その御心のいとほしさに、義盛、土肥殿に引出
物参らせん。』

さう云つて、義盛は、つツと立つて、波打際に繫
いだ船の方へ行きました。そして、船の底から、遠

平を引出して、一緒に、篝火に近いところまでやつ
て來ました。

『や！ 遠平にてありつるよ。』

と、頼朝は、まづ、呆れて、聲をあげました。

實平も、はツとして、これは、いかに、夢か、幻
かと、覺えず立ちあがると、跟くやうに、遠平の傍
へ駆けよつて、その手を、しツかと握りました。そ
して、

『よくぞ、存へし……』

と、言葉は、もつれて、只、涙のみが、ハラ／＼
ハラ／＼と零れました。

『義盛、いかにして、それなる者を召連れつるぞ。』
と、頼朝も、實平父子の「悦の涙」に打たれて、眼
を湿ませて云ひました。

『さん候ふ。遠平を伴ひ申したる謂はれを、御前
にて、申上げようづるにて候』と、義盛は、頼朝の
傍近く進みました。そして、うや／＼しく頭を下げ



『いしくも、爲つる。』
と、頼朝は、いよく、はれ々しい顔になりま
した。
『遠平が、生きて歸ると云ひ、かく芽出度き折から
に、酒を汲まうよ。』
『かしこまつて候。』

心うれしき酒宴かな。酒宴かな。
 と、頼朝は、扇で拍子を取つて、静に謠ひ出しま
 した。遠平も、義盛も、それに、つゞいて『心うれ
 しき酒宴かな、酒宴かな』と謠ひました。
 潮風に煽られて、篝火が、どんどくと燃える。
 ど、ど、ど……ど、ど、どと、涙が鼓を打つ。實
 平は、扇を、さつと開いて、くるり、くるりと舞ひ
 ました。

と、頼朝は、扇で拍子を取つて、静に謡ひ出しました。遠平も、義盛も、それに、つゞいて『心うれしき酒宴かな、酒宴かな』と謡ひました。

平は、扇を、さつと開いて、くるり、くるりと舞ひました。



讀者だより

▼水々しい若葉に美しく飾られた初夏となりまして、齊藤先生始め皆様御一同の御健勝と、金の星の御發展を御喜び申し上げます。扨て先日は小生入選作に對し、多大の賞金御贈與下されまして誠にありがたく御禮申上ます。(千葉縣堀切ともし)

▼お、六月號！ 何んと立派なものだらう。立派な文章をもつて充満して居る。この意氣をお願ひします。私は雅説を呑みとしましからうとしく。齋藤先生此れは私

の意氣のこもつた童話です。よく御覽下さい。(吾平)

▼私も下手な作文童話等を捜書し
ます。いつも金の星が来る頃には
眞さきに書店へかけつけて發表の
欄を見られるけども、いつも掲載外
佳作にのつてゐるので、せいに落
しします。これからよろしく頼み
ます。(山口縣 浅原精次)

▽掲載外佳作に、お名前が出ました。さうで、お芽出度うございませう。僕ながら五へん投書したうちで、たつた一度だけ、佳作欄に載つたさうなんです。僕は編輯部にゐる人だから、トクベツにして呉れない、ばい。の。に。(給仕)

▼六月號の表紙は大變氣に入りました。最も面白かつたのは、「おい泥棒さん」「ルオンと涼也」「一月昔酒」「古切雀」等でした。外にも還山ありました。それから日本の神代のお話をのせて下さい。(柳町彦男)

▼金の星の先生方。葡萄畑（十尾なかば）にはぜひ見物に來て下さい。僕の家の葡萄畑へは十一年の十月八日に、東宮様が行啓なされました。（山梨縣祝村 雨宮恒文）

▼若山牧水先生。僕の幼年詩を

番に出して、ださつてほんとにあり
がたとうございました。うれしく
てたまりません。これからも、も
つと出しますからどうぞよく見て
下さい。それではさよなら。朝鮮
河野浩

▼久しぶり童話童話から去つて居ま
したが、前より以上の力をもつて、
研究に従ひたいと思ひますから、
どうぞ、充分の御指導をお願い
申します。島田 信 一生
坂翠華

▼私は世界童話誌からの愛讀者で
す。諸先生並に讀者諸君、宜敷お
指導を願ひます。私の様な拙ない
作が選外佳作で、野口先生のお厚情
を深謝します。臺灣總督府内 保

衣五吟 先生
▼皆様 貴氣如宜しうございます
小夜川 光 一生 か。私は再び本誌によつて、児童
文藝の研究をすることに致しな

▼月曜日の白毛に、佳奈の髪が
で、かげきにして見たくなりまし
た。おとせんせいになのりて舌
切歯をしてみんなをびつくりさ
してやろうと思ひます。和歌山
（笈定庵）

▼日々榮えゆく我が金の星よ。
どこまでも児童文藝誌として恥
ない様に、愛讀者をすべて努力致
さるべし。古賀 水

▼私は前にも金の星を望んで居いました。投書は初めてです。皆さんよろしくお願ひ致します。さようなら。(埼玉縣 野村せつ子)

▼私は震災前からの讀者でございます。是震なのに、ちつとも皆様に御あいさついたしませんでどうぞおゆるし下さいませ。これからほどよく投書いたしますけれどもうそ、ぼつにしないで下さい。六月

▼あつくなりまして。私はこの六月號から讀者になりました。ついでに圖畫を投書するとき、私は紙をはかきと同じ大きさで書きまして、これでよいのかわるいのかお知らせ下さい。東京 白田新太郎

▼圖畫はなるべく、畫用紙か木炭紙の大きいのにして下さい。(保



信 通

自由畫選評

山 本 鼎

▽岩谷天藏君の「春の海」面白味のある繪です。前景に屋根を取り入れた構圖もよく、緑の島もよくかけて居ます。船が少し幼樂園の生徒のかいた船のやうです。それから海の色が、もつと深い色になるとよかったです。

▽中坂石次郎君の「赤羽」は、景色のとおり方も面白く、色も意味があり落着いた感じはい、が、少し色を水で流して居る。もつと描くやうに描いてほしい。中景の小山や、左手の小山のやうに筆が生きて居てもらひ度い。空や木、緑や、土坡の處のやうに流れて死んでしまつてはいけません。

▽岩谷笑花君の「サイトウセンセイ」巨勢ひのあるクロツキイだが、もつと形態の自然をよく眼に入れて筆を走らせなければいけない。

▽田中省二郎君の「新緑の風景」立木がよくかけて居る。色も死んで居ない。テッサンも悪くない。家は弱々しく夢のやうだ。

▽武藤壽幸君の「木の葉」の寫生、形はなかなかたしかに描けて居るが、少し標本繪のやうになつた。もつと大きな紙にのび〜とお描きなさい。

▽加藤正文君の「類」のデッサン手なれて居るが生硬だ。もつと圓味が現す自然の濃淡に目をとめて御覽なさい。(十四年六月)

童話の選後に

齋藤 佐次郎

▽今月は少い割によい作が澤山に集りました。たゞ少年少女の作の方は相變らず、作がなくていけません。どうか一生懸命に書いた作を見せていたゞきたい。

▽大胡徳郎さんの「ひき蛙の死」と三浦大船さんの「二つの岩の路」の二篇を推薦作に擧げました。まだ此の外に荒井正巳さんの「化けくらべ」島田信一さんの「乞食の死」藤野ふえなさんの「ものを云ふ紙」青柳一雄さんの「電車と汽車」松井雅夫さんの「こいくりよ谷」など何れも、作です。これ等の中にも是非推薦したい作がありますから、後補作として擧げて置きます。

▽「ひき蛙の死」は最近に推薦した作の中でも

目立つてゐる作です。詩を持った描き方には十分讀者をひきつける力があります。蛙の死骸が子供等にききなれる有様を寫した處も面白いが、最後に、蛙が懷れながら目指して遂にそれが何物であるかを知らずに死んで了つたそのものが、月である事を示したあたり特に巧みが見られます。此の作者の將來を期待します。

▽三浦大船さんの「二つの岩の路」は材料の面白から採りました。表現には不十分な處が、到る處にあつて、折角の面白い話を殺して了つてゐるのが、残念だと思つたので、多少の加筆を加へてあります。作者の御了解を乞ふ。

▽荒井正巳さんの「化けくらべ」は面白く讀ませます。この作者は馴れ過ぎて時にぞんざいに書き過ぎる事がありますが、此の作などは題材を適當にこなす筆の妙味があつて大變によい作です。

▽島田信一さんの「乞食の死」も、作の一つです。たゞ最後の乞食の少年の死の處だけはもう少し何とかならなかつたでせうか。一寸型にはまりました。その外の點は結構です。

綴方の選後に

齋藤 佐次郎

○この頃はいつも女子の方にいい作が澤山に

出來ます。男子の方は一向に振ひません。これはどうした譯でせう。今月なども、大部分は女子の方に入選作を當はれました。しかも入選作の中でも、女子の方が大抵優れてゐるんですから、全く困つたことです。

○先づ入賞第一席の山本ひささんの「お祖母様をお送りして」に就て感想を述べますと全體に感心しない程度によく書けてゐます。殊にいよいよお祖母様が四國へ歸られる

『金ノ星』誌友募集

「金の星」の誌友を募集いたします。誌友にはいろいろの特典と便宜とがありますから、御希望の方は本社宛に規則書をお申込み下さい。今度より三ヶ月分以上の直接購讀者に對しても、誌友のお取扱ひをする事となりました。

ころが大層よかつた。男子の持つてある鋭さを示してゐました。しかし、終りの方は一向振ひませんでした。

○非彌正子さんの書いたものは胸がスツとします。本當に生き／＼してゐます。私はこの人の書いたものにも四五年前から見えてゐます。随分面白くものを見せて貰ひました。大抵な人は今頃は、下手になつて、妙になまいきなものを書いて駄目になつて了ふのです。

が、この井關さんは相變らず生き生きとした、作を書きます。いつまでもこの調子を忘れないで下さい。

○加藤正子さんの「京人形」これもいい作です。よくまとまりのある落着いた書方は誰でもまねていい作風です。

○河野正三郎さんの「夏の午後」。朝鮮の町の氣分をうまくとらへました。

○萩原シズさんの「目いばの屋敷」は先づ題の

面白さが氣に入りました。まじめに丁寧に書き方なして結構です。上手に、氣のきいた書き方なしと思はないで、かういふ風にどこまでもまじめに、丁寧に書かうとしてゐるのは、まことに、感じを興へます。

○中西静夫さんの「馬鹿らしかつた夜」まづ無難な作。

○小口まき子さんの「種時」。この作も井關正子さんのと同じやうに胸がスツ作です。讀んだ後本當に氣持がいい。

○三方シヅ子さんの「げんくわ」。よくそれを寫してゐます。上手だと思はれます。

○逸見宇市さんの「雨晴れの午後」。小野塚柳子さんの「私の猫」末廣朝人さんの「げんくわ」末弘権代さんの「すゝめ」など特記だけのいい作でした。(以上)

編輯室より

○懸賞募集の歴史を話せば、例によりて熱狂的大多數の應募がありました。いづれも力の入つたいい作ですから、九月號は皆さんからさぞ大歡迎を受ける事と、記者一同大馬力なかくて編輯に努力したてゝあります。

○三井先生の四つの函「函」がいよいよ今月號より現れました。譯者も岡本先生にお願いいたしました。「嘆きの薔薇」にもさき名作です。から、やんやといふ喝采をせう。

○本月號は久米正雄先生や三島雅川先生の大作が掲げ、本誌獨特の誇りを發揮しました。

新らしく出た本

■世界童話叢書

第三編 三 編ろしあ童話集
(永橋卓介氏編、高坂・園田兩氏監修、
さし絵)

支那、童話集、印度童話集に、次いで出た本
篇は、ろしあ童話のうちに、珍らしい特色の
あるものばかりを、集めたので、編者が力を
注いだだけであつて、なん度讀んでも、讀み飽
きのせぬ面白さ、それに装幀とさし絵の立派
なことは、前二集にも劣らぬ出来栄へで、全
篇その國の氣分が漂つてゐるのは、さすがに
出版者の、骨折りが現れてゐる。四六判箱入
美本、三〇八頁、定價壹圓五拾錢、東京市外
上駒込二八、金蘭社發行

■源平盛衰記 (中西悟堂氏著)

源平盛衰記は、皆様の御存知の通り、二條
天皇の應保年間から安徳天皇の壽永年間に至
る凡そ二十餘年の間の源氏と平氏との盛衰の
跡を記したものであります。本書は、その源
平盛衰記を本にして、少年少女諸君の爲めに
判り易いやうに書かれたもので、一つには皆
さんの歴史の参考書ともなり、一つには皆さ
んの爲めの面白い讀物となるやうにと心掛け
られてあります。長き課外の讀物です。三五
判箱入二三四頁、定價八十五錢、東京日本橋
區元大工町一、紅玉堂書店發行

■童話集 螢のお宮、山内秋生氏著

螢のお宮。螢のお宮。なんと云ふ可愛らしい
名前であらう。全くこの本の中には、螢のやう
に可憐な、美しい物語りがばかり、十二篇も集
めてあります。昔、著者が過去十數年間の創
作童話の内から、撰み出したものに、押
し、押されぬ立派なもの。一篇ごとに市
目敏行氏の清新なる挿繪を入れ、装幀は子供
諸君におなじみの深い木田庄太郎氏が力を入
れたものに、眼の覺めるやうな美し
さです。四六判箱入一七〇頁、定價壹圓、東
京神田多町一丁目、精華堂書店發行

■奴隷トム物語 (金の星社編)

いよ、お特製の奴隷トム物語が出ました
皆様は奴隷と云ふものを御存知ですか。同じ
人間でありながら、牛か馬かのやうにお金で
買はれて、朝から晩まで酷たらしく追はれる
哀れな奴隷。トムはこの奴隷の身に生れまし
たが、まことに心の素直な、おとなしい男で
あります。主人からどんな非道い目に遭は
されても、決して怒みを云はなげかりか、
かへつて自ら進んで、自分の周囲の人々を、
より善く感化して行かうと云ふトムのけなげ
な心。一度本書を御覽になつた方は、皆トムの
美しい心情に感激して、涙なきを得ません
まだ御讀みにならない方は、是非早く御覽下
さい。(定價九拾錢 本邦郵政切金の星社發行)

自由靈掲載外佳作

豊島 泰山(山梨) 河野 祇吉(朝鮮)
白田新太郎(東京) 永瀬 幸子(岡山)
石橋晋太郎(青森) 北村 正子(東京)
西脇 國雄(愛知) 河野正三郎(朝鮮)
武蔵 壽平(山梨) 加藤 守三(廣島)
川島 深望(長野) 岩谷 貞三(秋田)
岩谷 英花(秋田) 波多江正雄(福岡)
桃井 正巳(長野) 雨宮 恒之(山梨)
齊藤 惠美(東京) 深野小太郎(東京)
種谷 昇(長野) 沖田外喜治(北海道)

幼年詩掲載外佳作

山川 三三(山形) 林 長三(山形)
齊藤 きよ子(千葉) 岩谷 貞藏(秋田)
木下フサ子(福岡) 勝呂 勇治(千葉)
岡崎 よす(山形) 金子半兵衛(山形)
伊藤アサノ(山形) 鶴岡 きん(千葉)
森 くら(千葉) 清水 信夫(千葉)
飯田 文吉(茨城) 山野井繁雄(茨城)
高野 榮(福岡) 富安かなる(福岡)
石澤金重郎(山形) 吉田 忠雄(山形)
中野 弘(北海道) 山本千代治(和歌山)
矢崎 長三(山梨) 津金 綾子(山梨)
大柴 敷山(梨) 深野小太郎(東京)
小林 茂樹(山梨) 木村ユキ子(不明)
下井 小萩(長野) 杉山ヤン子(東京)
高橋 勝治(山形)

綴方掲載外佳作

石澤 ヨシ(山形) 杉原千可子(千葉)
雨宮 恒之(山梨) 細谷 昇(熊本)
土屋 男三(長野) 中里 政一(神奈川)
中西 静夫(三重) 三方シヅ子(福岡)
逸見 朝人(山口) 小野崎柳子(東京)
末廣 朝人(山口) 岸 久子(東京)
廻谷 昇(熊本) 井原 隆樹(島根)
進藤 卓藏(秋田) 岡本 徳子(東京)
吉江 フサ(福岡) 浅原 結次(山口)
上沼イトエ(長野) 海達 公子(東京)
山内 繁新海 舟田 静夫(長野)
西野 虹路(岩手) 舟田 静夫(長野)
南保三津男(東京) 本内 恒芳(長野)
川島 深望(長野) 増田 三郎(香川)
森本 康雄(熊本) 藤野 健二(福岡)
水野 幸子(不明) 一瀬 菊子(福岡)
土家 かふ(福岡) 山下 政喜(熊本)
木谷 知夫(富山) 間山喜美子(福岡)
中尾 喜久(茨城) 久保木三郎(千葉)

童話掲載外佳作

荒井 正巳(福岡) 藤野ふく(大阪)
島田 信一(東京) 青柳 一雄(神奈川)
松井 雅夫(福岡) 水島まさ子(京都)
鈴木 登英(茨城) 田中 雄三(石川)
軍司 麗水(茨城) 石川 保武(東京)

童話掲載外佳作

春野みどり(東京) 乙坂三之生(山形)
永野 春雄(東京) 川井田十路(秋田)
長谷川行雄(東京) 西塚文雄(北海道)
永田 雅一(長崎) 高村しげ(東京)
佐土原銀洋(不明) 伊藤 吞平(愛知)
松岡 城峰(山口) 森 星児(岐阜)
阿部 和子(宮城) 若林 武子(東京)
茶木七郎(神奈川) 竹田八千代(東京)
河野龍児郎(山口) 伊藤 賢一(愛知)
遠藤 政男(富山) 石川十三子(宮城)

【子供篇】

五味く(三山梨) 軍司 麗水(茨城)
高橋長一郎(青森) 山川てつみ(熊本)
田中 雄三(石川) 茅野 卓雄(山梨)
長内 俊雄(愛知) 長内 俊雄(愛知)
木谷 和雄(秋田) 中尾 喜久(茨城)
綿貫 安三(群馬) 坂本 俊信(山梨)
大家要一郎(歌山) 若林 廣枝(東京)
進藤 正雄(秋田) 日向野良一(茨城)
山下 政喜(熊本) 井上 秀治(茨城)

新誌友名簿

森 ひさ子(朝鮮) 桐澤 峻一(東京)
武蔵 よし子(臺灣) 山岡 静子(岡山)
吉田彦太郎(福岡) 宮田 清廣(島)
早川 春雄(秋田)

厚岸小学校尋四女 (北海道)
小池 健夫(東京) 三ヶ島小学校 (福岡)
第五六學年(福岡) 高森 淳夫(宮崎)
遊行寺日曜學校 圖書部(神奈川)
安保 宏(臺灣) (以下次號)



金の星社 八月號

出版だより

一四八

近刊

金の星童謡曲譜集(9)
本居長世先生作曲
野口雨情先生作謠

名所めぐり

本居先生と野口先生の苦心にな
る童謡『名所めぐり』は、各方
から非常な期待を以て待たれて
いましたが、近日いよいよ發行さ
れる事となり、目下その準備中
です。名所めぐりの童謡は日本では
初めての企てであり、又全国の
少年少女に唱つて貰ひたいもの
であるだけに、作家の側でも非常な
苦心をなされ、訂正に訂正を加へて
工夫をこらして居られますから、
發行のあかつきは、さぞ大評判の
こと、思ひます。

武井武雄先生著並書

ブウ太郎

鍛冶屋

第四版を特價版
として金壹圓で
發賣!

家なき子

第七版發賣!

『家なき子』は發行以來熱烈な歡
迎を受け、一年餘りの間に六版ま
で發賣いたしました。そして、今
度いよいよ第七版を發賣すること
になりましたので、この版より一
層紙質と裝幀に改良を加へました
『家なき子』と兄妹篇として書棚
に飾られたら、さぞ注目される事
でありませう。

沖野岩三郎先生著
童話讀本(2)

金の釣瓶

模範的圖書として推薦されてゐ
る『金の釣瓶』は、今や各地の小
學校から課外讀本として使用され
るまでに好評を受けて居ります。
第一編の『赤い猫』が既に全国に
行且つて、愛讀されてゐますので、
『金の釣瓶』の發行は、多大の期待
を受けて居ります。
第一編の『赤い猫』も、近く四
六判型にして改訂の上重版いたし
ます。

左の二書は都合上

八月下旬に發行

されます。

世界少年少女

名著大系(18)

ギリシヤ

英雄物語

沖野岩三郎先生著

日本の兒

童と其の

藝術教育

讀後感

小島先生の

『狼少年』

小林 重義

淡水色の軽快な表紙。表紙繪は
狼少年モリグリの勇猛 活躍姿。
口繪挿繪は親切なもの。先づ寺内
先生の裝幀に魅せられる。
狼少年を讀んだ誰かが大きな智
識を得たことを喜ぶにちがいない。
い。そして讀んで行く中に誰でも
が魅せられるだらう。狼・熊・狐の
親切。事件は奇から奇へと夢の様に
展開する。

附録。これも勇敢に自分等の新
天地を開いた白あざらしコチツグ
の話。どんな羽根ぶとんよりもや
はなかい波を縫床に、白あざらし
の生活がこちらやましくなる。
(日暮里町六七六 野村方)

『ロビンソン漂流記』 を讀みて

湊 三七吉

ロビンソンが艱難して無人島に
着いてから……やうやく家らしい

岩屋のやうなものにすんで少しは
かしの牧場を作つた所から……今
まで無人島と思つた自分の島の砂
上に怪しい足跡がある! それか
らいよいよ冒険は開かれて主人と
の大戦闘をすると言ふ……血わき
肉踊る所もあれば涙ぐましい所も
ある。ほんとうに僕は、一息に讀
んだ。何處讀んでも面白い本はこ
れである。
(島根縣足郡津和野高町角)

『あの町この町』

與田 準一

中山晋平先生の御曲は、度々『金
の星』誌上其の他で拜見して居ま
したが、其の度に私は我を忘れて
うたつて居た程です。しかも、い
ぶい銅鑼座です。だがこれつばか
しも胸ざといふものが感じられま
せんでした。先生のまとまつた曲
集がほしいなと思つて居た矢先
幸ひ金の星社から御發刊のこと
中から申 込んだいたのです。
先生の曲には純然たる童心性が
流れてゐて、雨情先生の謠とびつ
たり離れられないものになつてゐ
ます。『あの町この町』を子供だち

『青い眼の人形』推奨

部外川 淳

『青い眼の人形』とて、素晴らしい
美本である。路谷氏の裝幀、先づ
目なうばふ。筆者は寺内氏の畫は
餘り好きだが、本書の口繪だけは
氣に入つた。挿繪では武井氏の
時に光つてゐる。野口氏の演繹は
人形を首め、上野のお山、呼子
島、守子唄、柱くまり、猿拾山、
鈴なれ鈴虫、秋の夜、赤い靴、螢
のあなひき、佐渡が島など優秀
作を舉げばきりがない。
筆者は責任を以て、童謡集を採し
つづある諸君に、本書をお推めす
(大阪市東成區中道町二八〇)

懸賞創作募集

【急 注】 童 童 【意 注】 綴 幼 自
 話 話 方 年 由
 …… 齋 野 編 若 山 本
 …… 藤 口 輯 山 牧 鼎 先生選
 …… 佐 雨 部 水 先生選
 …… 次 情 先生選
 …… 郎 先生選

【意 注】 童 童 【意 注】 綴 幼 自
 話 話 方 年 由
 …… 齋 野 編 若 山 本
 …… 藤 口 輯 山 牧 鼎 先生選
 …… 佐 雨 部 水 先生選
 …… 次 情 先生選
 …… 郎 先生選

定價壹冊金四拾錢送料壹錢五厘
 三ヶ月分三冊（送料共）壹圓二拾錢
 半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢
 一年分十二冊（送料共）四圓八十錢
 但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の際は、この分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

振替口座東京五九五六番

【意 注】 金 送
 △御注文は必ず前金で御拂込み下さい
 △送金は振替が一 番便利で御座います
 △切手代用は（登録切手）一割増しです
 △第何巻第何號よりと書いてください
 △住所姓名は必ず書き添えてください
 廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十四年七月九日印刷納本（毎月一回）
 大正十四年八月一日發行（一日發行）

編輯兼發行人 齋藤 佐次郎
 印刷人 小 端 安 之 助
 印刷所 東京市本郷區神田三丁目二十五番地
 東京市本郷區神田三丁目二十五番地
 東京市本郷區神田三丁目二十五番地

發行所 金 星 社
 編輯部 東京市本郷區神田三丁目二十五番地
 電話 小石川五三三八七番

金 星 社 發 行 の 著 名

沖野岩三 先生著 森の祈り （長篇物語） 四六判箱入美本 本文二四〇頁 定價金壹圓八拾錢 送料金拾貳錢	小島政二 先生譯 狼少年 （長篇物語） 四六判箱入美本 本文三二〇頁 定價金壹圓九拾錢 送料金拾貳錢	野口雨情 先生著 青い眼の人形 （童話集） 四六判箱入美本 本文二二〇頁 定價金壹圓八拾錢 送料金拾貳錢	三宅房子 先生譯 家なき子 （長篇名作） 四六判箱入美本 本文二七〇頁 定價金壹圓八拾錢 送料金拾貳錢	武井武雄 先生著 ブウ太郎鍛冶屋 （繪入童話集） 四六判箱入美本 本文三〇〇頁 定價金壹圓六拾錢 送料金拾貳錢
---	--	--	---	---

東京市本郷區神田三丁目二十五番地
 電話 小石川五三三八七番
 金星社

K2A-30

磨齒煉ンオイラ



効果^{きこう}がた^たし^しか^かで
 に^にほ^ほの^のい^いい^い
 あ^あち^ちの^のい^いい^い
 使^しひ^ひ心^{しん}地^ちの^のい^いい^い
 ライオン^{ライオン}ね^ねり^りは^はみ^みが^がき^き
 チューブ^{チューブ}入^入

「金の星」第七卷第八號

(大正十一年六月十三日)

大正十四年七月九日印

定價金四十錢 送料一錢五厘